

第八編 民 俗

第一節 年中行事

正月行事

正月は年中行事の中で最も重要な行事であつて、歳神の来臨を請うてこれを祭り、一年の農耕生活の安泰を祈らうとするものである。

年末に新しく家の回りの垣を作り、しらすを門口にまいて門松をたてる。門松には松竹、ゆずりはを立て、だいたい、うらじろ、木炭をつけたしめ縄を張る。辺田や三重野では門松は立てない伝承の家もある。また南麓の名越氏も立てない。錫山では門松を一本立てる所もある。床の間や先祖だには二段または三段重ねの餅を白紙の上ののせ、一番上にはだいたい、大きな里芋の芽の出しかけものを重ねて供える。ゆずりはやへご、こんぶ、またはするめ、えびを供える家もある。農具もきれいに磨かれて箆の上ののせられ、供え餅をして里芋やゆずりはも供える。

一日―早朝神社に初詣をし初日を拝む。親類や知人宅を年とまわりして新年の祝いをする。一日から三日ぐらいの間に宿屋をきめて親戚が集まって、より正月をするが中村では「里芋くう」とよぶ。

二日―塩祝、子供たちが塩を入れた手かごをもつて「初塩を祝つてくれ」と家々を回る。塩をもらつたらその代わ

りに餅や金包をやる。塩は盆または膳にのせ神だな、床、うまや、かま、井戸などに少しずつ供える。「二日山ふつかやま」といつて山に注連繩しゆめを張り餅や酒を供え、切ってきた木を七日までもやす。これを「年木とつ」とよんでいる。この日は早く帰ってくる。「二日風呂」をわかし、初風呂として身体を清める。二日は子供たちは若水をくんで書初をする。三日まで正月三日といつて年始の礼にまわる。四日は仕事はじめて初荷の車が動きはじめ。

六日―六日の晩を六日年という。だらのきのとげのある枝と、もろむぎの実つきの葉とを床、先祖だな、仏壇、神だな、墓に供える。だらのきのとげで厄やくを払い、もろむぎの実を燃やすとばちばち音がするので鬼を払うといわれ、もろむぎは常緑樹でいつも生き生きしているので松の内が過ぎた六日の夕方供えるといわれる。

七日―七日正月とか七日節なんかんせつといい、各家では七日ずし雑炊を作り、七才ななさいになった子供が晴れ着をきて、七軒の家の雑炊を貰つてあるく。七草ななくさもれ貰ともいって、この夜祝いをする。七草の種類については色々説があるが、鎌倉時代の七草は、せり、なずな、ははこぐさ、はこべ、おほぼこ、なずな、すずしろ（大根）の七種となつているが、今ではあり合わせの七種に餅を入れている。

「おねっこ」七日の早朝、部落の子供組で「おねっこ」をたく。正月の注連繩、門松、竹等を貰い集め、六日の夕方道のほとりなどに十字の穴をほつてつみ、七日の早朝燃す。火の勢いのつくのを見てよろこび合ひ、竹のはじける音で鬼を追い払うのだといい、竹の先に餅をさして焼いて食べると無病息災といい、この火に温まると無病だといひ、大川内おほがわうちでに、紙に一家安全など文字を書いて鬼火にもやしたといひ。

十一日―「先祖祝い」といって供え餅を下ろして煮てたべる。

十四—十四日年と言ひ、十五日の満年もちとしの前日で新しく餅をつく。メノモチをつくり、榎えのきか柳の枝にさして、部屋の間柱の上や先祖だな、仏壇、神だな、墓に供える。これは蚕の成育を祈願し、養蚕の盛んな時代谷山一円で行なわれた。馬小屋にも供えた。この榎の枝は保存しておき、雷の日に燃せば雷除けになるといふ。この日ねこやなぎ（かっぱ）、あおぎり（いつさつ）、はぜのきで、けずりかけといつて皮をはいだ白い枝を、薄く細長く半ばまで削りかけ、花のようにちぢらせまた巻き上げさせて、戸口、神だな、仏壇、墓などに供える。紙が普及する以前は御幣として用いられ、今は衰えて小正月の飾り物として残留している。これは作物がかくあれかしと祈る呪物であり、また神の依代として用いられたものらしい。錫山地方は以前から供えなかつた。この日、子供組の男の子は「はらめうち」を行なう。十四日の夕方子供たちはいぬびわや榎の木で作つたはらめんぼーとよばれる一米ほどの棒をもつて、昨年中に嫁を貰つた家に行き、「嫁女をくいやいや、壁をくいやいや」と言ふ。最初嫁女をやるといつたら嫁女を引き出し、壁をくるといつたらこれをたたきこわす。壁は木戸に竹や木を使つて丈夫に作る。これが終わると子供たちは家へ上げられ、なます、かずのこ、焼酎をいただき帰りに餅を貰う。歌を歌いながらやる行事で、上西では三ツ児の男子にも鉢巻としてこれに参加したといふ。新嫁の尻を打つはらめん棒はらは孕め打ちで、多産を願望したための象徴である。成木ぜめには果樹をこの棒で打つて豊作を祈願した。札下では以前行われていたといふ。「はらめうち」もこの十年來姿を消した。民俗学ではこれらの子供たちのことを小正月の来訪神といひ、このハラメン棒のことを祝い棒とよんでいるが、子供たちが神の代わりとなつて、正月の家々を訪れて回り、その持つている呪力の棒でいるいるのものを祝つてくれるのである。十四日の夜「ほだれな」といって、包丁をあてないで野菜を大鍋に煮て腹いっぱい食べる。

柳の木で大箸をつくりこれで食べ、この大箸をぜんだなの上など高い所に足をのばしてあげ、翌朝足をのばさないでその箸をとり、一日でこれだけ伸びたと喜び合う。豊作を祈る行事である。

同じく十四日の夜「かせだうち」が行なわれた。これは青壮年男女の行事で、箱の中に、でふっどん（大黒様）を入れ、手ぬぐいでほほかむりをして、長着物を着、「かせだうち」に來たと家々を回り、餅や米をもらって歩いた。錫山ではこの夜、婦人のみの行事で、長着物を着て歌を歌い、しゅろの皮などで覆面して踊りをした。豊作を祈願した行事であった。

十六日―旧暦正、五、九月の十六日は、折目節日といって一年で最も重要な家々の節目、祭日になっている。この日は地嶽のふたのあく日といい、どの家も必ず墓に参り、甥や姪が叔父、叔母のもとに餅や米その他をもって訪れる。多くの部落では伊勢講や山神講が行なわれるのもこの日であった。

二十日―二十日正月といって、正月のすべての供えものを取り去り、餅なども下げて煮てたべる。旧正月二十日から牛馬を農耕に使用したので初午はつなといい、馬にちりめんの覆い物をかけ、鞍くらは銀、真鍮作りで御幣、旗、ぼんばち、鈴をつけ、馬方四、五名、踊子二十名くらいで日一日踊り回った。諏訪神社や各部落の早馬どんに踊りを奉納した。今では鹿兒島福宮の初午踊りのあと、谷山でも踊られている。踊り子は、ほおかむり長じゅばんなど着、馬の踊りはごく単純で首を振ったり、足踏みしたりするだけのもの、太鼓、三味線、鉦かねに合わせて乱舞した。

一月十五日「二才入りにせ」の行事があるが、通過儀礼のところで述べたい。

二月 節分―立春の前日、節替わり行事で、邪霊災厄を防ぐ呪術的な行事で、大豆をいりとなえごとをして、室

内に撒きちらし、鬼を払う行事で、谷山では節替（せつがい）とよんで厄払いをする。この夜厄年になった人は自分の年だけの銭を四辻などでまく、「ぜんまつ」とよばれ、町付近が盛んである。その拾った銭には厄がついていると行って家に持ち帰らず、必ずその夜、他の品物と交換する。この夜、紅白のせつがい^{あめ}飴を食べるが、紅白の長い飴は延命の意味があるらしい。中町の白山付近ではこの日米飴をつくり、鹿児島方面へ売りに出かけた。この夜、赤大根のなますをつくって食べる風習は今でも残っている。

八日―針供養で、針を使うのを忌みつつしむ日で、この日こんにやくや豆腐を三宝にのせて、針を刺し仕事を休む日で、今では学校で女生徒を対象としてやっている程度である。

三月 桃の節句―年中行事をおこなう日の中、特に節供、節日とよばれる日で、節供は時折の折目にあたって、神祭を催して必ず何らかの供物を捧げて、神と人が共食する意味のものであるらしい。美しいひな人形を飾って祝う行事であるが、三月は農事の上での重要な季節であり、物忌やみそぎをおこなってきた。ひな人形の起りも、もとはみそぎに使う形代^{かたしろ}であって、これにけがれをつけて流すのだといわれるが、谷山でひな女を流す例はきいていない。帖佐人形を初節句に飾っている所がまだあるが、最近では市販のものが多く、よもぎ餅、らくがん、いこもち、せんのかんなどの菓子^{かし}を供えるが、女の子の成長を祝う祭り^{まつり}とされている。

三月十日―農村地区では三月十日、町や漁村では出張^{でばい}といって、花見、山遊び、海遊びをする。部落全員が酒と料理をもって一日楽しく遊びくらす。適当な場所のない所は公民館や、宿屋をきめて盛大な宴を催しているが、たけのこ、ぜんまい、わらび、つわぶき等の山の幸が多い。大川内では、初節句の女の子の所に人形を贈り、その内が三月十日の宿屋となり、料理いっさいをつくって郷中の人に馳走する。今ではしめもの、鶏の料理である。

三月二十八日―諏訪市。諏訪神社（南方神社）の門前で開かれる市で、農村に必要な鍬、鎌その他竹かご類がならべられ、年間の必要品が購入された。諏訪神社は商売の神といわれ、盛大な市がたった。

五月 五月節句―五月は田植の時期で、一年中でも重要な月で、軒にしようぶやよもぎをさすのも五月が季節の替わり目に当たる物忌の月だからである。この日武者人形を飾るのは神送りをする神の形代であり、五月のぼり幟を立てるのは、神を招くための招き代の変化か、あるいは忌みこもっている家であることを祈るためのしるしが起源であつたらしい。軒にしようぶをさすのは尚武にあやかつて、近世封建社会になつてから麓の青少年教育に力を入れた郷中教育からいわれ始めたものであろう。あくまきをつくるのも戦場に持つていくため、くされないよう長もちできるよう、男子の尚武の氣風を養う所から来たといわれている。五月の節供の供物は、あくまきのほかに、かからんだごがある。川口や蕨野では五月節句に五月幟を立てないという伝承がのこっているが、五月節句の玩具で子供たちが、水馬武者人形を引いて回っていたらしい。明治の終りごろまでであつたのではないか。曾我なごどんの傘かさ焼やきは麓地区で行なわれたが第六編でのべた通りである。

七月 六月燈―旧暦六月各社寺や部落の馬頭観音、秋葉神、産土神、塩釜神などで夏祭りをする。美しい絵燈ろうをともし、踊りなどが行なわれ、夜店も出てにぎわう。以前は飴湯、甘酒、ふくれがし、じゃんぼなどが売られた。農村では田植えが終わりほっとしている時で、この日を楽しみに農作業をすませ、若き男女は境内に舞台をつくり踊りを奉納した。谷山の総鎮守の神、伊佐智佐神社の六月燈は七月九日でこれをはじめとして各社寺や寺院の六月燈がはじまる。谷山での盛大な六月燈は町の六月燈とよばれる松雲寺の六月燈で、谷山全域の老幼男女が集まつてにぎわ

う。

山田の明楽寺では六月燈の日、知らず知らず虫を殺した殺生の罪を免れるため米を供えて供養するが、「御慰靈法師」とよんでいる。虫送り、虫供養の行事は谷山でも広く行なわれていたものと思われる。

半夏生—半夏はからすぶやくしようという、なんてん科の多年生植物で、葉に白い斑が出てくる時期で、新暦の七月二日ごろにあたる。梅雨は半夏には上がるとか、雷鳴で上がるとかいわれる。この日は新麦で「はんげ団子」をつくる。半夏に田植えをすると、どり上げの米は葬式の米になるとか、この日に仕事をすると雨が少ないとかいわれ、普通鎌をかためん日といい、もしこの日農事に従事するものがあれば、大園部落では村八分にされたらしい。今でもこの日は農事をしないで休みの日としている家が多い。

八月 七夕—五節句の一つで星祭りともよばれる。七夕の前日竹を切り、男の子は短冊に文字を書き、女の子は七夕衣装を作る。男物と女物と一对の衣装を七夕紙で切る。こよりのひもで竹に結び七日の早朝立てる。七夕衣装は庭の木や垣につったり、軒端に下げたりする。ほほずきなども下げる。

七夕の日から盆の十三日の間に、家々には墓掃除をし花筒を新しい竹筒にかえる。これを「墓こしたえ」とよんでいる。各部落では道路や溝、墓地の清掃作業をする。これを「道つくい」とよんでいる。この日必ず何粒かの雨が降るといわれる。

盆—十三日の夜精霊様は禪にのつてこられるといわれ、その夜は替えちよかをして、よめじよきつや、新唐芋を供える。十四日の朝、小豆のご飯、かいのこ汁と漬物を供える。箸は麻穀の心を用いるが、今ではちんだいぐさの白い心

を使用している。普通四、五人前御飯を供えるが十人前も供える家がある。昼は餅を小さくちぎりこれに餡あんをまぶして箸を立てる。十三日になかんまの隅に戸板や障子またはふすまで仕切りをして精霊だなを作る。先祖だなの位牌はを下ろして「精霊のこも」にのせる。「精霊のこも」はかやを棕櫚しゅうろの葉で編んでつくる。精霊のこもの隅に「助次郎どん」とよばれる無縁仏をまつり、柿の葉に団子、しめものをのせて供える。助次郎どんは外精霊で親兄弟や身よりのない精霊のことだという。夜は白ご飯、油揚げ、梅干などを供える。十五日朝かいのこ汁、小豆の御飯、梅干など供え、ご飯には前述の箸を数本突っ立てて供える。昼は盆団子、しめもの、夜は白ご飯、なます、汁を供える。十四日と十五日はちようちんをとぼす。肥松つが(赤松の心)を燃やして迎え火をたく家もある。十五日の夜精霊団子をつくり柿の上に、二、三個のせて墓に供えるが、いもがら、なす、きゅうりなどを小さく切った「みずのこ」を供える家もある。十五日の夜は遅く墓参りする。十六日朝おとしれを供え「早よもどいやんせ」ととなる。十五日の夜山田では黒丸神社に鐘踊りを奉納した。太鼓に七夕紙をつけ矢旗を立てて勇壮に踊った。いわゆる盆踊りである。花筒を取り替えた古いものを燃やして、その明りで盆角力をとっていたが、今ではやっていない。昭和の初期までは盆から十五夜まで角力をとっていたらしい。また昭和の初めまで子供たちが、庭陽に小さな釜をつくり、大豆や唐芋をたいて食べるヒゴラガマの行事もあった。初盆の家には親類、知人が盆ちようちんをおくり、それを墓地にずらりととぼすことも盛んである。

中元―一月十五日(上元)七月十五日(中元)十月十五日(下元)は三元とよばれ、中元は年末と同様一年間の取引上の決算期で、商業上の取引を円滑にするために贈答が行なわれ、これが一般の交際の中にも及び、両親、仲人、名づけ

親、知人など日頃の世話を感謝し、暑中見舞をかねて挨拶に行くという中元の贈答の慣習がある。盆の贈り物として初精霊の家にちようちんやそうめんを贈る。

虫干—虫干は土用干ともいって、土用中の乾燥した日に行なう。部屋や縁側庭先の日陰などに、平素は着ない晴れ着などを掛け並べる。今でも時々見受けられる。

九月 妙円寺参り—伊集院町妙円寺（徳重神社）参りの行事で、谷山では麓の清溪学舎、辺田の辺城学舎生が夜参りするならわしになっており、二才は甲冑をつけ、子供は陣羽織をつけ、五か別府の川口を経て、入佐道を通り、春山を経て伊集院に達した。「チエスト関原」の意気をあげた行事である。

彼岸—春分と秋分とを中日としてその前後一週間を彼岸の節とする。彼岸の法要を彼岸会といい、各家庭では彼岸団子をつくって仏壇に供える。春秋の彼岸に山に登る風があるが、谷山では秋の彼岸に烏帽子嶽に登る。

お嶽めい—烏帽子嶽神社の秋の例祭で、前夜から提灯をともし、太鼓三味線をうちならし、女は腰巻白襦袢じゆばんで参再し、頂上の社殿ではま夜中から神楽を奏し、宮回りや柴打ちの行事が行なわれる。柴打ちの行事は「まつこのしば」を両手に一ぱい持ち笛太鼓に合わせて、神主が参拝者を打つ行事で、家内安全、無病息災を祈る。宮回りの行事はつゆ払い、天狗、神主、槍もち、矛もち、柴もち、宮司、神輿、添人と社殿を四度回る敬けんな行事である。軍の神として戦前は非常ににぎわったが、近時再び参拝者もふえ修験者で宮ごもりの人も増してきた。

八朔—旧八月一日を八朔節はつごせつまたは田美節たみのせつといい、稲の豊作を頼んで簡単な祝いをする。八朔は昼寝の終日、夜なべ

の初日といわれ、この日から子供たちは十五夜の綱の準備や角力とりがはじまる。

十五夜―各家では餅や団子を作り、農家では前庭に木臼うすをすえ、その上に箕みをのせ、柵ますに十五の餅やご飯を入れ、柿、栗、里芋、唐芋などや、すすきの穂や稲の穂、萩の花などを瓶にさしたものと共に並べて月に供える。ろうそくの火や油の燈明も一緒に供える。この供えたご飯を食べたら長生きするとか、瓶の水を飲んだら長生きするなどの俗信がある。箕みは実、豊作祈願であり、稲作によって八月の名月の夜が、大切な神祭の折目で初穂祭りであつたらしいことがわかる。他人の屋敷内にある果物をとつたり、月見団子は盗まれた方が縁起がよいとか、七軒分をとつて食べれば長者になるとかいう風もあつたが今は残っていない。

綱引―綱引は子供組の年中行事で、これに部落の人も交わつて綱引をし相撲をとる。綱の用意は八朔から子供組の仕事をして行なわれ、山からかやや葛かんねのかずらを取つてきて、十五日の午後部落の古老や壮年が手伝つて綱をカク。山にかずらをとりに行く時、子供組の頭かしらは塩と米を準備し、山の神に柴と一緒に供えてけがのないように祈願する。小さな子供たちは弁当の番をする。取つてきたカズラは水に浸し、石でたたいて柔らかにする。大きい木の枝か、特別に木を組んだものにつるして、かんね、きんちく竹を心にし、それにかやと藁かを束かにしたものを、三人でよりをかけながら巻きつけてゆく。太さ二十センチ長さ十五米くらいが普通でこれより大きいものもある。でき上ると丸く輪につき上げて、子供頭がその中に入って月を拝む。藩政時代は乙名の子供がその中に入ったらしい。輪の上に稲の穂、栗の穂を立て、焼酎を供える部落も多い。綱口は月の出の東に向け、綱の尾は西に向けるが、特別に綱口を蛇の頭に作る部落もあり、綱は大蛇だといっている。綱作りが終わると綱カキの人々に豆腐や酒焼のご馳走をする。十五夜の月が

でてくると、ぐるぐる巻いて供物のしてある綱を伸ばし、自分の小綱を、大綱につけ、子供たちは十五夜歌を歌いながら部落を一周する。海岸地帯の新天地や東塩屋では、女たちが晴れ着を着鉢巻をしてこの綱を引きずり回る。その後子供と青年、男と女といろいろの組合わせで綱引をする。綱引が終わるとこの綱を土俵のまわりにまわして相撲をとる。宮園部落では土俵に入れる砂を前もって用意し、八朔の日から準備にかかる。綱引は、もともと年占または豊作祈願のための行事で、綱にさわっただけで年中病氣しない、綱を引くように商売も引き合うとの俗言もある。

もともと十五夜綱引は綱の引き合いではなく、綱を引きずるのが元の形だったようである。皇徳寺部落や磯辺部落の綱は今でも、蛇の口をつけているが十五夜の綱は竜ではないだろうか。小野重朗氏の説では、水神である竜が、人々に必要な雨を降らせ、稲作に必要な水も充分与えて、もうこれで一応水はいらないという季節になつて、竜は故郷である海に帰ってゆくという。綱が部落を廻るのは、来年までの別れを告げるためであり、部落民の側から言えば水神の竜に水をもらったことを感謝し、別れを惜しむためである。だから部落の人々は道にでて、綱の通りすぎるのを見送るのである。盛装した子供たちは竜を送る神の使いではないだろうか。

五位野部落では、十四才のかしたは赤ふんどしと緋かすのたらしをもらい、これを着て栗、カヤ等を取りに行き、十五夜の月に供えた。旧盆から十五夜まで毎晩相撲のけいこをし、闇の夜は松明をもやして相撲をとった。

流れ船―旧八月十六日夜、海岸の部落では船にのりこみ三味線、太鼓に打ち興じ、焼酎など飲みながら楽しむ行事で、七ツ島あたりまで流される。櫓をこがないで船の流れのままにして月を楽しむのである。遠く海の彼方から三味線、太鼓の音が聞こえるのはまた興味深いものである。船にはその年の子供頭と次の年の頭を乗せる部落もあるが、

一般に大人の遊びである。盆の精霊流しとも関係があるのかも知れない。

十月 ほぜ―部落または郷、村などの神社の秋祭のことを方祭（豊祭）と言っている。普通には旧暦九月九日や十九日（中ノ九日）の場合が多いが、山田、中村の農村では旧暦九月九日で谷山の物鎮守の神、伊佐智佐神社のホゼは十九日である。ホゼには新米で甘酒を作り、そば切りを作つて祝い、親類をよんで馳走する。

伊佐智佐神社のホゼは、「谷山の馬鹿ほぜ」といわれて、特に麓では甘酒を一斗以上作り、鹿児島方面からの沢山のお客をもてなした。例祭には「浜下り」があつて、神嶽が和田の海浜久津輪崎に臨幸し、途中神楽を奏し、浜までくると、神舞、劍舞が奉納される。行列には、つゆはらい、手力男命の面をかぶり、才持ち、かさ持ち、神輿、武者行列が続ぎ、その後各部落町方面の余興隊がつづく。才、かさ持ちは和田の海岸部落の青年で、その持つ順序もきまつていた。神輿の上には鳳の鳥が新穀の穂をくわえ、刈穂が奉納されている。祭典には舞の奉納があり、四方清舞、劍舞、田の神舞がなされる。田の神舞はおきなの面をかふる。

田の神はいく代の民の親なれば

頭は白く腰は二重に、

四方清舞は珍しい舞で、潮入れに、さかきをさし、塩と米をまいて舞うものである。

千早振、千早振、神の社はここにある集り給え四方の神々

波かよう、波かよう浜のまさこはつきるとも、神代の道はよもやつくせん

伊勢島や雲をはるかに見渡せば、たけき悪魔も塵とこそなる

行列は和田浜より谷山の本通りを通過して、谷山小学校まで来る。「谷山諸記」によれば、当社神位ハ正徳三年氏子中ヨリ吉田殿へ願正一位ノ神階宣命奉納有之充勸請年号相知不申候神田領高寄附無御座候、祭日正月三日二月五日九月九日十一月廿日但正当之祭ハ九月九日浜下り有之祭采トシテ米五斗式升五合ツ、毎年被成下候由御座候とある。

錫山相撲―旧曆九月十六日、錫山の年中行事としては一番盛大なものである。大山祇神社の奉納相撲であるが、大山祇神は錫鉾を発見した八木主水元信が、山神として延宝五年地福山に建立したといわれる。以来この神社の奉納相撲として、現在まで続いてきたもので、約三百年の歴史をもっている。錫山山中における鉾夫の慰安であり、近隣から青少年が多数参加した。鉾山が盛んになるとますます盛大にやつたし、鉾山が衰えると盛んになるよう祈つてまた盛んにした。前後三日間続けておこなわれた時代もあったらしい。土俵は大山祇神社の東側で三百年来一度もたえたことがないとのこと。明治三十四年ごろ、錫山鉾山所長千田武之助の時鉾山の経費が多く、その年所長としても自粛の意味でとり止めたが、山中の人の出費により実際は行なわれたとのこと。戦前東京相撲一行五人が来錫、また昭和三十七年柏戸、豊国の一行が来錫、大山祇神社参拜、その後土俵入りが行なわれた。火の河原でもホゼ相撲といつて、錫山相撲以上に盛大なものがあり、川辺、知覧、伊集院、谷山方面から力士が集まり、豊年祝の行事であつた。

十一月 亥いの日―旧曆十月の亥の日で、普通第一の亥の日を言う。新米で餅をついて亥の日の神に供える。南麓ではぼた餅をつくり、女の子がよいむこを迎えるように祈念した。亥の日の神は縁結びの神であるらしい。また亥の日の神は作の神といい、豊作に対する感謝の祝いで、大正時代まで農村から麓地区海岸地帯まで行なわれていた。麓か

ら町付近の部落ではこの日の夜、部落の子供たちが集まって「亥のこ突き」をする。まり状の直径三十糶ぐらいの石の中央に丸い切り込みをつくり、これに縄を何本も結びつけて、一本ずつ子供達ももつて、辻々で地を突いてまわる。谷山ではこの行事を「ぼたんつかん」と呼んで歌を歌う。歌は「こん夜の晩は、ぼたんつかん晩か、亥の日の晩か、鬼か蛇か、ぞくぞく腹腸はらわたふんだせ」というのが普通である。亥の日にぼた餅をつかぬ人をからかったり、悪口を言うもので、餅をつけて田の神に感謝する気持ちをもたないような人は「鬼か蛇か」といわれても仕方がないという意味の歌であろう。この行事は広く分布しているが、田の神が部落の土地を突き鎮めて、悪い者が自分の留守に部落の田や畑や道や庭を荒さないように、という行事であったのではなからうか。また、この日の餅を苞に入れて庭先の木につる家はまだのこっている。ぼたんつかんの石は下松崎部落竹之内氏宅にまだのこっている。

しめどつーにわあがいともいって、稲刈り脱穀、甘藷とりが終わると一年の農事の終わり、新米をつけて神に供え、餅について一日か半日休んで、ご馳走して食べる。五位野では部落全員、各自料理を作って集まり、あき地に土俵をつくつて二才たちの相撲が行なわれた。相撲とりはこの外諏訪、後迫、本城、笠松、和田など浜の各部落でも行なわれた。山田下部落では二才のまわり番で宿屋をきめ、料理をつくり、慰安の一夜をすごし、相撲もとつたが、今では家々で餅をつく程度である。

十二月 冬至―一年中で最も夜の長い日で、このころから寒さがきびしくなる。この日にかぼちやを食べると中風よけになるといふ。

内神祭り―農村の門にある産土神（門神）や各氏を中心とする氏神の祭り、これは祭祀の項で述べたい。

大晦日みそか―年取の夜、松竹を飾り、しめ縄をはり、餅を供えて年神の来迎を待つ、この夜はハレの食事として年取りザカナを贈る。特に年越しそばを食べるのは、そばがよく延びる長生きするようにとのことからの俗信であろう。夜の鐘をきいて床につく。

第二節 衣食住

一、衣生活

明治以前の自給を中心にした生活の中で、衣服を整えることは、たいへんな仕事であった。綿が栽培されるようになったのは、室町時代の末で、普及しはじめたのは、江戸時代の初期である。十九世紀には大部分木綿時代になったが、木綿に主産をゆずるまでは、麻が衣料の中心で万葉時代以前にもあったといわれる程古くからあった。藤や楮その他の草木の繊維を採取した衣料も古くはあったようであるが、麻が長い間庶民の衣料であった。麻はおとよばれ、いとといえば麻糸のこと、ぬのといえば麻布のことであった。麻は四月下旬播種し九月中には收穫する。花の咲かないうちに切り取り、葉を落とした。惣福、上西、鹿倉部落、その他谷山のあちこちの部落に芋煮釜おいでがまという浅めの大釜があり、部落の広場にかまどをつくり、この釜をのせ、麻の束をその上に立て、高い木のまた枝は柱につりさげた芋煮桶いでおけを麻の束にすっぽりとかぶせ、二時間ぐらい、皮がよくむけるまで蒸す。芋が蒸されると、皮をむいて皮を乾燥

せる。麻殻は然料または箸の代用に利用した。乾燥した皮は灰汁で煮て繊維をほぐし、川に持参してよく洗い、よくすごいて糸にした。おいでおけの長さは二米半ぐらい、底の直径は六十糎位もあったが、今は谷山では見当たらない。長さ六糎ぐらいの竹に、いっさつ（青桐）の繊維を通し、これを親指と人差指にあてて麻をすごいた。「すごつくだ」とよんだ。ほぐした糸にさらに灰をつけたり、つばをつけたりして、長くより合わせ、高さ三十糎ぐらい、径三十五糎位のおぼけに入れ、それをいとぐるまにかけて、よりをかけて糸にしカセにまきつける。

染め方は、鹿倉部落の古老の話では、なすの乾燥したものを焼いて、その灰と泥を使用して色を染めたということであるが、普通は藍草の葉から藍をとり、これで染めた。藍は四月下旬播種し九月中に収穫したが、明治後期まで栽培された。麻布は夏の間は染めずに着ることもあったが、草の根、木の皮、果実などからその自然の色素を出して染色した。麻布は染めにくい布であるが、木綿は色づきがよく、染色の楽しみも多かったという。幕末から明治初期、谷山の麓でも紺屋（クヤ）どんがあり、藍の染物を専門にした家があった。その後、明治後期下松崎の「じえもんどん」は紺屋で谷山に一軒あり、織屋の仕事でしたが、織子も三十人ぐらいいた。大正年間になってから、中村の真方部落には、つむぎの織屋があつて、泥染をやっていた。今でも鹿児島市内の大島つむぎの工場から泥を取りにくる。

師走女に手もさすな

師走の木綿機やめてきき

師走女と五月男

正月の着物を織るため、夜もおちおち寝ずに織る女たちの多忙さがよくわかる。師走の織り方をせつおりともいった

仕事着

男子

頭―たかんばつちよ、またはちよのげ（手拭）、竹皮製で谷山の町の松雲寺隣の水元屋や、鹿児島市清水町の諏訪市、谷山の諏訪市で購入し、一年中使用した。むつがらぼし、ちよのげのほほかむり

手―手甲

上着―木綿のびら、またはまつそで、夏は麻のびらまたは、まつそで、冬は裏つきのびら、厳寒の時はびらの上からそでなしを着用

下着―ばつち、山仕事の時はももひき

足―けはん（おいろとって黒い木綿物、こはぎは十個ぐらい）まきげはん、山に行く時はやまぞい、田畑に行く時は、はだし、地下たびをはくようになったのは四十年ぐらい前から

女子

頭―ちよのげ、たかんばつちよ、ほほかぶい

手―手甲

上着―びら、寒い時は、びらの上からこしぎんを着用

下着―こしまつ

足―山に行く時はやまぞい、田畑ははだし

その他

雨天の時、田植えの時などは、みのを着用、重労働の時は、「しおはい(重ねぬい)」をきたが、特に漁業従事者は、ほとんどこれを着用した。また麦打ちの時麦の穂がついても、すぐ落せるように「ぬのんびら」を使用した。

錫山鉦山鉦夫の仕事着

鉦山特有の衣服で、陣羽織の形をしたものは使用させなかった。これは錫の盗難をおそれたからである。手拭は長さも一定していて、そのかぶり方は烏帽子かぶりであった。

普段着(褌衣) 農家では普通びらで、木綿で織った手織縞が多かった。

晴衣(祝着)

手織縞のかすり、木綿物で長衣裳とよび、農家では忙しいころ、日中長衣裳を着ていると病気かと疑われた。よかいしよといわれる。

人の一生と着物

生着^{うがき}—生まれてくる子供のために、早くから白木綿の衣類を用意する。初子の出産は、嫁が実家に帰ってするのが普通であるが、産の忌みが明けると、母親の里方で作った産着を着せて宮参りをする。産着は後ろにひもをつけて前で結ぶようにしてあるが、立って歩くようになると、左右の前身頃に付紐^{つけひも}をつけて後ろで結ぶようにし、肩揚げ、腰揚げをする。産着をはじめ幼児の着物には、背守^{せもり}を縫いこんだ。子供の安全を祈るためのものであった。着物をたつ時

は、反物の上にもものさし、はさみ、塩、みそ、鯉節等を供え、はさみを入れる時は、のしを書いて「衣裳はよわかれ、身は強かれ」ととなえ拜んでからはじめた。

七五三の祝いで着

七五三の祝いはあまりやっていないが、男女児とも三才になると、一ツ身から新しい三ツ身または四ツ身の着物に着替え、付紐をとって帯をしめさせた。郷土の子供は五才の男子に着袴の式をおこなった。十三、四才になると肩あげを取った。十五夜を境にして十四才の二才にせに、五位野では新しい禊かじしをあたえた。青年になつたしるしを祝う禊祝である。十七才の女は八月十七日、立ち待ちの行事で晴の着物を着て、銭ぜにを紙にまいて月に供え「よかむこどんがくるように」拜んだ。海岸では海に浮かぶ月を拝み、海から遠い農村では、庭先にびんだれを出して、これに月を映して拜んだ。男も十七才になると、たもとの着物を着た。中塩屋の塩釜神社の例祭には、十七、八才の女が晴れの着物を着、髪を結ゆって神に奉仕した。この女たちを「よめじょどん」とよんだ。明治以来男子は数え年二十一才で入宮したので、十四才の禊祝いに兵隊検査の着物を作ってやり、一人前の成人としての待遇で、本裁ちの着物を着た。成人後は男の二十五歳、四十二歳、女子の十九歳、三十三歳やくは厄年の着物を着て厄をのがれた。六十歳の還暦えんれきの祝いには祝いの着物をおくり、七十七歳の賀の祝いには、普通より大きい座布団を作り、この上に座らせ、紋付羽織、袴、じゆばんも新調し、知人親類に祝い物を分配する。八十八歳の米寿の祝には赤い着物を新調して着せたり、座布団を送ってこれに座らせて長寿を祝う。

二、食生活

食生活が目だって変わりはじめたのは、日清戦争後で、それまでは江戸時代そのままだったといわれ、主要食料はこめ、むぎ、あわ、ひえ、そばで、混食の割合はこめ三割にその他というのが普通のものである。農家の食事は、朝食の主食はこめ、からいも、あわの混食、副食は野菜のみそ汁で、だしは、最近になって、さば節、いりこを使用するようになった。昼食は朝食ののこりを使用した。晩食の主食はむぎめしで、朝早く起き、木うすに麦を入れ、てぎねでついて夜食の準備をした。副食は「ひやすい」でなまみそをすり、ねぎ、しそなどを入れ、これをなまのまま麦飯にかけて食べた。この外しめがいても、つけもの、もちあわのねいぼ、そまんねいぼ、しめがいの時は、いいなますを食べる。いいなますは大根のせん切に少量のいわしを入れ、煮上がる前に酢を入れたもの。間食としては、しめがいも（大根もいっしょに煮る）夜つくったものは、翌朝串にさして焼いて食べた。ねいぼ（もち米にからいもを入れてついたもの）もあるが、種々の講の日や、葬送の日のでたちの飯、祭りのお供え用としては特別ににぎりめしがあつた。そばきいは特に晴れの日の食物で、木屋宇都、玉利や、下福元町の部落は今でも祝いの日、節分に食べている。

食事の回数

江戸中期以後は、食事の回数は三回になつたらしいが、この外三食以外に朝食前の仕事にとりかかる軽い食事や、朝食と昼食の間や、昼食と夕食の間の小憩の軽食があるが、これをおちや、こじゅはん、ちゅはんとよんだ。夜なべにはさらに夜食をとることもあつたが、これらの間食はからいも、だんご、残りごはんであつたりして、正規の三食

以外に四回、五回にふやしていたこともある。柿木田部落のかわら、れんが工場では粘土ふみの時、足で粘土をふみ左手に立てた竹竿をにぎり、右手に粟飯をにぎって食べた。

年中行事と食事

年中行事の節日、人の一生の晴れの日、旅立ち、旅帰りの人を迎える坂迎え、新築の祝い日、漁村の大漁祝い、戦前の出陣、戦勝の祝いまたは講の日、祭りの日の食事などは、共同飲食によつておたがいの結合、親睦を深め、さらに神との共食によつて信仰を深めることが多かった。

正月—正月のすいもの、錫山ではいのししの肉を使用した。七草粥、穂垂炊ほだれな(ねぎ、なつば、里芋、大根、にんにくなど包丁をつけないで、根も多く食べた。)

三月—桃の節句の餅、団子、彼岸だご(三月十日のばいの食事、たけんこ、ぜんまい、つわぶき。

五月—端午の節句のちまき、くわからんだご、田植えの時のふくれだご、ねいぼ、ぬいくい。

六月—六月燈のだご、甘酒、あめ湯。

七月—盆だご、精進料理(かいのこ汁)

八月—土用うなぎ

九月—十五夜の餅、団子

十月—方祭の甘酒、にしめ、亥の日の餅、だんご

十一月—しめどつの御馳走、にしめ、餅

十二月一年とり晩の御馳走、年越しそば

講の日の食事は、祭祀の項で述べたい。

通過儀礼と食生活

子供がだんだん成長して、おとなになるまでの通過儀礼の食生活は、やはり共食が中心である。

宮参り―生児三十日前後の宮参りには、神酒、赤飯を持って氏神、産土神に供える。

乳つけ

膳据い―食いぞめ祝いで、膳の上にながしらと小石をのせる。石のように丈夫に育つように祈願したものである
餅踏み―誕生日が来ないうちに、歩きはじめて生児にむかいづきといつて祝い、大きな餅を踏ませ、その餅は集まった人々でたべ近所にくばる。将来を予祝する行事である。また、この日、そろばん、筆、鉛筆、ものさし、はさみなどをならべ、これを取らして将来を占う。

七草がゆ―七才の男女の成長を祈る。

食事の作法上の禁忌

馬鹿のうぐれ。馬鹿の三杯汁、

一杯飯をくうな、茶わんをたたくな、
いっぺめし

はっぱ飯は食うな、はっぱ茶をのむな、

第一、仏、第二、大黒様、第三、主人、

熱い飯に湯をかけて食べるな、

信仰上の食事

陰膳かげぜん―遠く旅するものの安否の兆を知ろうとしてやるが、お椀のふたにしずくがついていると無事だといって喜び、乾いていると何か変わったことがあると憂うる。

逆膳さかぜん―晴れの日の膳のすえ方は、膳のつなぎ目を客の正面にしないで、板目は横になるが凶の日の膳のすえ方は、つなぎ目を客の横にもつてくる。これを逆膳とよび、膳の板目が客に対して縦になるようにし、晴れの日の逆膳を忌む。

皿の数―吉、晴れの場合は奇数で五つ組飯、七つ組飯で、その中には取肴とりざかな、硯蓋すずりふたなどがあり、吸い物の数も小鯛などのおかしらつき、さしみは白味の魚を使用する。忌の凶の場合の皿の数は偶数で吸い物の数も偶数である。また皿にもる品物も偶数にする。

小豆飯は明治以前の郷土は、小豆が二つに割れていることから、「腹を切る」といつてきらった。

餅と団子

餅をつく時

正月(前年の暮、二十七日はやめる) 十四日のもつどし、旧正月、三月節句、五月節句、十五夜、亥の日、庭あがり、晴れの日(出産、誕生祝い、でたち、新築祝い)ともれ(三年忌、五年忌、十三年、十七年、二十五年、三十二年)その他庚申どんの餅

団子 てたつだご、(米粉または小麦粉)

小麦だご(黒砂糖をまぶしたり、ごまを入れたり、きなこをつけたり、よもぎを入れたりする、からいもの心を入れるのもある)

ねいぼ(もち米とからいもをたいて、すりませたもの)

ぬいくい(黒砂糖のあんあんに小麦団子を小さくちぎっていれ、あんをまぶしたもの)

ふくれだご(小麦粉に黒砂糖を入れソーダを混入してむしたもの)

ぼた餅(もち米のにぎり飯に、小豆のあんあんをかけて丸めたもの)

彼岸だご、

はなつまんだご(小麦粉に米粉をまぜ、上から米の粉をまぶす、三日日みつかびにつくる)

盆だご(米の粉のだご、小豆をまぶす)

十五夜だご(ぼたもちその他)

茶 茶塩気ちやじよけといって梅干か漬物が供えられる。午前や午後の間食を「ちや」とよび、茶を簡単な食事の意味に使用

している。婚礼の前後にも茶、仏事の日、彼岸の茶のみといって、人を招いて共食する。「茶一杯ちやいっぺ」といわれ、他人をもてなす大事な習俗となっている。茶のみ話はまた色々の話題をなげかける。

赤飯 神祭、内神祭、祝いの時の飯であるが、麦植え、田植えの間食に赤飯をたく家もある。赤飯は一般に吉事に

用い凶には用いない。米に小豆をいれてたいたものが小豆飯で、赤飯は普通の米を「かたごし」したものを水につけ

小豆ともち米を入れて、さらに蒸したもので御供飯ごつくめしともよばれる。

黍米しとぎの「はたつ粉」を水にしたして、だんごにしたもので、乳の不足する幼児に布で包んでしゃぶらせたりしたが普通は神霊の供物としている。氏神祭の赤飯の上にもるめてのせ、神の供物とする。

赤飯にもせられた。

甘酒 方祭のときにつくったが、六月燈にもつくられた。以前は生米をかみくだき、白糍こうじをまぜてつくられたらしい。米をたき糍を加えて造ることは酒の醸造とにているが、醸酵以前に飲用する。谷山の馬鹿方祭といつて麓地区では一斗以上各戸でつくられた。

こんにやく こんにやく芋の皮を竹べらでとって一度たき、それに灰のあく汁を入れて臼でつく。これを色々な形にぎって、もう一度ゆでる。このままや、さらに煮て食用にする。これを「手こんにやく」といい色の黒いものは茶がらの粉を入れてつくったものである。屋根葺のあとには必ずごみをくうといつてこんにやくをたべる。棕櫚しめろぼつぎ箒をついたあとには「ところてん」をたべてごみをとる。十二月下旬が最盛で正月料理に出される。今でも山田の皇徳寺部落などでつくる。

柿 柿は三月飯米といわれ、柿の木を植えておくと、その柿で三か月分の飯米に該当がいするということで、藩政時代農家では米のかわりに柿を植えた。柿の品種「あるかや」は租税の対象で「まだあるかや」から来たものらしく甘柿である。柿木田、笠松、野頭方面に柿が多かつたらしく、柿木田部落の地名がこつているが、現在は少ない。笠松、野頭部落では樹齡百年以上の木が沢山のこつているが「もいや柿」が多い。「もいや」は「まもる」で家の周囲に植

えて家をまもったというこららしい。やはり税の対象であつたらしく、水田の少ないこの地方としては飯米のかわりになつたのであろう。「柿がなつても、ちしやの木」とよく言われるが、ちしやの木は柿によく似た木で、租税のがれる農民の苦しい答弁であつたらしい。中村では柿の木を切ることを禁じ、「牛を殺すのと同じだ」といわれてきた。やはりだいな食料になつたのである。柿の木をいりりに燃やすことを忌み、人魂ひとたまが柿の木に引つかかつたとか妖怪が柿の木の下に出るとかいう俗信がある。盆の仏の供物は柿の葉にもるのが普通である。

救荒食物

平常はあまり食べず、飢饉などの困窮時に食べる食物で、くずの根、百合根、山芋、わらび、ぜんまいふき、うど等があるが、大根葉、からいもこつば、たけのこなどもあげられ、粥かゆや餅にして食べるものが多い。

民間医療

一般的に最も重要なものとしてゐるのは薬草で、万能薬としては、「げんのしょうこ、どくだみ、アロエ、せんぶり」などである。食べすぎや食い合せのよいものとして、あくまきに梅酢、ぼた餅に大根なます、甘酒にこんにやくがよいとされている。端午の節句の菖蒲湯、産湯にも薬草を入れ、甘草、大根葉、柿、いちじくの葉などを入れ、頭のえさに効きくといわれた。子どもの頭の湿疹をくさといひ、くさ祭りをした。黄疽にかかると、しじみ貝の汁をのみ、百日咳の時は「おねつの神さあ」に参拝した。いぼをなおすには「いぼん神さあ」に自分の年の数の大豆を供えて、いぼがなおるものと信じていた。いぼん神さあは中、山田、坂上にまつつてある。歯の神さあも三重野、皇徳寺部落にある。コレラ、痘うそう、はしか、赤痢、はやりかせなどの流行病の時は、門に繩を張り、八っ手、らつきよ、んにく、三三良三八と書いためしげをさげて追い払つた。はしかは冷やすなどいつて、高い熱がでて、息が苦しめても布団をかぶせて暖めた。食養生がきびしく、たこ、いか、青魚、とうふ、みかん、かきなど生果は禁じられ

た。ほそ（疱瘡）がはやるとほそんだごを作りほそ塚に供えたり、本城部落の御伊勢様に踊りを奉納し、「ほそかんじん」となつて家々を回り、米をもらつて、飯をたいて食べたりした。血止め薬としてはよもぎや、さかしばの木の皮をけずつてつけたりした。毒虫にさされた時は小便をつけた。やけどには醬油、油をつけた。

三、住生活

屋敷の選定

飲料水のよい所、屋敷柄のよい所、日当たりのよい所、道路より低い土地なら宝物が流れこむからよいなどといわれ、門は北門より東門の方がよいなどと縁起をかつぐ。辺田、立迫、錫山、麓には門の入口に、悪い風がはいらぬようにと石敢当を立てた家がある。家の庭隅に地神をまつる家もある。屋敷に植えてある木は、榎、一つ葉などでせんだんを植えることを忌む。農家では普通きんちく竹が高く密生して、防風その他の防壁になつてゐる。

永田川に沿う真方、七村、柿木田、惣福、永田の各部落は毎年洪水に悩まされ、井ぜきの改修、堤防の修理などに苦心がはらわれたらしく、中村の水俣門の名頭の日帳にくわしく記載されていて、部落民共有の水神祠が多い。

建築儀礼

家を建てるには、先ず宅地の地神祭をするが、神主をよんだり、また自分で塩、酒など供える。大工が仕事にかかる時は、つのだて祝いといつて、大工や親類をよび、神だなを臨時につくり、酒、塩などを供えて祝いをするが、この日は大黒柱や亭主柱（中柱）など主な柱に墨を入れるくらいの仕事である。つのは手斧（ちょうな）のことで、いろいろの煙で黒光りした柱に、ちょうなのおとがのこつている家がある。土台石をおき地突きをする日の祝いは、じびらきという。地突きは大黒柱の所から突き始め、乾（北西の方角）の隅のところで突き終わるといふ。土台

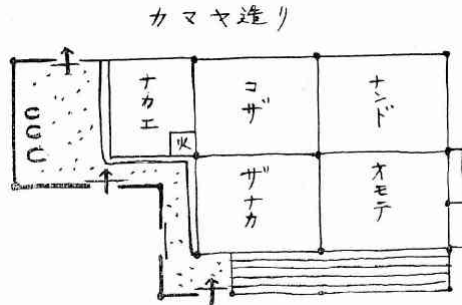
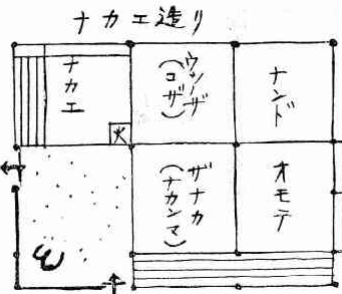
を固めるだけでなく、地下にひそむ悪霊を鎮め、家の繁栄安全を祈る気持ちで行なつた。根とよばれる大きな柱棒に綱をつけ、それをとる人が根取り、それを綱子または引き子とよばれる数人の者が引き「どんじ節」に合わせて調子よく歌い地突きする。根の上方にはしべ、さかきをつけ、その部分に赤い布切または旗などあげると、部落や付近の人々が地突き祝いの踊りにやってくる。夜の地突き祝いにはこの踊りの人々は家主がよんで馳走する。

家をたてる時は、地突きがもとよ

地突きしまらんにや、この家たたぬ。

棟上げ祝いには棟木の上に、大きな弓に鏑矢をつがえて立てる。矢は親類のいない方向に向ける。鬼門に向けて邪霊を防ぐ「まおどし」である。また五色の幣を立て神の倚代とする。この布は大工の棟梁がもらう。餅や金を家の主が、集まってくる子供や一般の人にまいて拾わせるが、餅なげ、銭なげとよんでいる。この夜亭主柱の上に、祭壇を作つて大工の棟梁が塩、米、酒等をそなえてまつり、にぎやかな酒盛りをする。これを柱祭といつて、大風が吹かぬよう、白蟻にかからぬよう祈念する。この日大工にもみ一俵をやる。家が完成すると成就祝をして、親類、知人、大工をよんで盛大に酒宴をはる。

間取 民家は普通田の字型式が多く、おもて、なんど、ざなか、うつのざにわかれ、これになかえと土間のあるなかえ造りがほとんどである。小野重朗氏の「二棟造り民家」によれば、薩摩半島全般にわたつて、古くは民家はいいえと呼ばれる一棟と、なかえと呼ばれる一棟とを屋根を接して一続きに作ることが行なわれていたが、今ではこの構造の二棟造りはほとんど見られない。谷山にのこる古い民家も二棟造りはなく、ほとんどなかえ造りである。



祭っている家もある。家としての祭事、講などを行なったりするのもこの部屋である。

ざなかなかんまともいって、おもてに次ぐ晴れの間である。盆の精霊だはここに多く作られた。普通家族の居間である。

なんどーおもての裏の部屋で、長持などの物置で、畳も敷かない所がある。産部屋によく使われた。一向宗禁制のとき仏壇をかくす部屋でもあった。

うつのざーこぎとも呼ばれなかんまの裏で、以上の四間の中央の柱を亭主柱てしほしたとよぶ。位牌いはいをまつる先祖だなもここ

かまや造りは、やや横に長くなり、煮たきのかまどが入口に近くなつていて不便のため、大正時代、だんだん改良されて、かまどを後ろに移し、おもてから遠ざけた。さらに、かまどを家の中から外に移し、かまごやを造るようになった。日露戦争以後、わら屋根から瓦屋根になると、家の造り方も変化し、かまごやを別にすることも盛んになった。

おもてー表の間で客をむかえる。床殿とせむらとよばれる床があり、小床には仏壇がおかれている家が多い。報恩講の回り仏壇や、伊勢講、霧島講の神体、あんだ講の神体を

にある。主として家族の居間で、産室にも用いる。ざなかのえんそらの梁木に丸太をわたし、米の吠かますをのせる。また煙草の在来種耕作の時代は、ざなか、うつのぎなどの上に葉煙草をつるして乾燥させた。

なかえ―すえんま、ともいつて普通一段下がり、いろりがあつて、台所に相当する。炉の後ろに膳はんずだが並べてあり大黒様を祭っている。いたしきになつていて、味噌だる、醬油だるが置かれ、苗代りの半胴はんずや甘酒壺かんしゆがおかれてゐる。天井板ははらず、えのそらに吠かますをのせ、上がり下がりには小梯子がつつてある。農家では天井をはることはぜいたくとされ、乙名の家でもはれなかつた。

いろり―ゆるいともよばれ二棟造り家には、こぎにいろりがあるが、なかえ造りになると、いろりはなかえの大黒柱の横に切られている。家長専用の座席は横座よこざ（上座）で、その両脇は客座とかか座になつて、坐る場所がきまつてゐる。うすにわに面した方を木尻きじりまたは「とつ尻」とよんでいる。正月二日の初山の生木を正月七日まで燃やす。これを「とつ」と呼び、うすにわの方から燃やす。木尻には風を防ぐついたてが置かれている。いろり端は藁わら使い、芋積みの場所であり、来客の接待所でもある。自在鉤じぜかっがつるされ、煮たきの大事な用具で、鉤は丈夫なぐみのきを使い茶じよか、鍋をさげる。いろり端は家族団らんの場所であり、祖父母から昔話や民話を聞くよい所である。大黒柱は、光らないと主婦が無精だといわれ、一番念入りにみかく。

うすにわ―白庭で、白や杵などのおき場所で土間になつてゐる。かまどもここにある。大釜うがまが置かれ正月には餅を供える。かまどの神は家の神で、田植のあと、稲刈り、麦刈りには苗や穂を供えて、豊作を祈る。

屋根

瓦葺の屋根を一般の民家が使うようになったのは、日露戦争以後のことで、ほとんどわら屋根であつた。茅かや

葺がきはよくたもつがあまり見られず、山田の古老の話では明治中期以後一軒あつたらしい。それも「伊作の人で茅を切る人と茅もえ」を作つてできたもので、遠く伊作まで馬を引いて茅の購入に出かけた。普通は藁葺で、屋根ふき四人、小取二人で葺替えた。藁の場合三年はもてた。棟上の時いらかに、白旗の竹をX字に組んだものをのせる。いらかは、いらか竹といつてきんちく竹を四十本ぐらい使用し、いらかが風にとばされぬように、竹を半分に分つた「はなぐし」をさしこみ、「せめんしもと」といつて竹の丈夫なものでしめ上げる。この上にいらかをのせる。旗を上げるのは屋根葺の長老で、焼酒、塩、飯を供え「亭主柱にあげもんで」といつて供える。白旗は神の倚代ではなからうか。

以上は一般市民の衣食住について述べたものであるが、郷土の生活については郷土誌資料第三集「辺田文書」を参照されたい。なお漁村の生活については、鹿大水産学部原口虎雄先生の写本「万延元年申十月和田浜出火ニ付家内並ニ焼失品々取調帳」を参照されたい。

第三節 一生の儀礼

妊娠祝はんねい 妊娠五か月目の戌いぬの日か辰の日を選んで、帯とり祝いをする。叔母が白木綿の帯を贈り、赤飯や素麵を

つくつて祝う。しかし妊娠中には色々な禁忌がある。食物に関するものには、こしゆ、しよがなど、からいもの、脂肪のこいもの、塩からいものは禁ぜられ、あひるやその卵を食べると、手の指がひつついた子が生まれるとか、うさぎ

の肉は三つ口になるとか、柿を食うとしびがはいる、からいものは、めたんだれが生まれるといつて嫌う。行為上の禁忌も多い。妊婦が火事を見ると赤ほやけの子ができる、葬式を見ると黒ほやけの子が産まれるといつて忌む。その他、高い所へ手をあげぬ、重いものを持たぬ、乗り物は禁物。生きものを殺すな、妊婦の家の犬猫牛馬その他の家畜が孕むのをあいばらみといつて忌む。その反面「いみる」といつて良いともいう。特に四種のものが孕むと、どれか一つは欠けるといわれる。

出産 初産の場合は里帰りして実家で分娩する。井戸端、便所をきれいに掃除すると産が軽く、美しい子が生まれるといわれ、かまどの灰を不潔にしたり、月の夜に明りをつけて歩くと、めたんだれが生まれ、物もらい（ぎつつどんかとくどん）を大事にせぬと難産だといわれる。物もらいには、茶わんやさがづきなどを使用せず、ます（こ）で穀物をやらぬとたたりがあるといわれる。産屋はなんど隅の、暗い所が当てられている。分娩の仕方は産婦が産し、後からとりあげば（こじえば）が抱いて分娩したが、分娩を助け、子を生ませることをとりあげという。出生には潮時があり、満潮時に生まれる子は上吉で、どこかにお祝いのある時に生まれる。干潮時に生まれる子は死別するという。丙午のひの刻に生まれた女の子は夫をかみ殺すといい、寅の年に生まれた女の子も忌む。七か月子は育つが八か月子は育たぬともいう。

臍の緒、後産 分娩の時、臍の緒はとりあげばが苦でくくったという。出生年月日を記入して箱に入れ、大事に保存し、これを粗末にすると頭が悪くなるといわれ、本人の危急な際にのませると、一度は命をとりとめるといふ。また腎臓の薬になるといふ。女の子は嫁に行く時持たしてやり、男子は出征の時身につけさせる。その人が死んだら棺に

入れてやる。後産のことを「いや」という。犬などがとらぬよう便所の床下に埋めた。いや墓が笹貫にあつたらしい。
名つけ祝い 生児の命名式で、以前は三日目に行なわれていたが、今では一週間目にする。名の選択にもいろいろの習慣がある。名つけ祝いには妊婦の親、兄弟、親せき、仲人、助産婦、近隣者など招き赤飯を蒸し御馳走する。生児の名を披露して、助産婦から順々に子を抱いてまわし、仏壇の前ころばして、生児の成長と幸福を祝福する。

宮参り 男児は三十二日目、女児は三十三日目に、「ひばれ」「ひあけ」「ひがあがつた」といって、宮参りをする。産屋の忌みから、早く清められる機会で、宮参りは氏神に対する氏子入りの意味をもっている。部落の神社や門かぜの産土神うぶすぢのかみに参る。生児を母親が抱き、晴れ着を着せて参詣し、子供の成育を祈念する。神社で泣かすと元氣だともいわれる。

初節句 師走の十二日、男には弓と矢、女には羽子板を贈り、ゆんとや祝、はごいた祝いをする。この日親せき、親友、助産婦などを招き酒宴を開き、初生児のために将来を祝福する。女児の三月節句には人形を贈り、せんのか尻、紅白餅をつくり、男児の五月節句には幟を贈り、ちまきを作つて祝う。

誕生祝 生後満一年の初誕生の祝いで、この日の餅を力餅という。誕生より早く歩き出した女には餅踏みをさせる。鏡餅の上に草履をのせて歩かせる。足をかえて歩いたら育ちがよいといわれ、その餅は親戚、近親に分けてやる。

また男児にはそろばん、筆、硯、女児には物指、はさみ、針、その他をならべ、最初つかんだ品物によつて、将来を予祝する。女児は「二十日かた笑い」父親に似たら「ふ」がよいとされ、男女児とも生後六か月で食物をとると、むつかしい程食べるといわれ、耳たぶの大きいものは、運がよい。頭に皿が二つあるのは「じよざら」といって運がよい。牛馬の二つざらは「花たて」といって忌む。歯は上から生えたら、かつばがひくといい、「一日機ひしてはた」の着物を

着せる。

養い親 体の弱い子、男の子が次々に死んだ家の子を、元気な子供のいる家にやしないごにして、型ばかり養い親になつてもらう。盆、正月には養い親に贈り物をもつて行き、あずかった家でもその子に物品を贈る。

七ツ祝 七つになつた正月の七日に七ツ祝いをする。晴れ衣を着て早朝から神参りをした後、親類、知人宅をまわつて七草の雑煮を貰つて歩く。これを「ななとこんずし」という。ずしをもらいに来た家では、するめ、餅、金銭をやる。この日、親類、知人を招いて祝いをする。

子供組 七才から十四才をこどのしといつて子供組に入る。普通七才になつた年の一月七日の鬼火焚きにはじまつて、十四才の年の亥の日の行事で終わりになるが、海岸の下町では十五夜綱引の翌日、かしたわたしをする。流れ船にかしたをのせる。主な仕事は正月七日鬼火、正月十四日はらめ祝い、七月の盆角力、八月十五日夜わらもらい、綱引、以前は十月亥の日のぼたんつかんなどがあつた。

青年組 十五才になると二才入りする。二才入りは農民の元服で、正月中に行なわれた。二才入りの日宿屋をきめ、十五才になつた者は、家の清掃、料理の手伝、焼酎買ひなどの手伝いをし、夕方父親に連れられ宿屋にくる。宿屋では年齢順に座り、入口で父親がよろしく頼むと願い入れをする。この夜馳走になり、初めて二才入りの式がすむ。門割制度の時代要夫として公的に認められるわけである。十五才から十八才のものは「こにせ」といわれ、下働きをさせられる。十九才、二十才のものを「こにせがした」、その上を「にせ」、「にせがした」とよんだ。二才組の仕事は、部落の共同作業、屋根葺、道づくり、警防、葬式のいけほり、神社のご神幸の道具持ち、その他太鼓踊り、棒踊り、

鐘踊りなど鍛練と結びつく踊り、雨乞い、田植祭りなどに参加し、きびしいしつけと制裁の厳格さは、郷士の間で行なわれた郷中教育にて、二才がしたの力は大したものであった。蕨野部落の二才入りは、彼岸の中日または亥の日に、谷山の浜にまさごをとりに行き、これを氏神や産土神に供えた。これを「はっさめい」といって、この夜二才入りの酒宴が行なわれた。中塩屋部落の二才入りは、正月十五日の夜、二才頭の家が座元で、その日の行事に「ついそろうろう」というのがある。三角に切った大根に松葉を一本さしたものを、口にくわえさせ、右手にしゃもじ、左手に杓子しやくをもち「ついそろうろう、ついそろうろう、二才しも三才しもよろしくたのんもす、めしげと杓子を天にあがいもんごつ」ととなえながら最初は右から一回転、次は左から一回転する。途中で大根が落ちたら、またくわえなおして最初からやりかえず。初入りの二才をいじめる行事であつたらしい。その他二才だけの縄ない講があつて、雨天の日など縄ないをし、その後飲食を共にしたらしいが、鍛練行事として角力、石かつきなどもあつた。山田下部落では、二才入りを「はっじゃ」といい特に吸い物が与えられた。

結婚 地つるぎから来る、嫁は「ふ」がよかといわれる。仲人は他人をたのむ。もとは結納ゆいのうをする習慣はなかつたらしい。婚礼のことを「ごじゅんけ」という。婚礼の当日「むごしんどん」といって婿と親類または友人の既婚者と二人で嫁の家に行き、その後仲人が親類代表といつしよに婿どの餅、酒だる、茶、下駄、草履などを持って嫁を迎えに行く。嫁の家ではむこ、むごしんどん、仲人の順に座り嫁や馳走が出る。この時嫁は姿を出さない。いよいよ出発の時、嫁は仏壇を拝み、父母に別れの挨拶をする。嫁は表玄関から出かける。長持、たんす、鏡台、たらい（大小）洗面だらひ、たんご、その他を「いねどん」が担ぐ。送る時、婿の方が五人きたら嫁の方は三倍の十五人、婿の

家に行く。酒は半分もどしで、婿の方に返す。嫁と嫁入道具の行列が道を通る時、仲人は嫁が通るから見てくれと呼ぶ。嫁も婿もこうもり傘をもつて歩く。婿の家についたら、玄關に塩の「ちよんまんじゅ」が二つ並べてあつて、盆ごといただく。座敷の外にしきりを作つて、三三九度の盃がなされる。その後おもての座敷に嫁は向かつて左、婿は右に座し、嫁の側に婿どんの方、婿側に嫁の方の人が座し、嫁のそばに仲人の外に「そばよめじよ」が座る。宴たけなわになつて、三味線をひくと「ひき出す」といつて忌む。時をはかつて新婦は「色直し」といつて、今までの盛装をくずして着物を替える。「嫁女茶」の給仕がなされるが、これまではみんな帰らない。

祝い歌

うれしめでたの若松さまよ

枝も栄える葉もしげる

新婚の夜は、婿は近所隣に逃げて、遊びに行き嫁ばかりだったという。結婚式の翌日「いたしきばれ」といつて、婿の方で近隣の人を招いて茶のみをする。

初入り 「三日もどい」といつ。嫁の里帰りのことで、嫁は丸まげに結つて、婿の母がつれて摺埃回りする。餅や酒をもつて行くが、この餅を「はついいの餅」といつて、親せきにくげる。餅をもらつたら、嫁の油代といつていくらかの金銭をつつむ。この日は晴雨にかかわらず、万障繰り合わせて決行された。

厄払い 男は四十二才、女は三十三才を厄とし、特に男の四十二才の厄の人は、「みちでなんもするな、いっしよに道を歩くな」といわれた。節分の日、節変わりの日に友人親類をよんで宴をはり、夜になつてから、近くの四辻

で自分の年令の数だけ身体にこすりつけて「銭まつ」をして、集まってきた子供たちに拾わせ、後ろをふりむかずに帰ってくる。拾った金には厄がついているといつて、飴など買って食べる。

葬式 死直後―家に死人が出ると、先ず死体は北枕にし、顔に白布をおおい、着物は左合わせにして、裾すそを胸の所におきかけておく。枕元に練香、ろうそくを立て、白飯を茶わんに盛り、竹箸を二本つき立てる。同時に寺に通知の使いを二人走らせる。これを「かけつけ」という。その晩「とつぐん」にふれをし、近親が集まって通夜をする。葬式の日取り、買い物などを相談し世話役などをきめる。

葬式組 死人の家に対して、「とつぐん」で加勢する。加勢は一人以上出す。もどこの米といつて一人の場合は二合五勺、二人の場合は五合持つて行く。以前は靱を白でついたので相当の加勢が必要であつた。男子はぞうり、旗竿、たるの繩、花筒、造花、提灯、墓地のいけ掘りなどを分担し、女子は炊事接待を担当する。いけ掘りの人は焼酎をもつて行くが、残つたら持つてかえらない。一番底の土をとつておいて、棺をいけたあと家族の人がその土をまく。

出棺 納棺は近親者でつとめるが、左よりの荒繩をたすきにかけ二人でからげる。この人を「けじよ」といつて納棺がすんだら、裏口から裸足で鎌、塩、ひのとつ、若干の金銭をもつて近くの川に行き「ここの座敷をかしてくれ」といつて死人の着物を洗う。帰ってきたら塩で手を清め、着物は北ぼしにする。棺の中に爪、茶、その他を入れ、死人の顔に白紙をかぶせる。釘うちは金物を使用しないで、石でたたく。料理は精進料理で、新しい竹箸を用い白飯に箸をつきたてる。味噌と塩をいっしょに入れることを忌む。葬式のことを「おんぼ」といい、別れの料理を「おんぼの料理」という。出棺は玄関からせず、えんがわから出す。行列の順序は、たいまつ、提灯、旗、花生、まえぞつ

(線香、ろうそく、造花、位牌をのせたもの) つか、たる、ぞうりもち、これは死人がさんずの川を渡るとき、はくものという、そのあとに僧侶、喪主、遺族、一般会葬者の順が普通である。棺をかつぐ人を「もい」といい二人でかつぐが、三角布を肩にかけ、ぞうりをはく。一人は死人の父方から、もう一人は母方から出て、年の多い方が前で、左肩と右肩にからう。

埋葬

棺は西向きにおかれ、提灯、肩かけをいけに入れる。そのあと棺をいけ、「さらば、よかとこいにいつきやい」といいながら土をまく。すんだら盛り土してたるの中心に竹を一本立て、「きつど」といつて鍬で竹を切るまねをして、つかをたてる。ぞうりは捨てて帰るが、杖にさしたぞうりは棺の横に立てて帰る。帰途は後をふりかえらないし、帰ったら庭先においた竹箒をまたぐ。塩で手を洗い、おほらいをする。そのあと「しよゆ」になる。加勢の人はその日喪主にだまつて帰る。

法事

三日目を「ひで」という。親せきは豆腐などを持って、「ひでにかたらせてくれ」といつて行く。三日だご(はなつまんだご)を三ご供える。飯はその喪主から先に食べさせ、ひでに行つた人は後から食べる。帰る時は「ひでんぜん」といつて若干の金銭を置いてくる。一周忌を七日日といつて、茶のみをするが、これは喪主がいつさいを受け持つ。一周忌から七周忌までの間、寺まいりに行くが、これは親せきがしてくれる。七周忌は四十九日といつて、「忌明け」で、その日をまた「ひばれ」といつて精進落としをする。今ではこの期間が永すぎるため、葬式後、二、三日して他人が魚、獣肉などもつて精進落としをしてやり、四十九日を一周忌またはひでの日に引き上げて行なうようになった。

年忌 四十九日の後は一年忌、二年忌、七年忌、十年忌、三十三年忌、五十年忌でこの日にあたる時、法事を営むが五十年忌の時は午前中は精進料理、午後は酒宴をはる。初盆の時は七夕は立てないし、十五夜は陰膳をして供物は外に出さない。

第四節 社会生活

地域社会の秩序と安寧を保つために、年令層ごとの組や、各種の講、共同作業のための「結」^{かひ}などがむすばれて、相互扶助と経済的交流がなされ、つきあいが行なわれてきたが、特に藩政時代の門割制度では、門の組織が生活の中心をなした。

谿山郡七村一町の内、松崎町の野町をのぞく七村は五ヶ別村、山田村、中村、上福元村、下福元村、和田村、平川村で、その門数は三六八門である。門の責任者を名頭または乙名どんといひ、十五才から六十才までの男を要夫（用夫）とよんだ。門がいくつか集まって郷中^{ごうちゅう}となる。郷中では正月のはじめに初談合^{はつだんご}があつて、一年間の予算、決算、年間計画、神社の氏子総代の交代、その他農事の用水灌漑、井せき当番、用水分配などがきめられ、これに従わないものに対する村制裁、村八分などもきめられた。村八分のことを「ちよかかろわせ」といつているが、相当強いものであつたらしく明治になつてからは、選挙についての投票等で村八分にあつた者がいたらしい。中町の上西部落では今でも、正月の部落の最初の「寄い」^よを初談合とよび、いろいろの年間の計画、世話人等がきめられ、その後新年宴会

が催されている。滝ノ下部落では一年の総決算の日を十二月二十五日にきめ、この日部落の七つの神に供物を供え、しべを取り替え、宿屋をきめ、男子だけ集まって七迫七神講をする。これを「しつちやこ」とよんでいるが、この夜をまた「肥料代よせ」ともいって、一年間の農事の決算をすませる。また、これが部落の忘年会とで、小触こぶれが二人いていつさいの仕事を担当している。他部落におんじよ講とよばれるものがあるが、性格がよく似ている。

共同作業を目的として、各戸の労働力を交換し合うのが「結ゆい」で「いもどし」または「ひまがえし」とよばれている。「ゆい」は結ぶ結合、共同を意味することばであるが手間換えともいわれる。田植、麦植、稲刈、甘藷とりなどに行なわれている。もともと門は勿論郷中全体で行なっていたものであろう。今は近所知人親せきでも行なわれている。次に広くおこなわれているのは、屋根ふき替えのゆいであるが、これもだんだん、わら屋根が少なくなり、その姿が見えなくなった。二才組で雨天の日宿屋をきめて、繩なひない講をして繩なひをつくり、ゆいのものとしたとのことである。新築、道づくり、墓こしたえ、溝ほさい等はみな共同作業で行なわれ、その面影は現在まだ各部落にのこっている。あらゆる生活の方式が、相互扶助的な郷中、門の社会では、地域団体としての「組」が重要な役割を果たしている。「組」はくむから転じたもので、一定多数者の結合を意味するが、講といくらかその内容が異なり、主として、地域的団体で地縁的な結合が強く、七才から十四才までの子供組、十五才以上の二才組、その他普請組、葬式組等や、また講としてその面影がのこっている。二才組や子供組については、一生の儀礼の項で述べた。さらに葬式組についても述べたが、村人同志が金融を目的として結んだものが頼母子講、無尽講であるが、「もえ」とよばれ、今でも盛んである。部落に不幸があった場合、葬式の時は「もえ」に似た無情講がある。

無情講

村のつき合いで一番大事なことは死者の処理であるが、悲しみにみちた一家の者だけで処理することはむずかしいので、隣近所の手助けをかりる。たいてい葬式組があつて、葬式当日は男は葬具いっさい埋葬までの仕事にあたり、女はまかないのいっさいにあたり、あと始末をして帰る。葬具製作用具と食器は講の専用で、部落でもつているところもある。無情講は「むじよこ」または「もじよこ」とよばれ、米の収穫後各戸から米を集め宿屋に保管する。その年不幸があつて、葬式をしなければならぬ時はおとなの場合米二俵、子どもの時は一俵貸してやる。もし不幸がなかったら、その米を売却するか、米の不足の人に貸してやる。葬式組としての相互扶助の気持があらわれている。借りた米は翌年のとり上げの時、返納することになっている。集荷量はその部落によつて違つてゐる。以前ほどの部落にもあつたこの講も、だんだんすたれてきたが、松林部落では今もおこなつてゐる。十一月十五日、各戸から米一斗あて集め、集荷が終われば宿屋をきめて飲食がはじまる。鶏の料理、なます、飯、焼酎と宴が盛んである。不況の年や田の少ない山間地帯では、欠くことのできない一種の模合でもあるわけで、今では年一回親睦会をかねて夜おそくまでおこなつてゐる。

休み日

農耕を主とした地方では、古くから年中の折目を立て、節供、節日ともいわれ、神を祭り禁忌を守つて、日常生活の日の「け」の心持ちとは異なつた「はれ」の感覚をもつて迎える日で、働く日でなく、生産行為をせぬ日である。節日のほかに盆、正月および神社の祭礼などが重んぜられ、その他さのぼい、にわあがいなど特に馳走をつくつて食べて楽しんだ。そのほか、五月の第一の「地火」には鍬をかためんといわれ、この日田植をすると葬式の日米となると中町ではいつてゐる。今でもこの日は農作業を休む家が多い。休みが共同生活の機能であることを明ら

かに伝えてゐる。怠け者の節供働きといって、休むべき日に働くことは、働くべき日に休むのと同様に悪徳と考えられていた。

明治以来、七曜の制が採用され、日曜が休息日となつたが、村には古来の生活の伝統がまだのこつてゐるが、農休日定めて休息する習慣がいくらかできて来たようである。

休み日としては、これらの外に各部落で講をつくり、親睦、慰安を深めているものがある。

油講あぶらこ

中町の松林部落では、椿の実から油をしぼる共同作業の後で、一人盃一杯の油を売つて費用をつくり、女だけで慰安の講をした。椿油は古い生活では重要なものであつた。川辺町、吹上町、金峰町から、谷山のこの地方にこの女の講で「おなごんこ」といわれている。女だけの講に滝ノ下部落に弁財天講がのこつていたが、戦後はやつていない。弁財天に幸福を祈願するもので、「びじじんこ」と呼んでいるが、はじめて嫁入りしてこの部落に村入りした夜、婦人たちが集まり、その嫁さんにあぐらをかかして、豆腐汁や飯を御馳走する。男性禁止で盛大な講であつたらしい。こうして村の掟おきてに従つて村入りさせられたものであろう。

明治になつてからは、仏教を中心とする報恩講が盛んで、部落の信仰の中心になつてゐる。

報恩講

寺院を中心とするものに報恩講があるが、これは明治になつて廃仏毀釈後、各寺院が中心になつて門徒擴張のためにつくられたもので、ほとんどの部落にも残存し、盛んに行なわれている。今は村組織に信仰性と娯楽性を加味し、「おまいさあ」とよばれる仏壇をもち宿屋をきめ年中行事もきめて広く続けられている。浄土真宗によるもので、大川内部落では婦人のみの尼講になつて、帰正講とかかれた講箱がのこつており、中村の山園部落や錫山で

は最勝講と名づけられて残っている。尼講は月の九の日をきめ、僧侶も列席して読経、説教、御馳走となり、終わって頼母子講が僧侶の手でなされ、講員の希望によるものと強制によるものとの二つがあるが、人集めの対策として講ぜられてきたものと思われる。火の河原部落では「よにんこさあ」とよんで、三戸が一組となり、月の十二日に順序よく宿屋を交代し、ほら貝を吹いておとめの始まりを知らせる。報恩講の料理につきものは「おひら」で、きのこ、きざみこんぶ、こんにゃく、大根、にんじん、ごぼう、あげなどのにしめで、ご馳走の一つにあげられている。

五ヶ別府の宮園部落では、十二の講があり一年に毎月一つずつの講があったようで、農村としての慰安、親睦を深め門割制度のきびしかった藩政時代以来、講を唯一の楽しみとして生産にはげんだものであろう。小麦がとれたら小麦団子くい、小豆がとれたら、ぜんざいくい講などあったことから見ても、講がその地域の民衆と深く結びついて、人間関係の調整に役立ってきたものであろう。講を通しての生活文化の向上も見られて、ほほえましい。

共有山 村や部落で共有している山野が、今でものこっているが、共有山またはもえ山とよばれ、藩政時代門はほとんどそれぞれの共有山をもっていたらしい。五ヶ別府町や山田町方面の北部の地帯では今では見られないが、平川町、下福元町の影原、向原部落では今でもまだ残っている。和田名の部落は錫山の権現ヶ尾にもち、影原部落は野頭もち、その外須々原なども共有山になっていたらしい。明治維新になりその形態がくずれ、私有化しているが、今でも共有山、共有地の持ち主の所有権についていろいろ噂されているが、以前は共有山は共同の利益を守るために極めて大事なものであり、その利用にはいろいろの制限があったらしい。

節五節 祭 祀

祭祀には様々の形のものがあるが、寺院とか神社ではなく、個々の家々の神とか路傍の小石祠など、日々の生活と結びついている民間信仰の祭祀について述べたい。

一、氏神（内神）祭

氏神は普通産土神、鎮守神と同じく村を守護する神のように見られるが、村の鎮守の神でなく一門一族の神としての氏神である。氏神の変遷はいろいろ考えられるが、ただ血縁に近い気持ちで、固く結合し、氏の成員は氏神を共同の祖先として意識し、なるべく血縁を絶やさずにそれに対する祭祀を維持しようとしている。氏神には旧郷土を中心とするものと、藩政時代からのこる門氏神、門神を中心とするものとにわけることができる。旧郷土による氏神祭りは、その氏の名前をとり、講とし続けている。入佐氏による惣福の入佐講、浜田氏による後迫の浜田講、佐藤氏および川崎氏による麓、七村の川崎講、清藤氏による井手宇都の清藤講等は今なお盛大である。

浜田講の氏神様は諏訪神社の南側にあり、神体は十三体、長さ二十糎程の木片や真石に白紙の着物を着せ、真綿のひもをかけ、麻のひもで帯をしめ、四年目ごとに着替えさせる。神だなに元禄十年とあるから、二百六十年余続いてきたものである。祭日は旧暦十一月二十八日、祭典の朝、あげ潮をくんで神前に供える。これは浜田氏の祖先が浜に流れついたので、潮水をあげるといわれるが一種の浜下りの行事であろう。この潮水といっしょに、しばの葉を花瓶

の中に入れておくと、回目の氏神祭りまで水はほとんど減じていないとのことである。錫山の松ヶ浦に、浜田氏関係の家が十四戸あつて、代表者一名と講金がよせられるという。当日の供物は赤飯、桑、四ッ組飯、焼酎で、祭礼のあと宿屋で直会となる。明治三十二年来の記録がのこっている。

入佐講の記録は講箱があつて、文政二年（一八一九）から現在まで記されている。入佐氏はもと島津の家臣で伊集院の入佐に住んでいたが、のち谷山に住みついたものといわれている。川崎講の氏神祭りは旧十一月十二日、御神体は軽石六個、明和三年（一七六六）以来の氏神日記が残っている。

明治十八年の記録によると、神前江備付品

一、生水 二升 一、酒 五合

一、赤飯 壺升但糝付添へ

一、魚 六疋

一、用紙 壺帖

一、油皿 但シ油火シン三重共

一、焼酎 壺升但前日屋根葺之節宿元へ届ヶ切りノコト

一、豆腐 半箱 当日

右座元より引受のこと

一、金 拾銭也

右二付出席致セヌ人ハ金五錢ヲ出ス祭ハ十一月廿九日ヲ以テ執行スルコト

前書ノ通出席人員協議ノ上相定置候也、明治十八年旧十一月二十四日とある。

門氏神祭りは藩政時代、どの門でも盛大に行なわれたと思われるが、現在氏神祭りとしてその名残りを残している。谿山郡の藩政時代の門の数は三百六十八門といわれているから、この門の数だけ門神があったと思われる。上福元町の薬師堂、波ノ平、中町の上西、五ヶ別府町の宮園、下福元町の坂上、平川町の浜平川、山田町の大川内、鹿倉等氏神の祠がのこっていて、年一回祭礼が行なわれている。

加治屋、池本、八反田、庭田の各門は薬師堂の四門といわれ、神祠はわらのこもでつくり軽石が神体で、三個ないし八個ならべられている。

浜平川の田尻門の氏神祭りは旧正月前、神官をよんで山腹にある氏神の前で祭りをおこなうが、神体は真石十二個名頭名子の数だけあるのだろう。供物は赤飯である。祭礼が終わると集まった子供たちに、赤飯を柿の葉の上に少しづつ配ってやる。この氏神は神田をもち、この神田を順番に耕作し、その年耕作した家が宿屋となって、その夜直会となる。料理はきまつていて、赤飯（黍をのせる）魚の酢物、さしみ、煮付けの四種である。参加者は田尻姓の人だけである。これらの祭りは最も生活に深くいきりこんで親睦を深めている。

二、もいどん（森殿）

もいどんは薩摩、大隅半島に広く分布しているといわれるが、谷山でも永田川を中心とする農耕地帯であちこち見られる。永田部落の小迎森、田中氏のもいどん、田辺、七村、上西、木ノ下部落にのこっている。もいどんは藩政時代、門かどの人々によって祀られている門神で、氏神と違って普通祠も神体もなく、「もいやま」といわれる木立ちの中



小迎森のもいどん

の大きな木を神体のようにしているものが多いといわれる。永田部落の小迎森のもいどんは、田圃の中にこんもり繁った森があるが、この付近の小字名は島森とよばれている。「西藩野史之六」によれば「応永三十二年（一四二五）春正月（二十一日）久豊公薨ス享年五十一義天存忠ト諡ス（伝云公ヲ葬ルノ地ヲ詳ニセス或云谷山ノ田中森アリ島津森ト号ス、是即チ公ヲ葬ルノ地ナリ、或ハ云穆佐護証寺中石墳アリ石棺ヲ埋ムコレナリ、二説拠ナクシテ詳ナラス」とある。代々小迎森門によって祀ってきたものであるが、村人はたたりがあるといつてあまり近よらない。たぶの大木のもとに丸石が土中にうづまっている。近くの田中門のもいどんは、大木の下にわらぶくりの神祠がのこっていて、年一回シベを取り替え、祭典をしている。上西部落の「もいどん」は、馬頭神があり、初午の時は最初に初午踊を奉納している。別に五輪塔二基とわらぶくりの神祠があり、今では畦地周二氏が所有し中福永の永田栄吉氏が花香をとっている。田辺の「もいどん」は現在の田辺部落の中心にあたる場所に位置しているが、この付近は戦時中田辺航空工場

のあつた所で、もともと谷山の一等田を、不動寺の山からシラスを運んで埋めた所である。田圃の中にあつた「もいどん」がそのまま残っている。辻ノ堂、惣郷御中の郷士たちによって寄進された、文化十二年（一八一五）建立の石祠がのこり、毎年六月燈が行なわれている。今は辻ノ堂の的場氏が花香をとつているが荒神様といわれている。木ノ下部落の「もいどん」は木ノ下川の改修により取こわされたが、そこにあつた田の神、馬頭神、水神は移転され、慈眼寺道路の道下にのこっている。田の神は宝暦六年（一七五六）に建立されたものである。「もいどん」は一般に門の神といわれるが、氏神（内神）と重複したものもある。

三、田の神

「たのかんさあ」「たのかんどん」といって、安山岩などでつくられた石像が、田の畦や路傍にたつている。田の神の信仰は各地に広く分布し、南九州に今までの調査では約五百基以上存在するといわれ、谷山では現在しているものは三十体ほどである。最も古いのは享保六年（一七二一）造立の永田部落のもので、それ以後近くは昭和年間までなつている。田の神像の姿態は多種多様で、普通甕甍を笠に仕立ててかぶり、右手に杓子、左手にわんか団子を持った農民立像が多い。古来農神は生産を司る女神と考えられているが、田の神は男女神いずれかの判別についてはなかなかむずかしい。ほとんどが老爺の表情をした農民姿の男神であるが、柿木田の像は墓石に似た女体のようである。田の神像の形式は、年代や部落によって、その種類、形態が変化してきているが、田の神一覽表を参照されたい。

田の神の祭りは春秋二回行なわれている。田植えおよび稲刈りに際して、しべを取り替え、焼酎、ご飯を供え、豊

作を祈願する。永田川を中心とする周辺地帯は特に盛んで、北は五ヶ別府町から谷山の市街付近まで、盛大になされてきた。田の神講は、さのぼいどつ、しめどつの年二回が多く、宿屋をきめて祭りをやっていたが、最近では公民館等で部落全体が集まってやっている所が多い。戦後は各戸でする家が多くなつた。宮園部落では明和七年（二七七〇）以来現在まで順回りで宿屋をきめてやり、講記録も残されている。

四、山の神

山の神は山を領する神として広く一般に信仰されている神である。農民のいう山の神は、春に山から里に下りて田の神となり、秋の收穫がすむとまた山にかえつて山の神となる。しかし山仕事をする人の信ずる山の神は田の神とは関係がないらしい。神社の祭神としての山の神は大山祇命や木花開耶媛とされているが、山の神の性格にはいろいろ伝えがある。山の神は天狗の別称といわれたり、又魔物として恐れられたり、普通荒神様だといわれている。祭日は正、五、九月の忌の日の十六日が多く、この日は山の神が狩をする日、木種を蒔く日、木を数える日といわれて山入りを忌む。もし禁を破つて山に入ると、木と間違えられて数え込まれてしまうといわれる。山の神の祠は石や木の祠が多い。山の神の供物は餅、菜、酒が主なもので、このほか塩、米をあげる。山の神の供物を女が食べると、気の荒い子が生まれるといわれる。山の神はおこぜ（海魚）を好物とし、山の神の使いは狼、蛇、猿等といわれている。各部落の山の神講で、山の神祭りをしているが、今では山仕事に関係のある製材業、粘土に関係のある窯業者たちによつてなされている。鬢石びんいしの山の神は石祠で、春秋の彼岸におまいりするが、これを今生参りこんじょうまいとよんでいる。柿木

田の山の神は麦藁でつくり、しべが三本さされた長さ十五糎のものである。滝ノ下の山の神祭りは十一月十六日、荒神様で禁忌として参拝の時は必ず裸足で行くこと、草履や下駄ばきで行くと、その後必ず腹痛があるといわれている。祭りの夜豆腐汁をつくり、箸は特別大きなもので木の枝でようやく口にはいる位のものを作り、食べる時は相手の箸を横取りしたり、奪ったりして乱暴なことをする。一鍋の豆腐を四、五人で食べるが、滝ノ下の豆腐喰いは有名である。

宮園部落では安永七年（一七七八）以来の山の神講の記録がのこり今も田の神講と一緒にやっている。茂頭部落の寺山には享保十四年（一七二九）に開山の「山神 伊東 藤原 祐義」と岩壁に刻銘した高さ二米の山の神がある。錫山、火の河原、勘定方面は特に山の神が多く、小さな石祠がたてられているが、その横には何百年も経過した大木があり、神木とされている。火の河原に通ずる通称「よくんでら」の山の神は弥陀三尊の梵字が陰刻されて、石祠の中にはさびた刀が奉納されている。勘場から鬢石に通ずる道路わきに文政七年（一八二四）建立の山の神があるが、拾参鹿倉諸色以上十一名で奉寄進したものである。三重野から勘場のこの地域は、藩政時代の拾参鹿倉の一つで、狩の中心地であり、巻狩がなされた所で仮屋跡ものこっている。

五 水神

永田川に沿うた淵や、水辺にはあちこち小石祠が造立されている。また海岸地帯や古井戸のある所にもある。水神祭りは、旧暦五月十六日に行なわれる部落が多い。子供たちが焼酎、菜を供え、その菜を少しずつ食べさせて河童にと

られぬよう祈念する。白山部落ではこの夜「とつぐん」の人たちが宿屋をきめて集まり、焼酎、なます、しめものなどで講が行なわれる。

皇徳寺部落にある水神祠は墓石の形態で、寛保二年（一七四九）に造立されたもので、この近くに淵があり、多くのたたりがあるといわれている。三重野部落の水神祠は寛保三年（一七四三）造立のものであり、辺田の水神祠は延享元年（一七四四）で、このころの造立のものが谷山では一番古いもののように、江戸中期以後の造立であるが、水神の信仰はもつと古くからあったものと思われる。

六 庚申神

永田川を中心とする農耕地帯の山田、五ヶ別府、中町では、庚申神をまつる庚申講がまだ行なわれている。しかしその盛んな割に、他地方と比較して庚申石塔がきわめて少なく、坂上部落に延享四年（一七四一）造立の庚申供養塔が一基あるのみである。庚申講は今でも盛んで、大園、山ノ園、山田下、三重野、笠木、皇徳寺部落等で行なわれている。笠木部落では旧暦九月二十三日宿屋をきめ、前日米をあつめて、当日夕方餅をつき、庚申様に供える。餅は直径二十センチの大きなもので、食べられる程腹いっぱい、のこりはみんな持ち帰る。「さつどんの餅つき」とよんでいる。二十三日の夜行なうのは、二十三夜待ちといっしょにするようになったのであろう。皇徳寺部落には寛延元年（一七四八）に描かれた肉筆の青面金剛の絵がのこっているが、その他の部落の絵は紀年がないので、明りようでないが、江戸中期から盛んに行なわれ、現在に至ったものであろう。山園部落には嘉永四年（一八五二）に奉納された

青面金剛の絵が厚い板にはられ、立派な神だなに納められている。

七 馬頭観音（早馬神）

牛馬の飼育者が、馬頭観音を信仰することは全国的であるが、牛馬の成育と無病息災を祈願して、道路わきや公民館のあき地に、墓石型の石祠や普通の石祠が造立されている。石祠の面に牛、馬の浮彫りがしたものがある。どの部落にもあったものであろう。現存するものであまり古いものは無く、江戸末期の安政年間から明治、大正時代のものが多い。

平馬場部落では馬頭観音に、しべをあげ、米、塩を供える。宿屋をきめて各戸一名ずつ集合し、鶏料理でまつり、帰る時牛馬に一個ずつ握り飯を持ち帰る。夏には六月燈も盛んで、講の記録もあつたらしいが、終戦後行方不明になつた。上西部落には「早馬どん」といわれる森があり、馬頭観音が祀られ、旧正月のはじめの初午祭りには、一番先に参拝し、初午踊りを奉納する。今では彼岸講といつしよに「馬どつ」をしている。古くは「はやま講」と呼ばれたものらしい。田植え後悪い血がたまつたといつて、薬師堂の伯楽どんから血をとつてもらい、入来、奥、新入部落ではチダシ講がなされていたらしい。

七 秋葉神

あつかどん、あんださあと呼ばれる火の神であるが、以前はあちこちの部落で祀っていたらしいが、今では辻ノ堂、

北麓、堂園の部落にのこっている。秋葉神は古来火防の靈験あらたかなものとして尊崇されているが、堂園部落では昔火事で部落が全焼したので、秋葉神を祀るようになったという。今では家の守り神として、一年ごとに各宿屋を持ち回りにしている。特に新築の家があれば、その年は縁起がよいようにこの神をあずかっている。祭りは十一月十四日で秋葉神講をしている。北麓部落ではアツカ講とよび女の人たちの講である。薬師堂部落でも、以前はあつか講があつたらしいが、今では各個人で火の神を祀っている。加治屋氏の火の神は白紙で人形を切り取り、板にはりつけた珍しい神で、家のなかえに立ててある。普通はかまど神を祀っていて、正月には餅を供える。

八 えびす神

下町部落から和田町にかけての漁業地帯では、えびす様を祀っている。木造の神殿に鯛をもったえびすさあの木彫が神体で、彩色したものである。海岸で風が強いので神殿をセメント造りにした新しいものもある。

和田町の海岸一帯は、掛之下、森山、一番組、塩屋の四つの部落に分かれているが、もとはこの四部落の一つのえびす神社があつて、漁業の神として信仰されてきた。六月燈をして、この夜えびす講をする。下町部落では港の入口にえびす神社を建立し、六月にえびす祭りを行っている。当日は船止めにして、午前中二才たちが魚とりに出かけ、午後はえびす様に魚を供え、航海安全、大漁を祈願するが、供物は四本足の肉類は禁ぜられている。この夜えびす講が盛大である。また浦祭りといって、漁霊の供養を僧侶によって行なっている部落もあるが、今では夕方浦祭りその後えびす講をしている。下町部落には明治三十四年以來の講記録がのこっている。このえびす祭りの外に、東塩屋、柏原、

新地の部落では御岬講おみさきをしているが、やはり航海安全、魚霊供養、大漁を祈願するもので、旧暦七月十六日に行なっている。佐多岬を船が出る時、酒とおさいせんを木片にさして、海上にあげて通る。講の当日はいつさい海に出ないことになり、宿屋に集まり、一か年の反省と今後の計画を話し合い、くじによって次の座元をきめる。祭りは神官によつてなされ、直会になるが、さしみ、煮つけ、ふらいなど魚の料理で四本足のものを使わない。座元になった人は、お岬様と金比羅様をあずかり、毎月一日と十五日は初潮をくんであげる。講金は戦前は漁獲高の十分の一ときめられ、貯金して頼母子講の形式で不自由な人に借したり、不幸のあつた時見舞金とした。講祭りの道具も以前はいつさい揃っていたという。座元になったら、その年はず（漁獲）が多くまた災難もなく、みんなあたりを希望する。「谷山よめじよ」とよばれた駄売りの女たちによるてご祝い講があるが、みんな浦浜にのこる漁民の講である。最近では港祭りとして一括して行なわれているようである。

商店街の上松崎、下松崎では蛭子神が信仰されているが、海岸地方のえびす神の信仰の外に商売繁昌を祈願し、下松崎に蛭子神の石祠がある。

九、塩釜神

上塩屋、中塩屋、東塩屋、西塩屋、和田塩屋とよばれる各部落は、塩の専売制度になるまで製塩によつて生活を維持してきた所であり、中塩屋の塩釜神がその信仰の中心で、その分社が各部落にある。住民は半農半塩で、七月から十五夜頃まで夜通し塩たきをした。製塩道具としては塩ぶい、一石だる、鉄釜、よせ板、ちよう（すくいちよう、だ

いちよう) 塩だんご、こん(塩つぼ)などである。

塩釜神は塩土老翁で古来航海安全、製塩、漁業、尚武、安産の神として信仰が深い。祭りは十一月十一日、当日若い娘が丸まげの髪を結い新調の着物を着、花嫁姿で神に奉仕する。男子は十五才の両親の揃った者が、かすりの着物に袴をつけ、たすき姿で奉仕する。神前に塩魚、こんぶを供え、その後腰をおとして後すざりしながら、供物を参列の氏子に分配する。祭のあとの直会には、吸い物、なます、赤飯、取肴、ひらつき、さしみ、四ツ組飯とたいへんな馳走である。当日部落では甑立てで飯をむした。境内で角力を奉納し、商店も出たが、そば、じゃんぼ、しんこだご、しあめ、ちゃんぼこなし、などが売られた。塩釜神は神田をもち、今は三部落で交代で神田を耕作し、その年の神事いっさいを受け持っている。なお三部落で分神をもち、一年交代で宿屋をきめて持ち回り、月の朔日、十五日には初塩をくんで供えている。

十、疱瘡神

明治中期まで疱瘡がはやり、どこの部落も難儀で、部落ごとに疱瘡神をまつり供養した。慈眼寺跡の境内に明治十八年疱瘡大神の石塔がのこっている。火の河原には土饅頭の疱瘡塚があり、春秋の彼岸に団子を供えている。南麓では疱瘡が流行しはじめると、各戸から米をもらい、これをたいて神に供え、みんなで食べ、神官にしべを切ってもらい、本域の御伊勢様に疱瘡踊りを奉納した。疱瘡踊りはどの部落でも盛んであったらしく、今では川口部落、平川町の豆打、海の上部落、柏原部落にのこっているが、疱瘡踊りの一部の馬方踊りとしてのこっている。このことは民俗芸

能の項でのべたい。部落の入り口に繩をはり、八つ手の葉、らつきよう、にんにくなどをはさんで下げ、佐々良三人とかいた杓子を床の間に置いたりした。今でも田植上がりの七月上旬、病時びよどといって、この繩を笠木部落では張っている。

十一、塞神(さいの神)

さいの神またはさへのかみと呼ばれるが、普通は道祖神といわれる。防障、防塞の神で、外からおそい来る疫病患靈などを、村境や峠、辻、橋のたもとなどで防障する神であり、また生者と死者、人間界と幽冥界の境をつかさどる神といわれている。

谷山諸記によれば、今の下松崎のあがいたての付近に道祖神一社があり、十月十三日に祭礼があり、神体は神性五躰とある。今では上松崎の是枝柳右衛門碑の横に、塞神として祀られている。人馬の往来が繁く、子供の遊び場所であり、また市などの開かれる野町であったので祀られたものであろう。塞の神は村人の運命を知り、縁を結び、子供と特に親しい神といわれている。

十二、齒の神

皇徳寺寺址の一角に、享保十四己酉七月朔日、泰禪と刻された観音像があるが、すでに首はおれ、腰の線もこわれているが、部落の人々は齒の神といって、齒のいたい時おまいりしている。特別のとなえこともなく、皇徳寺に仕れ

た泰禪という僧侶が、多分自分が齒が悪く困られたので、後世の人を救われるのであろうという、古老もあるが詳かでない。三重野部落の三重觀音も齒の神といわれ、齒が痛いときおまいりすれば、よくなるといわれ、おまいりする人が多い。高さ二米、入口一米、奥行一・五米の岩穴の中に五十糎程の觀音様が浮彫りにされ、全く青ごけの姿であるが、明治のはじめまで一向宗禁制の時、かくれて信仰されて来たものであろう。

十三、いぼの神

白山部落の水流氏の畑の中に小さな石仏が立っている。明和八年（一七七二）六月三日、岩崎六右衛門施人と刻してある。部落の人はいぼの神様といっておまいりしている。「いぼをのねったもんせ、大豆を私の年の数ほど差し上げもんで」誰も見ていない時、ひそかに祈れば、がんこないぼも、ころりとなおるといわれる。

山田下のヒキ村の上野氏の内神も、いぼの神といわれ、わらがこいの中に真石一個がおかれている。「いぼをおつといやったもんせ、塩つけ魚をあげもんで」と祈るといつのまにかいぼはなおるといふ。お札に塩つけ魚を差し上げる。今では上野姓の人で年交代で「かとくどん」をよんで祭りをしている。

坂ノ上の駅の近くにも、いぼの神といわれる石塔が立っているが、大木のため文字が見られない。清泉寺と関係のある墓石らしいが、付近の人はいぼの神といつて祀っている。大豆と錢が若干供えてある。誰かが祈りに来たものであろう。

十四、御伊勢様

天照大神をまつるお伊勢講は、広く分布しどの部落でも盛大になされていたらしいが、今では麓地区と錫山にのこっている。中町の上西部落では講箱と神だながのこっているが、講は続いていない。講箱に天保十二年（一八四一）丑九月二十六日、御伊勢講名数帳、主取、竹下藤右衛門、野間善左衛門と記されて、昭和のはじめまでの記録がのこっている。辺田の郷土と上西付近の農民とでいっしょになって講がなされている。錫山のお伊勢講は「牛を一匹かみ殺す」といわれるほど多くの費用をかけ、料理も碗蓋すまりをた、取肴とり肴な、井物じんがりのもの、吸物すいもの、むしもの、酒ずしと山海の珍味をならべ、一週間前から準備し、谷山の町まで品物の購入に出かけたらしい。祭りのあと宴たけなわになると、伊勢音頭も歌われ、踊りも盛大であった。延宝四年（一六七六）伊勢神社を紋無岳に建立し、それ以後春秋の彼岸に講をしている。

平川のお伊勢講は正、五、九月の十六日、山の神講といっしょに行なわれ、子供組のものであった。大きな厨子ずしがあり大黒様、お伊勢様、山の神の三神の掛絵と絵馬がはいっている。絵馬は明治以後のものであるが、谷山では珍しい。神官によるお伊勢講が南麓にあるが、太神講記録に、明治二十三年十月改、太神講相中

掟

- 一、出銅金錢 拾錢 一、丹物 四ツ
- 一、白米 三合 一、取肴 壹ツ

一、在り合　焼酒　一、吸物　壺通

一、硯蓋　壺面　一、四ツ組飯

右座主毎之担任トス

右之通堅ク可相守事

座興用としてさいころが二個あり、これを盆の上でころばし、その数の合計で、十二支の動物のまねをするなど珍しい行事がのこっている。この外霧島講も農村、麓地区で盛んであったらしいが、北麓では代参の形で今ものこっている。中町の山ノ園部落には官幣大社霧島大神宮とかかれたお守札が五枚まだ大事に保管されている。

十五、稻荷大明神

辺田にのこる稻荷大明神を祀る稻荷講は、郷土の講で、辺田郷中は天保五年（一八三四）の「万覚留帳」によれば旧藩城下士の二男三男から分派したもので、朝鮮征伐の時島津義弘の旗下護衛として、二百五十名選抜され従軍したとになっている。朝鮮の役から帰来した時は丁度大晦日で、正月の供物を準備をなす暇もなく、門松のかわりに椎の葉を立て、また単に松の小枝を立ててすませたといひ、その後辺田では正月に門松、しめ縄を略して、門松を立てないようになつたといわれる。北斗北辰の巻物のある家は、朝鮮役に従軍したといわれ、深瀬家にのこっている。稻荷を尊崇するようになったのは、泗川の戦で士気があがらなかつた時、白狐、赤狐が戦陣に現われ、軍の士気を鼓舞したといふことで、義弘が留守役、新納武蔵平田太郎左衛門に諸寺社に殿名で、稻荷を奉祀するよう命じたからだといわれている。

る。辺田にのこる稲荷大明神に文化十四年（一八一七）丁丑十月吉日、講中と刻されている。明治のはじめの稲荷講の条例の第一条に「本講は稲荷講と称す、旧辺田同胞を称えたる郷中を以て講員とす」とある。毎年二月の吉日に旧辺田郷中の人が集まり宿屋をきめ、祭典の後直会となるが、料理は鶏のサシミ、ナマス、鶏飯の三種ときまっています、いっさいの経費は稲荷講の共有財産（山林）から支出されている。

十六、金峰山神

松崎の野町にのこっている講で、田布施の金峰山神社に代参者を送り、その帰りを慈眼寺まで坂迎えして、その夜宿屋をきめ神社のお礼をわけてもらい、その夜酒盛となる。山岳信仰と商売繁忙を祈念し、さらに親睦と娯楽を加味して発展したもので、今でも盛大である。下松崎にのこる講箱には、文政七年（一八二四）以来、現在までその記録がのこり、戦時中も一回も欠けず続いている。文政十一年（一八二八）金峰山蔵王権現講中の記録によれば、

覚

一、茶喰 壺ツ 一、焼酎 三盃

一、酒 壺盃 一、硯蓋 一ツ

一、吸物 壺ツ 肴式折

右メ 八百文共座元仕切

一、御前鈔拾三文ツツ外二月々拾三文ツツ

右之通相認候

一、花むこニ相成り候節者焼酎百文がの宛相究也

一、金峰山參詣ニ付而者永々四人ツツ今相究其内老人ニ而茂差つかへ有之人者相中ニ相頼候而過分四匄ツツ之筋相究以後相違無之様慥ニ平藏殿、藏右衛門殿云々以下略す

とある。

十七、二十三夜待講

二十三夜待の待は古くからのことばで、そのはじめの意味は「おそばにいる」ということで、神のそばにいても夜をあかすことであつたらしいが、その後二十三夜の月を待つことだといわれるようになったらしい。十千十二支の組み合わせによつてできる六十種の日のうち、特に庚申の日、甲子の日、また忌の日として十九日、二十三日は終夜眠らずに夜ごもりをして、深くつつしみ守らねばならないといわれてきた。月の出を待つ行事は十五夜、十七夜、二十三夜などがあるが、二十三夜待は三夜待とも三夜供養ともよばれて、勢至菩薩をまつるのだといわれている。三夜待にみごもると、片輪の子が生まれるといわれる。一丁田部落には安永三年（一七七四）女相中によつて建立された二十三夜待の供養塔があり、正五九月の二十三夜に宿屋をきめて、男女近隣集まり、小麦団子やほだもちをつくり、二十三個と笹の葉を供え、みんな集まると団子を三個ずつ皿に盛り、煮シメ、焼酎がでて飲食がはじまる。宴たけなわになると、太鼓、三味線ではしゃぎ「二十三夜の月さえまてば、思ひかなわぬことはない」とか「二十三夜待はだが

身のためか、むぞかなじゆんどの身のためよ」などの歌ものこっている。戦前は夫や子の武運を祈る気持ちが強くふくまれていたが、今では遠く他郷に動きに出ている夫や子をしのんでおこなわれている。

第六節 芸能と民謡

谷山で古くから踊りつがれ謡いつがれた郷土芸能、民謡は一般に豊富であるが、谷山独特のものはありません、他郷から移し入れたらしいものが多くみられる。割に多いのが、棒踊りで谷山全地域に広がっている。次に鐘踊りが多い。民謡は多種に及ぶが、作業にともなう歌が案外のこっていない。

一、虚無僧踊

棒踊りの一種で広く県下で見られる。田植踊り、御田踊りなどと言われ、古くは田植前後の豊作祈願の踊りであつたらしいが、その後白山神社の方祭や諸行事に踊られるようになった。豊臣氏滅亡後主家の再興をはかり、有水善右衛門重政という人が農兵をおこそうとして武術を教えたとか、幕末虚無僧に扮した幕府の密使がこの地に来て、無礼な振舞をした農民と赤土坂で争つて、この踊りがおこなつたなどと説かれているが、あまり重視できない。歌は、歌詞が短いが変化に富んだ節回しで威勢がよい。服装は虚無僧は白装束に深編笠、白ばつち、白足袋、わらじ、右手に扇子、左手に尺八、木刀を腰にさす。百姓はかすりの単衣に白鉢巻、たすき、白足袋、わらじ、黒のばつち、六尺棒

(檜) はやしはかすりの単衣に袴、黒の足袋、ぞうり、一組二人で中央虚無僧、左右農民七組、二十一人の青年が入り乱れて打ち合う。中町下四部落大園、福永、平馬場、真方にのこり昭和八年東伏見宮の台覧、昭和十年旧一高女において天覧の光榮に浴し、昭和三十八年県の無形文化財として認定された。

歌詞

- 一、お城が山は前は大川（庭入の唄）
- 一、山げの雲は鷹の羽揃い
- 一、清めの雨はばらりばらりと
- 一、一本苗は米の八石よね
- 一、四つ棟ねの倉をたてて参らず
- 一、霧島松は黄色花咲かす（引庭の唄）

二、棒踊

大河内の妙楽寺に五月十六日、諸所より踊りを興行し、御田踊と号す、棒或は鎌を以て、庭上に舞踏す、見物の貴賤老少群集を成す、と三国名勝図会にある。田植前後の豊作祈願の踊りであつたらしい。島津義弘が朝鮮征伐の凱旋祝いの踊りだと、いわれるがあまり重視できない。清泉寺の島津大和守の墓に、その霊を慰めるために、旧七月十五日下福元の芝野、草野、向原、野頭で棒踊りを奉納している。谷山では棒踊りは広く分布し、五ヶ別府の茂頭では大

正十一年、英国皇太子歓迎のため踊り手三十三名、歌手二十八名で踊っている。山田の大川内、鹿倉、火の河原などで踊られたが、伊作や川辺方面から移ってきたといわれる。服装は縞またはかすりの単衣、白だすき、白鉢巻、手甲にわらじ。六尺棒三人、三尺棒三人でやる六人棒が普通で、部落によって棒のにぎり方がいくらか違っている。歌詞は虚無僧踊りとほとんど同じだが、農耕生活につながりが多い。五ヶ別府茂頭の歌詞に

- 一、今こそまいる神に参詣
- 一、七機立てて八おさの目のかず
- 一、千里の山は砂の目のかず
- 一、小舟をうけて鮎を釣こむ
- 一、山太郎蟹は川の瀬にすむ
- 一、焼野の雉は岡の背にすむ

三、鐘踊

朝鮮征伐の凱旋祝いにはじまったといわれ、毎年鹿児島諏訪神社に奉納することになっていた。藩公の面前で踊られ、一名御庭踊りともいわれた。皇徳寺に奉納されたり、盆踊りとして旧七月十五日には黒丸神社にも奉納した。また稲に病虫害発生ときは虫おくり、虫供養のため踊られ、かんばつの時は雨乞いのため熱狂的に踊り狂った。最も盛んに踊られた時代は、大太鼓十六人、小太鼓四人、鉦四人の二十四名で服装は大太鼓は紺織の野袴、白だすき、

白鉢巻、鳥追笠、わらじ、背中に矢旗をかつぐ。鉦うちは花笠にわらじ

男子だけの踊りで、藩政時代各門の乙名が集まって踊ったという。気合のかかった踊りで山田の皇徳寺、山田下に伝承されている。柿木田、入来でも踊ったが絶えている。背中の矢旗を武士の旗差し物というように解釈しているが、人間以外のもの、他界の霊物（精霊、亡魂）を踊りの激しい興奮の中にまきこんで、村の外に追い払う意味ではないか。虫おくり、疫病おくりにしても、踊りがこれらを鎮送する一種の呪術じゅではなからうか。

「杉馬場あと太鼓でこ、地藏角さき太鼓」と山田下でいわれているが、山田の鐘踊りは鹿児島鹿児島の諏訪神社に奉納してから皇徳寺で踊られたといわれる。

歌詞

ホホー、こうりの身内に参りゃんせホホー

お庭のけいこを見て参りゃんせ

三女松には、つたはわせ

葦毛に栗毛にかもかしげ

なかにもたしたるしんの黒

金覆輪の鞍をして

ひいきでもろう言うことの

お庭のけいこはあら見たと

虫供養の歌

実盛殿はごしよらくめさる
みな虫どもも、ごしよめさる

四、疱瘡踊

天然痘は五十年に二回の周期ではやる病気で、病気がかるいように祈願した女の人だけの手踊りである。本城の愛宕様が疱瘡の神で、谷山郷中の人が疱瘡踊りを奉納した。錫山や山田では疱瘡がはやると「ほそかんじん」といつて青年男女は手ぬぐいで顔をおおい、破れ着物を着て裸足で家々を回り米をもらつて、ご飯をたき、疱瘡神に供え、そのあとみなで食したという。川口に谷山でただ一つ疱瘡踊りがのこっているが、服装は長着物、帯、白足袋、草履、手ぬぐい、右手に扇、御幣をもち、歌も踊りもゆるやかで優雅である。人数は二十数人、はやしは太鼓と三味線。

歌詞

- 一、今年しやヨイヨイ、サーヨイ年
おほそがはやる イヤかるいとかるいとな
- 一、おほそ神さんな、おどいすきでござる
イヤかるいとかるいとな
- 一、おどいおどれば、おほそもかるい

イヤかるいとかるいとな

一、シメもおろさず喪^も払いもいらす

イヤかるいとかるいとな

一、稲の出穂よも、見事にそろた

イヤかるいとかるいとな

一、さやが三尺、下尾^{しげお}が二文

イヤかるいとかるいとな

一、アー伊予で大松の千亀女

アラヨイ アラヨイ ショガエー

一、アー十九や二十で御伊勢まいり

アラヨイ アラヨイ ショガエー

一、アーうれし目出たの若松様よ

アラヨイ アラヨイ ショガエー

一、アー枝も栄える葉も茂る

アラヨイ アラヨイ ショガエー

にかた節

一、さきをからすというたがむりよ

一羽の鳥も二羽鳥と

あおいの花も赤くさす

いよ雪という字もすみでかく

一、舟よ舟よとよなかの頃に

若い女中衆がただ一人

ぜひや情でこの川を

いよ舟になんでもかけはせぬ

一、西はさいふのみださか如来

おがむとすればくもがかい

雲に邪心はなけれども

いよわが身が邪心でおがまれぬ。

五、馬方踊

天然痘がかかるいように祈願のため、馬でお伊勢参りすることを、歌と踊りを加えて劇風に仕組んだもので、歌劇的

な色彩が強い。伊勢神宮への参拝は遠隔の地からはのぞめなかつたので、正、五、九月十六日のお伊勢講に踊られたものらしい。平川の豆打と軸谷に残っているが、軸谷のものは知覧から、豆打のものは川辺のはてから移ってきただものらしい。柏原にも伝承されているが、平川の馬方踊りよりさらに省略されたもので、その一部が現在残っている。川辺町の野崎に疱瘡踊りがあるが、川口の疱瘡踊りと平川の馬方踊りをいっしょにしたもので、これが古い型の踊りで、谷山のものはその部分的な踊りが残ったものであろう。平川の馬方踊りは槍持ち男一、おおろふい女一、はさんばこ男二、奴男一、おさつども女二、だんな女一、お供女二、馬方女二の計十二名で楽器は三味線、太鼓、鼓である。お伊勢様に祈願の途中、馬方と「だんな」の呼びかけがあつたり、歌になつたりして進行される。

馬子（唄）我はもとより馬方なれど、駒の心は勇みあり

旦那 やい馬子、駒かいましょか

馬子 はい駒あげましょか

旦那 この駒の心は何と

馬子 なるほど、なるほど武士の心にござります

旦那 やい馬子

馬方 はいはい

旦那 このちようは何と言うちようぞ

馬子 はいこのちようは歌のちようとも申します。このちようから歌いますれば、あのちようまで響き渡るそーな、

じゅんと面白そうにございます

旦那 やい馬子

馬子 はいはい

旦那 今の言葉は馬子の言葉に相かわらぬ いき面白そうなよ

馬子 いざやりましょ、さあやりましょ

(唄) 神はお伊勢のお祓い箱よ、参ればその日の祈禱となる。はいはい、箱根山中の飼料を食わせ、一足三文の釘を

打ち、何か不足にあるかよ、駒、さあ勇めや駒

馬子 はい、向うに見えしはお伊勢さん

お伊勢参詣なさいませ

旦那 やい馬子

馬子 はいはい

旦那 もうお伊勢に着いたとな、お伊勢参詣いたしましたよう

馬子 旦那さんおるすに小唄の一つもやろうではないか、いざやりましょ、やりましょ、さあ孫兵衛様からやらさん

せ、さあ太兵衛様からやらさんせ、一しよにつれぶしにやいかけましょ

(唄) お庖瘡のぞみにサイサイ願たてて

タテテヤドッコイ 伊勢にや七度熊野にや三度、三度ヤードッコイ

竹に雀は品よくとまる、止めてとまらぬ井戸の水

旦那 やい馬子いそいで駒をよせおれ

馬子 はい心得ました。あーはいはい

旦那様早くお馬に召せ

旦那 駒にのるほどにくつわ頼むぞ

馬子 旦那様の御下向に小唄の一つでもやろうではないか

いざやりましょ、さあやりましょ

(唄) やるわいやるわい 内の旦那さんな 嫁女すき よんべも 三百両はねだした

はだかで道中通れるか

旦那 やい馬子、もうこれからいとまだすぞ

馬子 心得ました。若松様よ、やれ駒、やれ駒

六、楽踊

日露戦争の凱旋祝いや落成式の祝いに踊ったといわれるが、恐らく雨乞いや虫供養に踊ったものではなからうか。歌はなく楽器に合わせて踊ったもので、坂上に伝承されている。男女幼少合同の踊りで、先踊り手に十一、二才の女子四、五名、拍子木、男子青年四名、太鼓、四ツ一組、二人持ちで男子青年四名でたたく、鼓、男四名、鉦(大小)二

個二名三味線、女子四、五名、服装は先踊りの女子扇二本、長着物、ぞうり、男子ははつぴに白鉢巻、脚絆、わらじ、歌はないが楽器に合わせて調子よく踊る。他地方に見られない珍しい踊りである。

七、恵美須大黒踊

島津久光公が、藩内を巡視された時、谷山では御仮屋で歓迎祝宴をあげ、松崎や海岸の人たち五十六名で踊った。黒木弥千代氏の祖父弥兵衛は当時七才であったが、この一団に加わって踊ったという。弥兵衛は九十四才の長命であったが八十八の米寿の祝いには、恵美踊と大黒踊りを元氣よく踊ったとのことである。

恵美須踊りの歌詞

恵美須、恵美須今年の恵美須は若恵美須

釣竿かたげて舟に乗せ、ずんどうずんどう

沖には鯖釣竿で鯉釣った

ぴんこ しゃんこはねたや面白や

釣ったはおえびす 掛ったは大黒天

西宮のえびす三郎どんのお生れ月日をいつかと問えば、福徳元年正月三日その卯の刻に安す安すと御誕生召され
雍田あつたが口より御湯を出し、ぬる田が口より水を出し、かくて産湯をかければ、綾あやが四反、錦にしきが四反、京の巻物、
白綾、袖、縫い立て張り立て着せければ恵美須の数が一万千四百四十と四休、魚釣うまった釣った網かずもらさず

舟のかずかず（ここで五十六名出揃う）

さても目出度くお祝い申せば、惠美須三郎どんは釣竿かたげて、烏帽子、狩衣、しゃんと着て、神酒によつてよろ、よろ、足もとよろよろ、よろよろと舟漕いで、釣を垂るればあら面白や、引くよ引くよ、この引くは引かせて引きもどし、ずしと引き上げ見てやれば、大鯛びんこ、びんこ、さても目出鯛やお目出鯛や。

大黒踊の歌詞

大黒殿はなあ 宝の袋を肩に掛け

ねずみも ちゅんちゅんだきついで

袋の中はこうそこうそ

打出の小筒に鈴の音

あらしゃんこえ、しゃんこえ

（詞）

六つ無病息災に七つ何事ないように

八つ屋敷を買い求め九つ小蔵を建つるえ

いやとちんちん

釣竿に水繩張りてえいとえいと

家も建つれば番屋も建つ

御用じゃ御用じゃ、うそじゃござらぬ

こちからとちちん、そちからとちちん

堂島の市も建つるえ

君の御代こそ目出鯛けれ

八、剣舞

一名、武士踊と呼ばれ、忠臣蔵、曾我兄弟、牛若丸、熊谷直実の合戦等みな武士をしのんで踊られたもので、菓師堂の八田森右エ門によつて創められたといわれ、婦人の踊りである。忠臣蔵の踊りは踊り手四十七名、歌い手八名、三味線、太鼓、大太鼓、柏子木、鉦、つづみに合わせ雄壮に踊る。

忠臣蔵の歌詞

頃は元禄十四年しかも師走の十四日

まんじ巴に降る雪は 大石親子を頭とし 人数僅かに四十七人 山形すじの陣羽織

日頃の頭巾で身をまとい そこよここよとしのび行く、しのびよるは炭部屋に

吉良の屋敷と裏表、なんなく破る鉄の門

ひびく山川陣太鼓

「ヤーヤー 我こそは赤穂の浪士

大石良雄以下四十七人

なきし主君の仇をはらさんがため

吉良の屋敷にはせさんぜり

我と思わん友がらは

じんじように勝負じや

九、そばきい踊

谷山のそばきい踊りは、古くから伝えられていたといわれるが、久しい間絶えていたのを、この踊りと歌を覚えていた東馬場の是枝タミさんから聞いて、最近復活されたもので、新地、磯辺の部落に伝承されている。大隅地方から移っ

て来たものではないかとの説がある。そば粉をあわせて、そばができ上るまでの様子を踊りにしこんだもので、大変ユーモラスで楽しい踊り、三味線一人、踊り(娘) 噺(母)の三名からなっている。

母 谷山新町に新そば屋ができた。新そば好きなら、ちよと待つておくれ、サツサ、これから娘のケサガメ挽き方段ちや

母 娘のケサガメよくひかんかひかんか

娘 サツサ かかさん挽き方すんだ



母 ひき方すんだらふ篩り方段じや

母 娘のケサガメ 品よくふらんかふらんか

娘 サツサ かかさんふり方すんだ

母 ふり方すんだら、こいからわあせ方ん段ぢや

母 娘ケサガメ 品よく あわせんか あわせんか

娘 エツサ かかさん 合わせ方すんだ

母 娘ケサガメ 品よく おさんか おさんか

娘 エツサ かかさん 押し方すんだ

母 おし方すんだら 切り方段ぢや

母 太かかど庖丁で こまかく切らんか切らんか

娘 サツサ かかさん 切り方すんだ

母 切り方すんだら お釜の用意ぢや

娘 煙とうてならぬ、コリヤ 火起こしが ひつつまっちゃ おいめかい

エツサ かかさん お湯もたぎった

母 お湯がたぎったら バラバラ いでんか いでんか

娘 エツサ かかさん おそばもできた

母 おそばができたら したじの用意じゃ

娘 エッサ かかさん したじもできた

母 したじができたら 吸うてみやんせ みやんせ

娘 うまさが たまらん たまらん たまらん谷山の味はひとしお うまい

母 おそばができたら お客にちよいと出せ

娘 「お客さま お待どうさまでした」

はんやぶしを踊る。

民謡

一、船方節

高須出す出す山川岬

帆道具仕組うて竹山神社に

走りまわるは御開聞、花の塩屋をあとに見て、

籠の立神夜に通る、ほのぼの夜明は野間沖

沖をはるかにながむれば、硫黄高島屋久永良部

潮はさげ潮きたの風、甌島には潮かかる

潮時つくりて帆を巻いて、川内あらしを帆にうけて

牛深港に走りこむ、牛深港は情みなと

二本の碇を突きおとし、伝馬船おろしてろをすえて

長いともづな岡にとる、一を置いてぞ荷をあげて 三で船頭さんを引きあげる。

谷山の船は天草などに行った帰りには、風向きの都合ではまず鹿屋の高須に寄港し、夜の返し風をまつて谷山に來たものであろう。現在あまり歌われない。

(註南日本民謡歌曲集)

二、勢子の歌

かか かんばちん ちが落^あえた

まめが落^あえた うたつた うたつた

千鳥 千鳥 はしれ はしれ

谷山の遠浅の海岸で、潮が引いた後 えさをあさる千鳥をとる時の子供の歌である。

三、機織歌(おいや節)

一、おやおや

出来たひらけた真^ま方^{がた}河^か原^{はら}え

つむぎ工場ができました

出来たる工場はにくわねど

明りや電気はにくごさる じゃが

一、おやおや

一度は現役二度は予備

三度は後備に呼び出され

今は満州雪の中

思えば涙が先にたつ じゃが

一、私ばかりに思わせて

主さんは柳の春の風

何処ふくかは知らねども

見すてはせぬかと気にかかる じゃが

今でも歌われているが、「おいや節」ともよばれ、以前は田の草取りの時も歌われた。中町に残っている。

四、伊勢音頭

一、伊勢にあ七度 熊野にあ三度 ハヨイヨイ

愛宕さんには月参る

ササヤットコ セイノヨイヤナ ハア

アレワイナ コレワイナ ソノナンデモセー

一、伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ ハヨイヨイ

尾張名古屋は城でもつ

以下前同

一、傘を忘れたつるが屋の茶屋で

空がくもれば思い出す

以下前同

一、笠を手にもち皆さまさらば

ながのお世話になりました。

以下前同

一、傘を三本もつて雨傘日傘

一本は主さんと忍び傘

以下前同

今では谷山一円で祝い事の時歌われているが、お伊勢講の時歌われたものである。

五、はんや節

一、はんやはんやで、今朝出した船は

どこの港に着いたやら いま来た二才どんよか二才どん 相談かけたらはつちこそな二才どん

谷山下町通れば、蛸がだつつく

お塩がだつつく、こげなこちゆは めったにござらぬ
めったにござれば、体がつづかん

一、はんやはんやで、半年やくれた 後の半年や寝てくらす

以下前同

一、鹿児島名物荷物にやならぬ 聞いてお帰りハンヤ節

以下前同

六、今度このせつ

一、今度このせつ桜島ついたネ

密柑やくぬぎ申がすにはわ

わしほど因果な者はない

内を出る時はばらの中

頭の上へのせられて

船の底に積みこまれ

えつさえつえと漕ぎ出され

行く先きや何処かと問うたれば

鹿兒島岸にあおろされて

店さき出されちや身のつらさ

二つや三つの子供から

一文二文に買いとられ

皮をむかれちや丸裸

のどの小すじを通る時きや

うまさにながさの味がする

一、こんどこの節東京町についたネ

東京町のあの傘屋一人もちたる花娘

むこは取りたしむこはなし

むこを定めてやる時は

たんすや長持十二さお

長崎かむじは十二まげ

そいから先の小道具は限りなし

これほど仕込んだ花娘

二度と帰るなわが里に

父さん母さん待ちなされ
親に意見じゃないけれど
西の暗いのは風じゃねや
東の暗いのは雨じゃねや
千石万石つんだ船も
向かうの嵐が強ければ
この港にはしりこむ
私の体もそのごとく

一、こんどこの節五反島についたネ

五反かと思ったら六反で

六反島のまん中で

十七、八のねえさんが

白い前かけ前にか

赤いたすきを十字がけ

白い手拭ほかむり

桑てごかかえて桑をつむ

あの子はよい子じや

背丈があつたら我が妻に

のぼいくだいの旦那様

こまい者とあなごるな

こまい竹にも節がある

小さい伝馬船も潮こぐ

こまい鉄金のまならん

乗っちゃみやんせ通しやせぬ

連れて行きやはんかあなたの妻に

七 どんじ節 (どつつし)

一、家を建てるときや地つきがもとよ

地つきしまらんにやこの家建たぬ

一、もうよかろや、おいとましましよ

酒も肴もみんないただいた

八 手まり歌

爺さん婆さん長う生きやす

米も安すなろ世も良かる

弁天芝居もまたござろ

爺さん婆さん長う生きやす

(寺下部落ではこの次に、次の歌を入れる)

ここもはやる長崎はやる

長崎よめじよはとんこつよめじよ

正月のわらべ歌、手まり唄で広く歌われた。ひと昔まえの世相が、うかがわれてしんみりなる歌である。

九 谷山名物の歌

花の谷山その名物は

小蛸そばきり他にもござる

餅は吉野屋じゃんぼ餅

黄金の滴は千代の友

それから和田には鯖節鯉節

七ツ島障子川には海苔小海苔

味と香りの品の良さ その品の良さ

あがらんせ みな あがらんせ

十 まりつき歌

だいじのだいじのおてまり様は

粟のふくさか米のふくさか

つつみ合わせてだーれ様

だれ様に渡しましょうか

花の夏子さんに渡しましょう

ハイ ハイ

たしかにたしかに受け取りましたが

誰に渡そうか花の秋子さんに渡しましょう（以下繰返す）

十一 苗取り歌（田植歌）

一、たまじや植えつけ苗ずやとつたが

後の刈上げは誰がすいか

一、今日は日もよか彼岸の中日

お嶽めいして様にあう

この歌は田植歌としても歌われたらしく、山田方面に残っている。

十二 草刈歌

お正月はじめて二月は彼岸

三月三日はひなじよなり

四月八日はおしよかの縁日

五月五日はまきどんまく

六月十五日は祇園どんの節よ

七月七日は七夕の節よ コラコラッ

八月十五日は十五夜様綱どん引く

九月九日は谷山の豊祭よ

十月は亥の日で霜月きや神まつい

十三 そば作りの歌

世の中でめずらしい花はおそまの花よ

花が咲いて実がなる、角がたつかど

ごろいと回せば粉にもなる

ひたじをかけると そばとなる

十四 はらめ打ちの歌

はらめ はらめ はらめんもとは

嫁女をくいやいや 壁をくいやいや

出っしやい 出っしやい

はらめ はらめ 棒つき棒がねえー

ごんべどんのお方でみそつき めーろ めーろ

はらめ はらめ はらめんもとは

去年の旦那どんのみそつき みそつき

嫁女を出ししやい 出ししやい

十五、十五夜綱歌

綱つなは サーヨン アーヨン サーヨンヨイ

今年の十五夜ん綱びろかどけ三十三尋半

揃あうた揃あたよ引き子が揃あうた

稚子ちごは鉢巻おしよき乙女おしよはたすき

月は出た出た東の空に

十五夜お月様今出やった

臼に箕みをのせお餅をそえて
月にあげましよ柿栗すすき
今年は豊年穂に穂が咲いて
黄金波打つ稔りの秋よ
秋の七草野に咲き乱れ
月の光りにチンチロリンがおらぶ
まぎれまぎれよ一本松まぎれ
見えた見えたよ飴屋が見えた
蛭子塞神さんにお願をかけて
今夜の綱引きや柳右衛門りゆえもんさんに見せろ
沖の丸木船い乗つしやらんとな
魚もとれもした港は祭り
新地の子供は仲よし子よし
色は黒いがうろこで白い
声が出もはんでおくすりたもれ
今年のおせんしは情が厚い

月の七ツ島 流しの夜船

飲めや歌えやお月さんも踊れ。

十六、二十三夜待講の歌

二十三夜待はだが身のためか むぞかなじゅんどんの身のためよ 二十三夜の月さえまてば 思いかなわぬことはない

十七、谷山音頭

一、朝は海から 港にあげて

若い船頭さん 掛声高く

船は大漁 勢よくかえる

躍る銀鱗ヤレ 賑やかに

谷山よいとこ 来て見やれ

ソレ来て見やれ

二、名所慈眼寺 お稲荷さんよ

春は桜に 紅葉の秋に

みんな揃って 歌って踊る

山の公園ヤレ 賑やかに

谷山よいとこ 来て見やれ

ソレ来て見やれ

三、 枇杷の平川 中川密柑

錫は錫山 窯なら長太郎

汗に生みなす 名物ばかり

挙げて数々ヤレ賑やかに

谷山よいとこ 来て見やれ

ソレ来て見やれ

四、 緑の草に ミルクの泉

谷山おごじよの情に育つ

牛もまるまる 五穀も栄え

豊年祭りもヤレ賑やかに

谷山よいとこ 来て見やれ

ソレ来て見やれ

○ 唱え言葉その他

○朝来客があれば、その日は三人来客がある

- 朝女客があれば、その日は来客が多い
- 婚礼の日定めは、戌の日がよい 酉の日はよくない
- いんもれは、ゆるいのわらでさすとよい 雀どんの母さんが水くみに行ったら、タンゴの底がつつぽげたといって眼をこすつたらよい
- いぼをなおすには、いぼたの木に早くなおれといって、わらをしほればよい
- 洗濯したら、たたむまねをして着れ
- めらん神の罰はかぶらん
- はらい清めは、塩と酒
- 神木を切るときは、斧の九の目がついたものを持って、一夜神木に立てておき、翌日そのおのが倒れていたら切つてよい
- 彼岸の頃ころてん虫が畑に出れば台風はこない
- おにしばの葉が一つ節があれば、台風は一回来る。二節あれば二回来る
- たいは金物をもつてまつればなおる
- くさは息をふきかけてまつればなおる
- 朝茶ばしらが立つとその日は縁起がよい
- 朝こぶと夜むかでは縁起がよい

- くしゃみをする人と人が噂をする
- 魂はつけどつ、とんこつちやさげどつ
- 出はないりはな
- 朝鳥などを殺して血を見ると、その日はケガをする
- 丸い卵も切りよじや四角
- 果樹の実を一つだけ、のこしておくと翌年の実のりがよい
- 柿の木から落ちて、怪我すると直らない
- 半夏はんげし至に魚取りに行くと、よくつれる
- 友引に田植えをすると、葬式の米になる
- 雨ぎゆい、日なすび
- から竹の弓はい
- 梅田びわ麦
- びわの実がひらいた時は、前ながしが近い
- みうえをする時は、栗の花が咲く時がよい
- なしのなつた年は風が吹く
- 雷がなつた時は、桑の木にねれ

○木六竹八

○みち潮の火事は運がよい、不幸中の幸い

○夜烏が海の方へ行ったら晴れ、山に行ったら雨になる

○月に雨傘なし

○雨瓜、日西瓜

○彼岸だんごくうて油断すんな

○朝雷には隣にも行くな

○三日苗は馬鹿も植えぬ

○禁忌

○地火の日には鍬をかためるな

○地火の日に植えた苗は、葬式の米になる

○友引の葬式はまた人が死ぬ

○のみの頭を打ち合わせるな

○正月十一日は山に行くな

○洗い髪で山に行くな

○師走の餅つきは奇数の日にはつくな

- 盆十五日は小豆畑に行くな
- 旅立は月の七日は忌、八日はよい
- 夕方下駄、草履をおろすな
- 麻がらは火にもやすな
- ブドー、イチジクは屋敷内に植えるな
- 梨の木は建築材に用いるな
- 梅干の種子を拾ったり、柿の種を火の中になげるな
- 柿の木を切るな、柿の木をイロリにくべるな
- 夜つめを切るな
- 半夏生に鋤をかたくな、葬式の米になる

第七節 遊 戯

谷山で行なわれる子供の遊戯で特別他地方と異なるものは、ほとんど見受けられない。子供の遊戯のうち古くから伝えられているものの大部分は、おとなの行事のまね事であり、遊戯の起源は宗教的な神事に発したものが多く、神を祭る儀礼が一方には演劇として芸能化し、一方では、子供の遊戯は男の子と女の子とはっきり区別されるものと、

男女一緒に行なう遊戯の三つに分けられ、さらにその遊戯の行なわれる場所によって、室内遊びと外遊びと分けられる。年中行事としての遊戯があるが、これは年中行事で述べた通りである。

1、室内遊戯

イ、女の子の遊び

ままごと、お客遊び、人形遊び、ちよろじよ（お手玉）などなど、きつにんぎよ（おはじき）、竹かえし、花輪作り、せつせつせ、

ちよろじよはお手玉のことで、女の子はだれでもはぎれを集めているもので、あずきや小石を中に入れて、お手玉を作るのが望菜みで、「ひとふたちよろじよ、こんどでとうお」と数取り、座敷では「ひーる、ひる……」などさまざまな遊び方がある。魔よけのやつでの実は自然のお手玉である。などなどは「若いときは白髪で年とって黒くなるものなあに」毛筆、「立てば低くなり座れば高くなるものなあに」天井、「一目小僧足一本なあに」縫針——のよう
に問い、そして答えたものだ。ちよつと重々しいものに「天にからかき、地にはおひげなあに」里いも——、ばかげているようで、美しくたのしいものである。きんにんぎよ（おはじき）小石、貝がら、しんこ細工（きんにんぎよ）ガラス細工（ビズロ）などはじいたりして遊ぶ。「はじき」は玉を座敷にまきちらし、二玉の間を指先で仕切ったあと、一方の玉をはじいて他方にあてる。「きいご」は、たなごころのお手玉をちよつとはねあげて甲にうけ、はね上げて全部をつかむ遊びである。竹かえしは、長さ十糎ぐらいの皮つきの竹札を十二本ぐらい使う。片手の手の甲にのせ、全部を皮か身にそろえて床の上におく。必ず片手だけで、ずらしたり、かえしたり、はねたりくふうする。同じ要領

で、字や模様などを作るすすんだ遊び方もある。花輪づくりは、椿の花で花輪をつくる。朝顔の花、くちなしの花、れんげ草などよい花輪になり首にかけて遊ぶ。じゅうだまは糸に通してじゅうずをつくり首にかけて遊ぶ。せつせつせは、二人向い合せて右手と相手の左手を合せこれを交互に歌に合わせて遊ぶ。その他男の子の遊びと同じくかるた取り、すごろく遊び、じゃんけん遊びなどがある。

口、男の子の遊び

きこんはじつ、すねおし、かななれごろごろ、ふて押し、なぞなぞ腕ずもう、座りずもう、きこんはじつは、兩人が片手の人差指と親指をまるめて出し、きき指の力で相手の指をはじく。痛さににげた方が負けとなる。一ばん痛いののはつめの根元で、ここをねらう。何よりも頑張りが第一だからこの名前がつけられた。幼いときから遊びのはしげしにも、辛抱強く育てられた。すねおしは片ひざをたててすねをあわせ、片足は相手の足をささえてすべりを止める。「はじめ」でたがいにすねを押し合う。たたみに押しつけければ勝ち。押し合ううちすねが痛くなるが、それをこらえて頑張り合う。力くらべというよりがまんくらべである。かななれごろごろは落雷のだーんで勝負が始まる。うつぶした鬼を真中に、まるくすわる。鬼がかななれごろごろとなえはじめると、一同はきめた宝を後ろ手から後ろ手に手わたす。だーんの落雷と同時に、一同は手を後ろにくんですましている。鬼はだれの手にも宝があるかをあてる。ふて押しはひたいをおしつけて押合う「ひたい押し」顔をつき合せ、りきむ顔の変化がおもしろい。にらめっこ遊びのようである。遊びの進行につれ、なかまの気持ちによって競走、笑い、リズムの内容が変わってゆく子どもの遊び、やはり頑張りあう遊びである。その外最近になると将棋、碁の外各種の遊びがあるがこれは省略する。

2、戸外遊戯

戸外遊戯には軒遊び、辻遊び、野遊び、山遊び、浜遊び等があるが、軒遊びは親の注意から離せぬ、子供や女の子の遊びが多い。現在の学校などの遊びは辻遊びの類が発達したものである。辻遊びをする年ごろになると、正義とか平等とか社会人としての必要な觀念が、遊戯をたのしむうちにだんだんと養われて行くのである。男子はさらに遠く家を離れて、野遊びや山遊びと進んでくる。

イ 男の子の遊び

こま回し、念打ち、はまなげ、凧たこあげ、ぎつちよ、だいたい打ち、かくれんぼ、すもう、陣取、降参言わせ、馬のい、馬けい、やまこっのけんか、かんけい、ゆっさんご、大将たおし、たかてつぽ、しば笛吹つ、さいぶろつづけ、かつた、めだま、ごむじゅう、ねれうつ。

こままわしは、古くからの遊びで、かしの実、どんぐり、べの貝がら、穴あき錢などを利用したものから、ひもをつけたむちで打つてまわすでこま(台こま)、竹筒で作られたひっこま(引きこま)は、初市のもので、うおーん、うおーんと鳴りひびいて風物詩をなしていた。

念打ちは近ごろは金釘で、相手の立てたのを倒す遊びであるが、以前は九月九日の節供の日の子供の遊びであったらしい。ねん木で根木、根抗と書き、つえの先を切つてただ土の中にさしこむ点が根と呼ぶのにふさわしいわけでもとはこの根木は鉤のついた木の枝で、これは鉤引きから来たものであろう。鉤のさきを尖らしたものを田の土などの中に打ちこんで、相手の立てたのを倒す遊びであった。ねんは念で、念打ちはめいめいの選手が勝つことを心の中で念ずることからきたのではなからうか。ねんうつはもともと鉤引きの神事から起こつたものと思われる。春のはじめ、

神を山から里へお迎えする作法として鉤引きという神事をしたが、木の枝の力を認めていたものである。ひき合う遊び、におおはこの茎を折り曲げて引っかけ引っぱる。すみれの花の馬の首のような部分を交叉して引き合うのや、松葉を引き合う遊びなど、鉤引きの神事からきたものであろう。はまなげは正月の遊びで、直径十糎ぐらいの木の輪ではまをつくり、これを棒でころがしたり打って遊ぶ。境の線をかいて両方にわかれ、交互にはまをころがして棒で打ち合うのと、両組にわかれてはまを扱ころがし、相手のゴールを突破させる。うけ止めきれず、はまが陣をころがりぬけると負けになる。投げたり、打ち返したはまが、どこに飛んでくるかわからないので、なかなか危険な遊びだが、それだけに男の子の血を湧かせたのである。はまなげの古いやり方は、はまをはまうち棒で横からさし倒すものであったらしい。したがって棒は打ち返すためではないのでまっすぐなものを用いられ、はまを的にして、それをねらって突き刺すという形がはまなげの古い形で、それが遊びに変化をもとめてホッケー化したものであるらしい。古いはまなげ、だいたい打ちなどは正月に丸いものを射あてる年占いであって、その年の作物の出来がよいかどうか、その年の運勢がよいかどうかを丸いものを射って占ったともいう。うまく当たれば豊作うたがいなしというわけで、その的を神にそなえて、この通り占いは豊作とでましたと証拠的を見せたわけであろう。はまなげも神事から生まれたわけではないだろうか。

たこあげ、竹を細くけずって、方形や菱形などに組み、それに白い紙をはって両脇に細い紙片で手足をつけ、木綿糸やおばあさんがよった麻糸を使ってあげた。習字の紙をはって手のあがりやを祈ったりした。時には糸と糸とをすり合わせて相手のたこの糸を切ったりした。

ぎつちよ（木切れ）長さ一五センチくらい頭部を斜めに切り、地面にすえて頭部をたたくとぴよんとはねあがる、それをむち（木の短い棒）を持つて線上にうづくまり、はねあがった瞬間一げきして前方に打つ。線上からぎつちよにむちを投げ当て、命中したら線からぎつちよまでの距離をむちではかり、その数の多いのが勝ちとなる。寒い正月のころの戸外の遊びである。ゆっさんこはぶらんこのこと。

降参いわせ、二組にわかれて、素手できつ組みあいをする。急所は禁じられているが、取つて投げ飛ばしたり、押さえつけたり、打ちひねるなど、できるだけ苦しい痛がらせる。苦痛にたえかねて、降参といつたり、泣きだしたものが負けである。生きずがなまいつもたえないのが普通であつた。

大将たおし、両組にわかれ、大将、守備、攻撃をきめる。「はじめ」の合図で、ときの声をあげ、敵陣に突入して大将をねじ伏せにかかる。あちこちに一騎打ちや乱闘がおこり、負傷者が出たり、とくに大将は大ケガをすることもあつた。大将を棒で代用して「棒倒し」といわれるようになった。

うまけいは馬けりで、じゃんけんではじめ負けた人が馬になり、次の人が柱（親）になる。馬は目をつぶつて親の胸にだきつき、背に騎士を迎える姿勢をとる。遊びがはじまると馬は呼吸をはかつて脚をはね、とびのる人をける。けられたらその人が馬になり、馬は親、親は騎士とかわつて遊びがつづけられる。馬けいのほか馬のい、だんまなど馬の遊びは多い。

やまこつのけんか、やまこつはじよろうぐものことで、一本のはしのような棒の上で戦わせる遊びで、三、四月ごろから、生いげがきややぶなどに、このくもをさがし歩き、飼育したり、けんかさせたりした。加治木町ではいまでも年

中行事としてつたえられている。

すもう、盆のばんから十五夜まで毎晩とつたもので盆すもう、十五夜すもうとよばれた。たかてつぽ（竹鉄砲）口中でかみわた固め紙を先端につめ、次のを押しやると、中間の空気が圧さくされ、前のたまが勢いよくとびだす。当るとかなりいたい。ときには木の実を使うこともある。戦争ごつこの重要武器、自製のたのしみ、夏の水鉄砲と同じものだが、いろいろくふうされた精巧なものもある。

しば笛吹つ、一枚の葉をくちびるにふくのがしば笛で、ちご歌や詩吟などの楽器となる。よしの葉をさいたものや竹のさきの舌をつけたものは、「ひひ」とよばれた。

さいぶろつづけ、生けがきや庭木に、いすの木が使われるが、葉の根元にこぶができる。これをさいぶろという。さいぶろを指でつかんで二人がむき合い、さいぶろをおし合う、相手のさいぶろをつぶした方が勝ちである。おおばこの穂ぐきや、すみれの花くびは、かけ合せて引きあうが古い呪術や信仰のなごりであるといわれる。

ねれうつ、正月の海岸部落の遊びで、長さ六十センチの丸太を潮の引いた砂浜に打ち込み、この丸太の上に一銭銅貨をのせ、これを長さ約三メートルくらいの船の帆柱をもつて来て、片手でなうように持ち、一定の所に線を引き、走つて来て、丸太をねらいうちする。長さ十センチくらいの竹を切り、上下を御幣切りにして各人一本ずつ持ち、味方が一銭銅貨を落としたら、相手側にその竹の男切、女切のいずれかをあてさせ、もしあたらなかったら相手方はその竹をとられてしまう。この竹の棒は、くじ棒でやはり占い棒であろう。その年の運勢を占つたもので、今から三十年前まで東塩屋部落で盛んに行なわれていた。また砂糖きびうっこんと呼ばれる遊びもあり、砂糖きびに一銭銅貨を

打ちこむ遊びで、一わ二銭、長さ三十センチくらい、これを各人もちより一わずつばらして、順番に打ちこみ、あたれば相手が取ってしまう。やはり海岸地帯の遊びである。

この外山遊び、川遊び、魚取り、はしいぐら、棹とび等男の子の遊びは一般に勇壯で、元氣のあるものが多い。最近の遊びは省略する。

口、女の子の遊び

男の子の遊びに対して女の子の遊びはおとなしく、歌に合わせて数人で遊ぶのが多い。かごめかごめ、ひらいたひらいた、とうりやんせ、はないちもんめなどがある。

はねつき、荒作りに、素朴な絵をかいた羽子板で「ひとよにふたよ、みしよにまよいに、いうさしむさし……」と数よみの声、追い羽根の音、正月の遊びで、神功皇后が、よろいのわきの下に羽子板をつないで召されたとの伝説がある。滝ノ下部落で作って売られたものだといわれるが、滝ノ下の人たちは遠く伊作の野首までその材料を求めに行った。今では飾り羽子板にかわり、女の子の誕生祝いに贈っている。

まりつき、今では遊び方に技巧が加わって複雑なものになり、歌もいろいろ変わったものがきかれるが、ほとんど大小とも色彩のごむまりだが、以前のは「くけまり」といってひかげのかずらや干草柄をかたくしめ、上等な海綿でしんをつくって綿でつつみ、木綿でまいて作りあげた。母や姉のししゅうで飾った情愛のこもったものであった。

いしけい、色々な方法が考え出されているが、学校にたとえて一年から順次に作ったわくに、小石の玉を正しく投げ入れた。玉の入ったわくまで片足でとんで行き、玉をけりながら帰ってくる。足も玉も線の上ののってはいけない。

失敗せぬかぎり一教ずつ進めてつづける。全部終わると卒業である。円形を並べてかくこともある。その他ゴム飛び、縄飛び、おしくらまんじゅう、手うち、近ごろのものでくろんぼ、ひまわり、けんば、鬼ごっこなど辻遊びから発達したものが多い。

第八節 伝説と民話

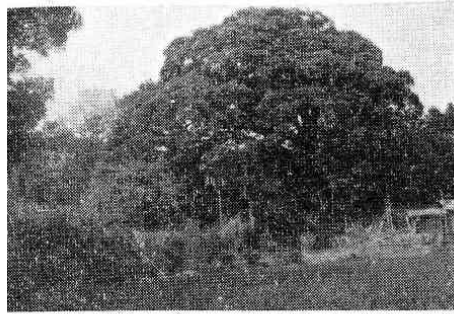
一般に薩摩半島には、伝説や民話は少ないといわれているが、谷山にはわりに多く残されている。神社仏閣の縁起にまつわる伝説、民話の外、木、石、塚、水、山などそれぞれの伝説がある。古老たちの伝承者を調べて見ると、案外多い。しかしこれらもだんだん忘れかけられている。谷山は海岸、市街地、農村、麓地区とそれぞれの住民の生活の中で、古くから語り伝えられたものが多く、いつまでものこしたいものである。

一、伝説

1 木の伝説

イ、笠松 下福元町の笠松部落には、根回り五米ほどの大きな笠をひろげたような松の木があり、台風で倒れるまで、この部落の信仰の中心であったといわれ、松の根元には五輪塔が建てられ六月燈もおこなわれていたらしく、この笠松の名から笠松部落とよぶようになったといわれている。

ロ、笠木 五ヶ別府町笠木部落の鬼塚家は、もともと「仮屋の鬼塚どん」とよばれ、以前島津氏の仮屋の跡であるら

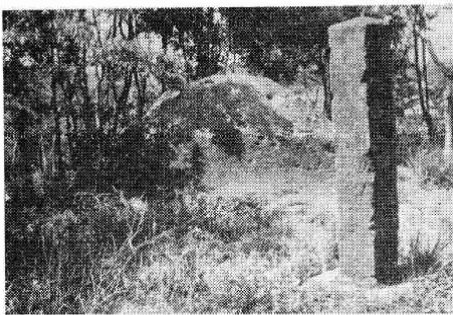


しい。近くに馬乗り馬場の名も今にのこっている。その仮屋跡に大きな笠をひろげたような椎の木があり、その根元には享保二年作の山の神が安置されている。この笠のような木の名から笠木部落とよぶようになったといわれたといわれる。

2 石の伝説

木イ、饅頭石 まんじょういし 上伊集院駅東方千米のところ、鹿児島本線のトンネルの真上の松林の中に、石の大きさ周囲約十二米、高さ約一、五米、石の上部に円形のくぼみがあり、その直径は二十糎くらいあり、水をたたえてつぎることがないと昔から伝えられている。

石の形が饅頭形をしているので饅頭石とよばれている。島津貴久が出水の城立島津実久の反乱にあい鹿児島を出て、犬迫、小野を経てこの饅頭石に腰をおろし、休息した所だといわれ、くぼみの水で鬢びんのほつれをなおした所だともいわれている。今は谷山市にはいり、以前上伊集院駅もこの石の名をとって饅頭石駅と呼ばれ、珍しい駅名で知られていたが、昭和二十五年現在の駅名に改名した。



饅頭石

口、鬢石 伊作街道平治から東方約二軒の所にあり、東に錦江湾、西に遠く東支那海を望む吹上町との境にある。高さ二米、周囲九米ほどの大石で、その上部に周周一、三米、深さ二十五糎ほどのくぼみがある。この水はかれたことがないといわれている。大永七年（一五二七）島津貴久が出水の城主島津実久の反乱にあり、饅頭石、春山、柳ヶ谷を経て田布施にのがれる途中ここで休息し、鬢のほつれをなおした石だといわれ、この石をお鬢石とよぶようになったといわれる。この鬢石の横には山の神が祀られ、彼岸の中日に参拝しているが、「今生まいり」とよんでいる。

八、舟石 山田町の谷部落に、もと谷山地頭赤松どんの屋敷とよばれる森の横に、舟の形をした八畳敷くらい大きな岩石がある。石の横に石祠があり、竜の彫刻のある献燈一基もあり、年一回しべを取りかえて祭りを行っているが、ここは昔から恐ろしい所だと村人からおそれられ、子供たちに近よるなどいましめられている。この大きな舟石のあるところから、小字名も舟石とよばれるようになったといわれる。



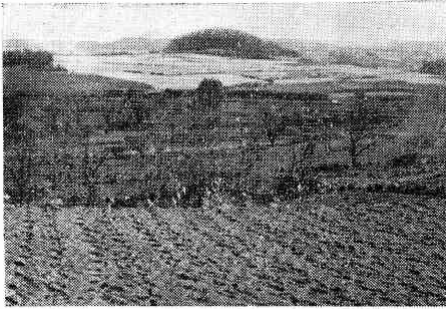
石壇 供養 碑

二、石壇供養碑 山田町立迫部落にあり、碑面に文化四年丁卯年隄元万助とある。この地一帯は藩政時代郷士の住んだところであるが、土地が非常に湿土でぬかっていたので、それをふせぐため多量の石壇を使用したので、その石の供養のために碑をたてたといわれている。今でも所々その石壇を見受けることができる。

3 塚の伝説

イ、白馬の塚

上西部落の桃園の中に、一坪くらいの高い場所があり、その中央に小さな真石が一つのせられていたが、これは伊集院幸侃の子小伝次の乗っていた白馬の塚だといわれている。当時阿多にいた小伝次が島津家久に呼び出され、旧伊作街道を経て滝下に出る途次、小伝次のまたがる白馬が坂の途中で止まって動かなかった。白馬は既に伏兵のあることを知って主人に知らせたのであるが、この白馬をたたき切ってしまった。その血が土を赤く染めたので、この付近を赤土坂とよぶようになったといわれる。またこの白馬の遺骸をこの地にうめ、供養したので、白馬の塚で、今では滝下付近では白いものは育たないといわれている。



山 かのちけ

ロ、けのちか山

鹿児島経済大学の校庭横に、こんもり茂った松林の丘があるが、こ

の丘を「けのちか」山とよんでいる。古老の話によれば、清泉寺にまつわる丘で、丘の上には高さ一、三米の山川石の宝塔がたてられ、この塔の中に経文がいけられていると伝えられている。そこで経塚とかき「けのちか山」と呼ばれている。

また、昔からなえ（地震）の時は「きのちか、きのちか」と連呼してきのちか山に逃げたものだといえられ、なえがあつたらきのちかと、かねてからその避難場所に定めて、家族の離散を防止していたといわれる。山頂の石塔を地震の神として信仰しているが、「けのちか」か「きのちか」かどちらの名前でも呼ばれているように二つの伝説がある。

ハ、疱瘡塚 ほうそうづか 火の河原部落の念珠堂に行く途中の田んぼの中に、こんもりした草山があるが、これを疱瘡塚とよび疱瘡にかからぬよう塚をたて、春秋二回の彼岸に団子を供えて祭つたらしい。今でも部落の人が花香をとっているというが、疱瘡のはやるころの名ごりをのこしている。

二、すすめ塚 慈眼寺稻荷神社の縁起によれば、和田の玉林城には往古寺山出羽守がろう城し、貴久がこの城を攻める時、ぬめり石の付近に床机を設けて敵に備えたという。その時白狐があらわれたので、貴久非常に満悦でこれは島津家のご佳例で、もしきょう中に城が手に入れば稻荷大明神を勧請すると誓願された。ところで城が落城したので当神社を造営し、領地三町歩を寄付されたとのべられている。村人はそのぬめり石のあった所を「すすめ塚」とよんでいるが、戦死者の霊を供養したのであるうか、石祠がのこっている。また石祠の中に田の神がまつてある。

ホ、小伝次の墓 滝下部落に「こちいどん」の墓とよばれる高さ約三米の大きな墓がたっている。秀吉薩摩入りの時、人質として大阪にいった義弘の第一家臣伊集院幸侃の子小伝次の墓だといわれているが、幸侃の子千次郎、三郎五郎の墓ではないかともいわれている。島津十八代家久が、阿多にいた幸侃の子らをこの地で誘殺し、この付近で激戦がおこなわれ、今に「ふつど」「きさくだ」等の地名がのこるのは、その時の戦いを物語るものだという。墓は正徳二年（一七二二）中村の庄屋と村人たちにより、建立されたものであり、また文政二年には庄屋平山甚兵衛が、中村の民の安全を祈念して寄進した石燈籠が、現存している。土地の人には齒の神様として崇敬の念が強い。

へ、谷山五郎隆信の墓 見寄部落に「あんだどんの丘」とよばれる小高い丘があるが、その頂上に谷山五郎隆信の墓とよばれる立派な石祠がある。祠の中に高さ五十糎程の石柱があり、これに阿弥陀如来の種字が陰刻されている。こ

の石祠は江戸中期に見寄門の名頭一家によって建てられ、裏側に本田鏡音坊と修験僧の名も刻まれている。谷山隆信の供養のためにたてられたのだろうが、隆信の墓だといわれている。大正時代この石祠を九大教授某氏によって発掘されたが、途中雷雨激しく、ついにその目的を達することができなかったといわれ、これは霊のたたりによると当時村人たちはよんだといわれる。今では見寄の川上家が花香をとって、年一回祭りをしている。見寄の川畑家は懐良親王について下向したものだといわれている。

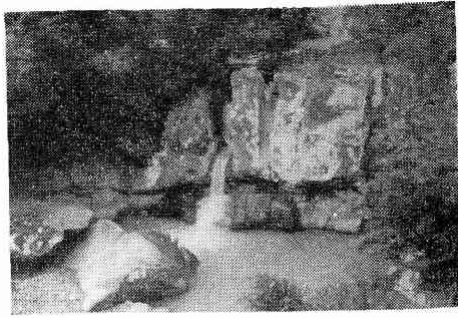
ト、末弘伯耆守の墓 一丁田部落に、末弘伯耆守の墓だといわれる立派な墓がのこっているが、この墓の近くに古い墓が五基ほどあり、最も古いのは元禄二年と刻んである。十四代島津勝久の死後、日新公の子貴久を嗣子にしたことから、これをねたむ佞臣派と、勝久をたてる正中派との争いがたえなかつたといわれ、佞臣派の将伯耆守はおわれて谷山の皇徳寺にかくれ、最後はここで自害したといわれる。正中派の将川上氏の家臣がこれをおい、皇徳寺近くの民家にかくまっていた時、「ほつがにげて来たろうが」と問うと、家人は「ほうき箒はそこにあるじゃないか」といって、伯耆守をうまくにがしたというが、皇徳寺の西の山で自害したといわれる。

4 水の伝説

イ、あなぶろ 皇徳寺跡に「あなぶろ」といわれる所があるが、ここは皇徳寺の僧侶が水こりをされた所だといわれ清水が流れ大きな丸い岩があつて、この岩の上で修行されたといわれている。昔から清浄な土地として、よごさぬよう心掛け不潔なことがあると、たたりがあるといわれてきた。

口、波平、笹貫の井戸 上福元町波平、笹貫の地名は、薩摩の名刀波平の伝説にまつわるものである。波平刀匠の始祖は橋口正国大和の国からこの地に来て、刀鍛冶をはじめたといわれ、一条天皇の御剣を作ってから、その名が世に出たといわれる。波平、笹貫に井戸があり、この水でやきを入れたといわれる。正国の子、行安がかって京にのぼる途中、瀬戸内海で海が荒れ航行困難のとき、自作の名刀を海神に投じて安全を祈ったところ、たちまち風がおさまりは波平らになったという。そこで行安のいる所の地を時の人が波平と名付けたといい、これ以後、船で航行する時には、波平刀を携える者がいたら風浪の難をまぬがれると云い伝えられた。正国がある時、刀をきたえていたが、家人がその仕事場をのぞいたところ、この刀はけがれたといつて一氣に戸外に投げ捨てた。その刀に笹の葉がちらちらと舞いおりて、つきささったので笹貫の地名が起ったといわれる。今でも波平、笹貫の井戸は水がこんこんとわき出して往昔をしのばせている。

ハ、稚児滝伝説 錫山鉞山のはずれに山寺があり、和尚と小僧と稚児が住んでいた。稚児は正直者として知られ、幼少のころ母を失い、十才になって父とも死別したのでこの山寺にあずけられた。利巧で正直者ゆえ和尚に「稚児よ稚児」と可愛がられていた。小僧はこれをねたんで、悪知恵を思いつき、日頃和尚が鶏を可愛がり卵を生むのを楽しみにしていたので、その卵を盗んで知らぬふりをしていた。ある日和尚は稚児を呼びよせ、鶏が卵を生まぬがどうしたかお前の世話が悪いのだろうときつく叱った。小僧はこっそり鶏は稚児が盗んで食べていると告げ口をした。和尚は再び稚児を呼びつけ「お前が盗んでいるだろう」ときめつけた。稚児は「すみませぬ」と一言も弁解しなかった。稚児は小僧の仕業と知っていた。しかしやさしい心根の稚児は、そのことを和尚にうち明けなかった。いつとはなく稚児

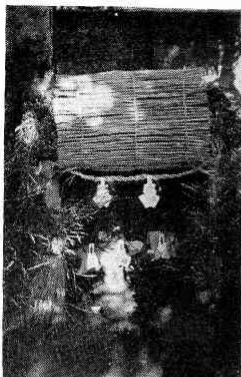


滝 児 稚 山 錫

は泥棒だと部落中にひろまり白い眼がむけられた。たえ切れなくなった稚児は覺悟をきめた。一番かわいがっていた白い鶏に「本当のことはお前が知っているだろう。和尚様にはすまぬが私と一しよに死んでくれ」と、夜寺を抜け出し前夜からの雨で増水していた滝つぼに身をおどらせた。翌日稚児がいなくなったと大きわぎになったが、滝つぼの淵で死んだ白い鶏を発見、つかまえようとしたら突然生きかえり立神山の頂上に飛んで行ったという。部落の人が滝つぼを調べた所、底に稚児によく似た仏像が鎮座していたと伝えられ、それ以来この滝を稚児滝と名づけ、鶏が浮かんでいたという淵は、とりが淵と呼ばれるようになった。いまではこの部落には白い鶏は育たないといわれている。

5、坂辻の伝説

イ、赤土坂 赤土坂は旧伊作街道、滝下部落から松林に通ずる急な坂であるが、小伝次白馬の伝説のほかに、中村に伝わる虚僧踊りにまつわる伝説がある。幕末王政復古の機運もありあがったころ、幕府の密使が虚無僧ぶなぞうに扮し、この地に來たといわれ、赤土坂付近で、農民たちに無礼な振舞をしたというので、農民たちは天びん棒で打ちかかったが、初め軽く扇であしらわれ、その後農民たちの猛攻で、尺八をもって打ちまくり、最後はついに刀を抜いて激しくわたり合い、とうとう農民たちはその僧の刀にたおれたといわれ、赤土坂の土の色の赤いのはその血の色でそまったとい



氏神 (薬師堂部落
加治屋孝志氏)



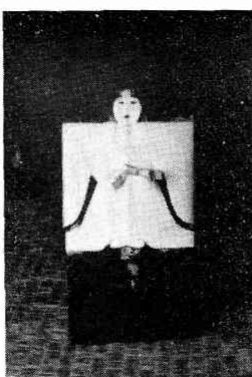
水天 (鹿倉部落)



石敢当 (辺田部落永
谷良雄氏)



氏神祭
(諏訪部落 浜田氏)



火の神 (薬師堂部
落加治屋孝志氏)



山の神 (鬢石部落)



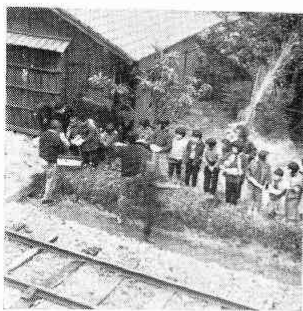
瘡瘡大神（慈眼寺址）



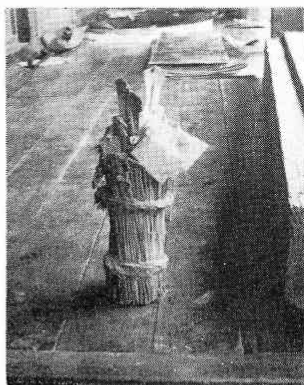
田の神（藪野部落）



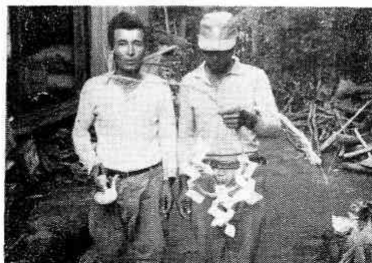
えびす神（森山部落）



氏神祭 赤飯をもらう子供達
（浜平川部落）



山の神（岸木田部落）



馬頭観音講しべ替え（平馬場部落）



二十三夜待供養塔
(一丁田部落)



いほの神
(白山部落)



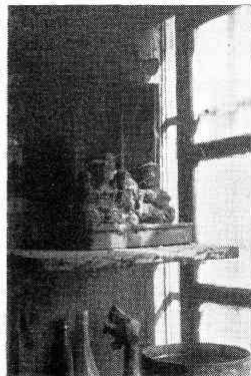
庚申講
(山田下部落)



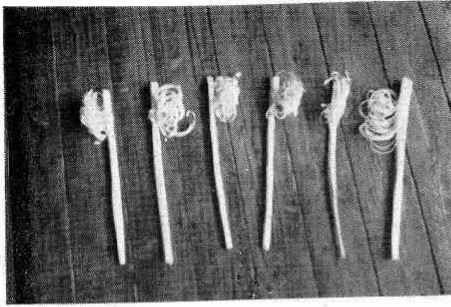
田の神
(永田部落)



庚申供養塔
(坂上西部落)



大黒様
(一丁田部落)



け ず い か け



十五夜 供え物



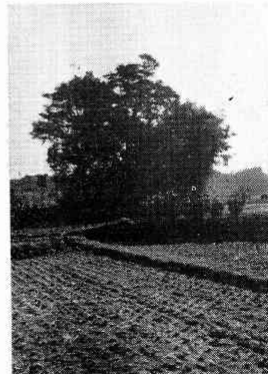
伊佐智佐神社 武者行列



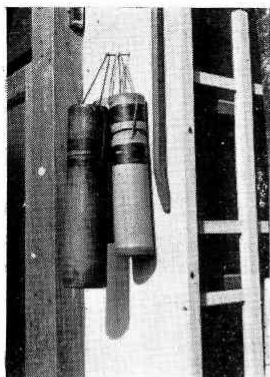
浜下り 神舞



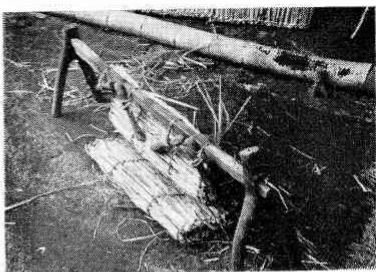
氏神祭 供え物
(浜平川部落 田尻氏)



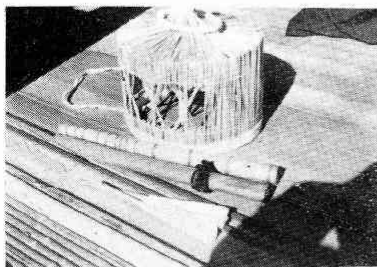
上西 森どん



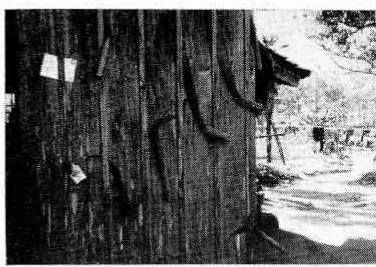
やすいつぼ (一丁田部落)
諸平氏蔵



炭俵編み機 (平川町高野部落)



虚無僧踊 編笠その他
(中町 平馬場部落)



壁を利用した物のしまつ
(笠松部落)



御 岬 講 (東塩屋、柏原部落)



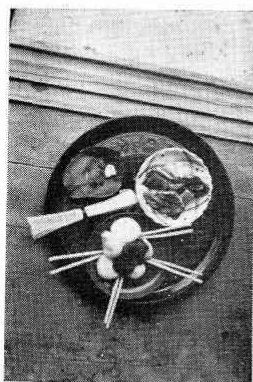
庚 申 講 (笠木部落)



正月供物 (高野部落)



羽子板祝 (柿木田部落)



盆 供 物



七 草 祝



だ ら つ き



十 五 夜 納 か き

われる。このことから虚無僧踊りもあみ出されたと伝えられる。

口、六部坂 松林部落に六部坂といわれる急な坂があるが、村人たちは「ろくつざか」とよんでいる。ある時六部がこの地を巡礼していたら、この六部を殺してそのもつていた持ち物や金を取ったものがあり、その後この地ではたたりがひどかったという。村人たちは供養塔をたててまつり、だれいともなくこの坂を六部坂というようになった。今でも供養塔がのこっている。その金をとつた人は、一時は倉がたつたが、その後その一族はおとろえたという。

ハ、あんだ坂 坂上の西部落にあんだ坂とよばれる、くねった坂道がある。部落の人は井戸がないので、この坂を毎日上り下りして坂の下の井戸から水をくみ、その苦労はたいへんだっただけ。あんだ坂ののぼりあがつた所に、昔、阿弥陀堂があつたらしく、今でも六地藏塔がのこり、庚申供養塔ものこっている。阿弥陀堂の近くの坂だったので「あんだ坂」とよんだのであろう。

6、森、野、山の伝説

イ 蛇じやの穴 慈眼寺跡北の方、たんねの川の上流に、蛇の穴とよばれる大きな穴がある。入口は一間四方、中にはいる程せまくなり、伊集院に通ずるといわれ、かつて犬を入れたところ伊集院から出たといわれる。穴の中から経石が多数見つけ出されるが、修験僧によってかかれたものともいう。小石にお経の文字が一字かかっている。これを持ち帰ると、その人は腹がいたくなると伝えられている。大川内部落の品戸にも蛇の穴があり、この穴も伊集院に通ずるといわれる。中は暗く今ではコウモリの巣になっていて、とても近よれない。先住民族の住居穴とも想像されたり、藩政時代一向宗信者のかくれ穴であつたという古老もある。

口、光山 ひかりやま 坂上から七ツ島に通ずる所に、光山とよばれる所があるが、十五代貴久公が大隅征伐の時、東方から一

塊の火の光が飛来して、その光が赫々と燃えさかった。この土地の水樽門みづたるかどの農民たちが、これを見つけたところ、鎌を得たので、早速里長にとどけ、さらに藩庁にも連絡したという。そこでこの土地を光山というようになり、一社をたてて、その鎌を安置して、諏訪大明神を勧請したといわれる。(谷山諸記)

ハ、大蛸山 うだこやま 平川と瀬々串との境に大蛸山といわれる、小高い山があるが、この付近の海岸は谷山でも一番よく蛸のとれる所だといわれている。貴久の大隅征伐の時、この山に陣し、軍を指揮したといわれる。その戦勝を祝って大きな蛸がこの山にのぼったので、大蛸山の名がついたという古老もある。

ニ、長尾山伝説 皇徳寺跡の、東の山を長尾山とよんでいるが、この山に軍用金がうめられているといわれて、今まで山師が再三発掘したらしい。千杯せんぱいいりのつぼに朱金がいれられ、つづり木の下にかくまり、「朝日夕かげ」の暗号でよばれていたとか。千杯いりのつぼいっぱいの一杯は七合五勺入りで、いかに大きなつぼであったかが想像される。

7、社寺伝聞、旧家にのこる伝説

イ、黒丸神社 山田下にある黒丸神社は、明治のはじめこの地にあった長尾神社、産土神の三つが合祀されて建立されたもので、特にこの神社には南北朝時代、谷山に下向された懐良親王が奉納されたといわれる、御帛と鈴がのこっているといわれ、御帛には菊の紋章がはいっているといわれる。

ロ、大川内の観音堂 大川内部落の松崎氏の宅地に、高さ約一メートルの観音像があり、その前に正徳二年施主久永仲兵衛の石塔建立の碑が立っているが、大川内部落にのこる石塔碑はほとんど久永家に関係のあるものが多い。久永



大川内の観音像

由直氏の「久永家の来歴」によれば、貴久三州統一の時代、日向の伊東との木崎原合戦に辛勝したが、久永家は人吉の城主相良家の兄で、伊東に味方していた。戦い終わって貴久はこの兄を人質にして薩摩につれ帰り、猫のひたい程の大川内に封ぜさせた。この人が薩摩における久永家の祖だといわれ、仏教の信仰厚く、大川内に阿弥陀堂を建立し、その時公家でなければ許されなかった格式の高い生籬いけがきが築かれたという。今にのこる石塔碑はその子孫の建立になったといわれるが、

今も山田、五ヶ別府には久永姓が多い。この久永家に関係のある家柄だといわれる。久永氏は時々城下と呼ばれてご馳走になり、よっぱらっては田上や宇宿を経て大川内に帰ってきたので「谷山犬のくい逃げ」はこの久永氏のことをいうのだともいわれる。

八、十一面村 中村白山部落に十一面村とよばれる所がある。谷山諸記によれば、中村之内十一面に観音堂二字社人水流の仲左衛門但仏躰木座像高さ壹尺式寸由緒相知不申候とある。この地は通称「堂元」とよばれるが、十一面観音堂があったのでよばれているのであろう。十一面村では古来十一戸ならよくまとまるが、一戸でもふえると、どの家かつぶれるといわれ、今でも十一戸からなりたっている。

二、神武天皇御駐蹕伝説地 柏原神社の境内は、神武天皇御駐蹕の地と伝えられている。昭和十五年県知事指定により建立された碑文に「神武天皇高千穂ニ在り皇妃吾平津媛ノ生地吾田ノ地ニ幸シ屢々此ノ処ニ駐マリ給フ高倉天皇ノ承

安年中谿山ノ庄司其址三天皇ヲ奉祀シ樞原宮ト称セリ村社柏原神社ノ始ナリ紀元二千六百年ニ当リ社殿ヲ改築シ伝フルトコロヲ刻スト云フ」谷山町建設と記してある。

ホ、七ツ島伝説 錦江湾の名勝七ツ島は七ツ島、沖之島、腰掛島、出口島、中ノ島、平島、一ノ島の七島からなり、七ツ島は昔「伊智貴」島と称せられていたとか、このうち樹木のある島は七ツ島と沖之島の二島で、他はすべて岩島である。七ツ島、沖之島の両島には最近まで数本の老松が天にそびえていたが、樹齢みちたか次々に枯れ果て、現在ただ小松その他小さな樹が生えている。

その昔藩主島津公が、薩摩七島を領していたとき、某藩主と互いにその領土である七島を賭けて、ある勝負ことをなされた。運悪く島津公は惨敗された。そこで相手の藩主は早速その七島の譲渡を要求された。困ったのは島津公、ただ一時の娯楽のために薩摩七島を割譲するのは、いかにも残念であるが、遊びごととはいえ武士が約束した以上これを違えることもできず、種々案を練った末に思い出されたのがこの七ツ島で、それではということ譲渡されることになったが、相手の藩主この七ツ島の状況をおききになって七ツ島は、七ツ島でも到底人はおるか、ねずみ一匹すめそうでない、その島だけは御免こうむると、御ことわりになり、共に呵々大笑して事なきを得たという。薩摩七島の身代わりになった島であるといわれる。

へ、向原古戦場に伝わるなぞの遺言

朝日影なし夕日のもと

朱三盃 金千升

このなぞの遺言は、財宝の隠し場所を暗示しているといわれるもので、古くから下福元の向原部落向原山助氏邸内に伝わるなぞの言い伝えがある。いつの時代か明らかでないが、昔この向原で戦いがあつた時、一方の一族がこの地において悲壮な最後を遂げ残る直前、一族子孫のために合戦に必要な朱と金を大がめに詰め、地中に埋めて子孫の再興を念じつつ紙片にしろしていたといわれる。この紙片は紛失してないが、いつの頃か同氏邸内にあつた大きな石畳に不審をいだし、ここが例の隠し場所ではないかと、その岩の周囲をほり牛に引かして取除かんとした際、その岩が土中深く落ち込み、どうすることもできず作業はそのまま中止されたといわれ、現在その場所も不明である。同氏邸内にある十五、六基の墓石や石仏は当時討死した一族の墓といわれ、向原の地名も「敵に向つた」という所から出たといわれ、このなぞの遺言はこれら無名の墓石と共に深いなぞを包んだまま現在に及んでいる。

ト、烏帽子嶽神社靈談記

不思議な握り飯

明治の初年、鹿兒島の一崇敬者で十七日間断食籠社した所、期満ちる前夕、美姫がまばゆいばかりの装束で現われ、私は本社の社務所からつかかわされる者、あなたの祈誓の期もいよいよ満ちた。断食の結果、ご疲労なごさつたと考えてこれを持ってきたといつて、二個の握り飯を木の葉の上のせたまま、いずことなく姿をかくした。崇敬者は奇異の感をいだきながら翌朝下山の時これを食べると、それはホヤホヤのたき上げの飯で不審でたまらず、余りの一つをのこして神職の家に持っていったら、神職も驚きあやしみ、そんなことはおぼえはないと答えたので、始めて神の恵みなることを知つたという。

○枕べに竹筒

明治の末ごろ、鹿兒島の熱心な敬神家で、心願あつて参ろうし夜に入つて神酒を忘れたことに気づき、しばらくとうとうとしていると、いつしか枕べに、竹筒に芳醇な酒を満たしたものがすえてあつた。その筒に谷山町西元酒屋の名が書かれてあつたので、帰途この酒屋によりその竹筒を返したところ、店主は昨夜容姿端嚴な一老人に酒をこわれ、この筒に入れて差し上げた。翁はそれを手にしていざとなく姿を失せたので、一同も不審に思つていところであつたと、互いに顔を合せて言葉もなかつたとのことである。

○ゆずりはの大木ねじ折らる

戊辰の役の時、官軍戦勝祈願のため、谷山村内の神職参籠中、一夜突然境内に、天地も崩れんばかりの鳴動が起つた。翌朝出て見ると、前夕まで社の後方にそびえていた、ゆずりはの大幹がねじ折られて倒れていた。そこで直ちに神慮を伺つてみたところ、神のおかげで徳川家代々天下の將軍として職を子孫にゆずつていたが、今や薩長官兵のため撃破されて代々の職ここで絶ゆる知らせであると、これを聞き一同勇躍歡喜して戦勝を期待したところ、日からずして勝報があつたという。

○兼光作の宝刀ご返納

当神社由緒記によれば、天文年中、島津日新公肝付領主伊地知重興氏と戦を交えたが、伊地知の軍勢鋭くして侮るところができず、狩り集めた兵数約一万人、海陸にせつ候を放つて島津の動靜を伺い、今にも大軍を率いて攻めよらん態度を示した。貴久公の父君日新公少なからず心配され、時の修験者長野武蔵坊に命じ、烏帽子嶽大神を信仰させ、全

勝の御祈とうがあつた。今か今かと勝報をまたれたところ、靈験たちまち現われ大勝を得られたと、よつて天正のはじめ島津十六代義久詣で、島津家伝来の大刀兼光を奉納された。その後朽敗をおそれ長野武蔵坊が里宅に封蔵して今に残存す云々。

大正二年参拝者に兼光の宝刀が行方不明であるから、早く返納せよとのお告げがあつた。その後谷山村下福元の石塚家に秘蔵してあることがわかり、谷山村助役厚地政恒氏の相談により、大正九年一月無事宝刀は神社にかへつた。

○靈夢から奇石発見（喜入村瀬々串の奇人物語）

喜入村瀬々串の海岸に川原戸吉とよぶ奇人がいた。当人は三十三才の壮漢で、土木工夫として働いていた。ある時烏帽子嶽神社の靈夢に感じ、付近の榎田または駒返しで、竜石、馬石、鶯石等種々の形の奇石を発見したそうである。また戸吉はある夜の夢に、どことなく一人でとぼとほ歩いて行くうち、路傍で幾ばくかの寶石を拾つたことを見たことがあつた。それより五年目の大正元年九月九日の夜、白髪の老人が戸吉の枕元に立つて「我れ烏帽子嶽の大神である。今汝に寶石を授けるから大事にせよ」との神託があつた。その翌日付近の榎田をあさっていると、一個の奇石を発見した。この奇石は極めて質が硬く色の黒い重さ五貫位の塊岩であるが、不思議なことに石面に鶯形の象眼をしたようで、一見梅の枝に鶯がとまって嬌音なめらかに、ホーホケキョウと連呼するかのようである。戸吉はこの目に駒返しで馬石、竜石、鬼石など色々の形の奇石を拾得した。これらの石は目下照国神社に奉納され、いずれも奇石中の奇石だといわれる。

○戦時中の靈光

日露の国交断絶し、戦雲急を告げた際、神参りが激しくなつて、全国各地の神社に奇蹟があつた。その時当社において、暗夜ある時、あかり煌々たる靈光あらわれ、人々皆おたけ様の御出征となえて、勇みはずんだことは今もなお、氏子、崇敬者の人で記憶している者が多い。

○小鳥捕りと全山の鳴動

平川村の東条某と同職岩切某の二人は、今から四十年前腕白盛りのころ、烏帽子嶽神社に小鳥捕りに出かけたところ、にわかには雲霧がかかり、天地も崩れんばかりに全山鳴動したので、さすがの二人も身の毛がよだつて、総身冷水を浴びたようにふるえ上がり、持つてきたかごを握りしめ、無我夢中で一目散で山を逃げだし、生きた気持ちはなかつたという。ようやく山麓の三の鳥居について、互いに顔を見合わせ、しばし言葉もなかつたという。

○神木を伐採しておとがめ

宝暦年中、平川村原川の百姓が薪とりにいった所、山中鳴動し大石が落ちかかり、頭にあたり死ぬということがあつた。また浜の浦の百姓が、ある時お山へ薪取りに行ったところ、再び山中鳴動し、大石が落ちかかり、ようやく山中をはい出し命だけは助かったが、右の足は役に立たず、かたわ者になつて存命しているとのこと。又野屋敷の安藤某もお山に松材とりに行ったところ、また、山中鳴動し大木が落ちかかり左の足へあたりかたわ者になつていつとである。

○屋根の草鞋わらじ

当社往古の社殿は、茅葺きであつたので、氏子の者たちの奉仕で屋根を葺き替えていた。軒端から屋根へふくののが普通であるが、当社においては、屋根より軒端へふいていたという。葺き替えが終わつて、翌日お山に登つて見ると、全く風もないのに屋根は一度にこわれていた。調べて見ると土のついた草鞋を、まちがえて屋根に葺きこんであつたという。

二、民話

1、皇徳寺の大蛇の話

昔、皇徳寺の客殿の横の池に、大蛇がいて毎年毎年一人の娘がのまれていました。村人たちは今年もまた村の娘がのまれると悲しんでいましたが、皇徳寺の坊さんがこのことを聞き、なんとかして退治することになりました。坊さんは、それから毎日小石を拾い、それにお経の文字を一字ずつ書いて経文をとなえながら、その池に投げこみました。するとある日、突然池の中に暴風が起こり、たつ巻がおこつて池の中の大蛇が姿を見せました。村人たちはこのありさまに驚き、あわてふためいていましたが、坊さんはお経をとなえて身動きもしませんでした。やがて池から抜け出した大蛇は皇徳寺の裏山に姿を消して、小さな白蛇になつてしまいました。この大蛇の逃げた所を「ざだい」と呼んでいます。今でも池の付近から経石が出てくるそうです。

2、うれしめでたの若松様の話

昔山田のある村に、若松という十二才の弟と、十四才の姉が、二人仲よく暮らしていました。しかしだんだん親の

のこした財産もなくなり、何もかも売り払って、貧しい生活になりました。若松を学校にやるため、姉は貧苦の中にも強く生きていました。若松は知恵がよく学業もよかったので、成績のよくない金持ちの子供たちがねたみ、何とかしておとしいれようとたくらみました。ある日金の船を浮かべて競走しようと若松に申し入れました。金の船など思おもよらぬことでしたが、姉といろいろ話し合いの上、棕櫚の木のかさったものをくりぬいて、それにとたん板をはり、粗末な船ができました。いよいよ競走になりましたら、金の船は見るみるうちに沈んでしまいました。学業でもかなわぬ、技術でもかなわぬということで、今度は宝比べをしようということになりました。心配した若松は、また姉に相談したところ、父がなくなる前、他人に売るなど言いのこした千両箱がありました。金持ちの子供たちはすばらしい宝物を持ってきましたが、若松のは古ぼけた箱でした。今度こそは若松もまいったと思っていましたら、やがてその古ぼけた千両箱から雌雄二羽のうぐいすが出てきて、美しい声で鳴きだしました。宝比べも若松の勝ちでした。そこで今度こそ若松を殺害しようと企て、遠足に行くようさそいました。特別の弁当もないので粟飯のおにぎりでしました。やがて昼食となりましたら弁当を交換して食べることにになり、若松は恥ずかしくて、なかなか弁当を出さうとしませんでした。無理やり交換して食べることになりました。しばらくすると若松の容態がおかしくなりました。きつと弁当の中に毒物が混入していたに相違ありません。遠足から帰り早く寝た弟の姿を見て、きつと昨夜の夢があつたと神に祈りをしようとして、神だなの花水を替えようとしたら、若松の顔に花水が少しこぼれおちました。ところが不意に起き上がりもとの健康な姿になりました。これ以後若松姉弟の家はたいへん栄えたそうです。

うれしめでの若松様よ

杖も栄える葉もしげる。

3、諏訪の神様の話

諏訪の神様は、三人兄弟でその一番末の弟の神様がある時、道を歩いていると穴に落ちてしまいました。そこは地の国、底の国といって、どうしても上がることはできませんでした。穴から上がるには蛇の姿になると上がれるというのでしたので、蛇の姿になり、穴を出ることができました。ところが今度は人の姿になることができませんでした。そこで人の家の所まで来て、床下で思案していますと、その家の人が穴におちたら少しでも高い所を行けばよいこと、それから人になるには、信濃の国の諏訪湖で水浴すればよいと、話していました。そこで早速その通りに見ますと、人間の姿にかえることができました。穴を上がる時、急に腹がへったので、何か食べ物はなにかとその辺を捜すうちに、お宮にやってきました。その宮に鎌がありましたので、これで獲物をとって食べ、この鎌はよい記念になると思つて持つて帰りました。今でも諏訪神社の祭りは鎌をそなえるそうです。また旧暦の諏訪市には、必ず鎌を売り出すことになっているそうです。

4、塩釜様の話

中塩屋に塩釜大明神がありますが、子供の神様とよばれ、たたらん神様といわれています。一人も子供が遊びに来ない日は、神様のごきげんの悪い日で、毎日一日中付近の子供たちが遊びに来ているそうです。夏水泳の時、御神体の鏡を海中になげこんだり、さがしたりして遊び、またもの所へ返しても、何のたたりもないし、かえつてその遊びをしている子供たちをとがめると、そのとがめた人が具合が悪くなるそうです。疱瘡がはやって寝ていると、そのほそ

のつを好物として狐が食べに来ますが、塩釜様が回つてくると、狐はにげてしまうそうです。塩釜様は顔はこつく、きつい顔をしています。柔和な心のやさしい神様で、よその部落で流行病がはやっても、中塩屋一帯の部落は、はやらなかったそうです。

5、弓いいどんの話

三重野部落に、弓いいどん、きりあけどんの墓といわれる古い墓がありますが、この人は三重野門の乙名どんだつたそうです。弓を引くことがとても上手で、ある日三重野の原から矢をはなつたら、皇徳寺の門前までとどいたといふことです。これを聞いた殿様は弓の指南役になるよう再三使いをよこしましたが、最後までこれを聞きいれなかつたといふことです。三重野から勘場の一帯は、藩政時代島津の十三狩倉の一つに数えられ、昔から狩の盛んな場所だつたそうです。勘場は狩や山林の勘定の場所。勘場の名がおこつたともいわれています。

6、河童かわづまにとられた人の話

昔、白山部落の水流家の主人が、霧島の温泉に湯治に行きました。ある日入浴していると、河童にとられてしまいました。驚いた水流家では、わざわざその遺骸をとりに行き、棺におさめて、重富から吉野の山を越えて持ち帰る途中、急に天候がくもり、しばらくすると急にその棺が軽くなつてきました。棺の中をのぞくわけにもいかず、不思議に思い棺の上のつて、刀を抜いて二三回振りまわしたら、また重くなつてきたそうです。不思議なこともあると、気持ちもわるく、ようやく十一面村にもち帰つたといふことです。村役人も気持ち悪く、しばらく外にも出なかつたそうです。

7、地名のおこりの話

中村に鶉ヶ原、麦打場といわれる小字名の土地がありますが、昔村役人が村々の小字をきめる時、あちこち歩き回って適当な名がつけられないで困まっていると、急に足元から鶉が飛び立ったので鶉ヶ原、そこを通り抜けて間もなく、ちようど麦を打つ人がいたので、その辺を麦打場ときめたそうです。さてあちこち歩きましたが、一番最後の所は、大変ぬかった田んぼで、ようやくそこを通り抜け、歩き易い田んぼにたどりついたので、ここの付近は今までの田んぼと比べて極楽のようだというので、極楽という小字をつけたということです。今でも中町にのこっている地名です。

8、水喰みつれの話

中村の人たちは、入来原のことを足形原とよんでいます。昔この付近に大男がやって来て、この入来原と隣りの登上平に、またがって水をのんだということです。それからこの付近を水喰と呼ぶようになったそうです。水喰の付近は一年中水がたえたことがないといわれています。足形原は大男の足跡がのこっている所から、そんなに呼ばれているそうです。隣の牟田も水の多い所だといわれます。

9、腕六うでむどんの話

昔中村の平馬場に、腕六どんとよばれる豪傑がいました。正しい名は東入来六左衛門という人だそうですが、腕に石白のせて荒そばを一升ひかしたそうです。腕のまわりが一尺二寸もあつたそうです。腕六どんの友達で、剣術の名人といわれた竹脇四郎右衛門は「シトヨン」とよばれ、高跳の名人でもありました。ある年の師走の二十七日、涙橋の刑

場でおしおきがあつた時、この二人はその死体をひろつてきて、ためし切りをしたといわれています。五月になると西下では火玉が飛んだそうです。昔から中村の平馬場は、こわい所だと旧伊作街道を通る人々は恐れて、通つていたそうです。

10、蛇退治の話

昔ある日、中村の二人のぼっけもんが、やせ馬を引いて伊集院へからいもを買いに出かけました。一日中歩き回りましたが一升も買い出しませんでした。そのうち日が暮れて泊めてもらう家もなく、通りがかりの人に宿をたずねたところ、この近くにお宮があるが、このお宮の山に大蛇が二匹いるので、この宮には泊るなと注意を受けました。しかし二人のぼっけもんは、この宮で一夜をあかすことにしました。夜中になると大音と共に大蛇がでてきました。一人のぼっけもんは自分の腕をかませ、大蛇の目をおさえて、自分の腕をさあつと切り落してしまいました。二人は翌朝大蛇を一匹ずつ引っぱつて宮から出てきました。そのお札に村人から、からいもを四駄しよたもらい受けて帰つてきたそうです。

11、白玉姫の話

中村の鎮守神白山神社の祭神は、白玉姫命といわれて片目の女の神様だといわれています。白玉姫をまつる中村では、昔から女のお多福は生まれても、片目の子供はいっさい生まれないとわれています。今でも片目や目の悪い子供はいないといわれています。

12、波平の氏神様の話

波平の氏神様の二神体は、鉄のような黒光りする大きな自然石ですが、たいへん子供好きの神様だそうです、雨の

日でも宮の前で、子供たちが遊んでいるそうです。また氏子の人々の間では餅粟を植えてはならぬと禁ぜられているようですが、この神様がある時、餅粟の穂で目をつけて、片目になられたからだといわれています。祭りには餅粟の餅はいつさい禁止されているそうです。

13、茂頭観音の話

五ヶ別府の茂頭の寺山の中腹に、姿の美しい観音様の石像があります。昔ある時観音様のすぐ下の、田中スマというおばあさんが夢を見ました。自分の枕元に白粉おしろいをつけた観音様が立っていて夢の中で、石を起こしてくれと頼まれました。翌朝、早速村人を頼んで、後ろの山の大きな石を起こしたら、立派な観音様が現われました。旧暦六月十七日に六月燈をおこない、近隣の人々が今でも参詣しています。観音様の横には馬酔木が植えられています。外にもう一体この近くにあるといわれています。茂頭の観音様は高さ一、二米、横二米の大きな石に浮彫りされた。とても美しい姿です。

14、鰻頭石の話

谷山と伊集院の境に、鰻頭の形をした大きな石があります。昔ある時、この鰻頭石は谷山のものか、伊集院のものかとお互い争いがありました。谷山の人は自分のものだといひ、伊集院の人も自分の方だと、仲々ゆずれませんでした。そこで色々相談の結果、この石に鰻頭をのせ鳥が飛んできて、くわえて行つた方のものにしようということになりました。どちらの人も、かたずをのんで今に鳥が飛んでくるかと思つていますと、やがて鳥が飛んできて、その鰻頭をくわえて谷山の方へ飛んで行きました。そこで谷山のものとなつたそうです。土地の人々はこの話を「鳥の鰻頭」

とよんでいます。

15、じゃんぼの話

昔、懐良親王が谷山の御所ヶ原に來られた時、谷山の大将谷山五郎隆信はある日、親王にご馳走しようとして、餅をつき小さくちぎって、その上に味噌と黒砂糖をたいてどろどろにしたそれをまぶして差し上げることにしました。食べやすいようにするため、その餅に短い竹の棒を二本さして皿に一杯盛って差し上げました。親王はとても喜んで珍しそうに食べていましたが、あまりおいしいので、これは何というものかと、お尋ねになりました。隆信はたいへん困っていましたが、二本棒がさしてあるので「じやぼ両棒」と答えたそうです。これが「じゃんぼ」の始まりといわれています。谷山の町では、じゃんぼ屋があつて明治のころまで盛んに作つていたそうです。

西郷さんも谷山に狩に來ては、立寄つてたべられたそうです。三国名勝図会には、谷山の五文餅ごんめもちと谷山の名物の一つにかいてありますが、一個五文したからだといわれています。今でも慈眼寺で売っています。

16、節句に幟を立てぬ話

昔、五ヶ別府の川口の、本村どのの子供とその子守りの二人が、五月節句の日、幟はたけを立てて、車人形を引いて後ずさりして遊んでいたら、近くにあつた深い井戸に落ちて、二人とも死んでしまいました。それ以來五ヶ別府の川口や蕨野では、五月の節句には幟を立てず、また井戸も掘らないといわれています。

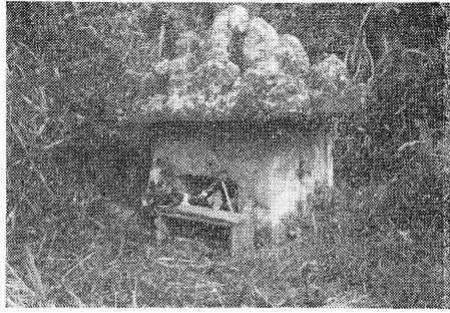
17、加藤左衛門の屋敷の話

中村の大園に加藤左衛門の屋敷といわれる石垣べいの土地がありますが、この屋敷は昔、秀吉の忌諱にふれて薩摩

に島流しされた加藤氏のいた所だといわれています。大園には大工、屋敷という姓が多いですが、この加藤氏についてきた人たちだといわれます。今でも大工屋敷、脇屋敷といわれる場所がのこっています。

18、とつさあどんの話

諏訪神社の近くに、とつさあどんとよばれる、とてもごつごつした岩はだで造られた珍しい石祠がたっています。この神様は幟を立てることをきらい、また白い色をさらう荒神様だといわれ、この付近は今でも、白馬、白牛はのさらんといわれ、ぶちの家畜も育たないといわれています。この神様はどこかへ飛んで行つては帰ってくるそうですが、牛馬がこの石祠の前を通ると、倒れるといわれます。とつさあどんがどこかへ飛んでいる間は近くの人々は、身体の自由がきかなくなり、帰ってきたら身体が自由になるそうです。今でも荒神様として村人たちが恐れられ、どこにも飛んでゆかれぬよう祈願しているそうです。



19、池田七兵衛道場の話

昔、諏訪神社の鳥居横に、池田七兵衛という槍の指南役が道場をつくっていたそうです。ある時、荒武者がやってきて、七兵衛と試合をすることになりました。荒武者は一刀のもとに倒そうとして切りかかりましたが、なかなか手こ

わく勝てそうもありませんでした。そこで作戦をかえて道場の外に連れ出しました。そして不意に切りつけましたが、今度は逆に七兵衛は「えい」と声掛高く鳥居を飛んで、荒武者に切りつけました。七兵衛はその後ながく島津氏に仕え手柄をたてたといわれています。

20、河童つりの話

昔、永田川の上流の「ほかつどの崎」という所に、腕六と四とよんの二人が、河童をつりに行くことになりました。ほかつどの崎は、淵になっていて、いつも青々して身の毛のさす所であまり人は近よらない所でした。二人はおどおどして前後を見渡しながら、川の中へはいつて行きました。「わやそっち行け」「おやこっちいで」とあたりを見回しながら、二人はそおつと尻を川につけていました。「こんか」「まだこんど」腕六は竹を持って動かしているの、四とよんが「きたか」と小声でいうと「うん、今きかかつとつど、じつとしておれ」と言つてそおつとしていました。夕方暗くなるまでじつとしていましたが、仲々河童はつれませんでした。

21、白山神社に力をもらいに行った男の話

昔、白山神社の宮前に、十兵衛という男が住んでいました。永田川で身を清め、毎夜丑みつ時白山神社に力をもらいに行きました。人玉や幽霊が出てきておどされましたが、それにも屈せず毎夜通い続けました。一週間目のある夜、後ろから足を引くものがありました。帰つて縁側の上がったら、縁側を踏み落としてしまいました。畳が上がったら畳も踏み落としてしまいました。十兵衛の父が驚いて「お前は白山神社に力をもらいに行ったね」「はい」「お前は千人力をもらつて来たね、土地もないも踏みつぶしてしまうぞ、早よかえして来い。そのかわり向こう一倍という力

をもらって来い。」といいました。ある日父のいいつけで加治木に行きますと、油屋の前で十人ぐらいの若者たちが椿のはいつた袋を担っていました。なかなか重くてかつげませんでした。十兵衛はこのありさまを見て、「これくらいのものがかつげんか」と笑っていますと、その若者たちがおこつて十兵衛におそいかかつてきました。それならお前たちとかけをしようということになり、その袋をひよいともち上げて奥の方へ運んで行きました。十兵衛はうんともうけたそうです。

22、六十間田圃の話

昔、中村の田んぼ道を二人の老人が歩いていました。一本道のせまい道でしたがとても長くむこうの森まで続いていました。ぼつりぼつり話しながら歩いていましたが、一人の老人が「この道の長さはどしこあいかに」と他の老人にいいますと「六十間くらいじゃい」と答えました。そこでこの田んぼ道を六十間田んぼと呼ぶようになったそうです。今では耕地整理されて道の幅も広くなり、たんぼも見渡す限り続いて、千米ぐらいの道が直線に連なっています。この道の入口に茶屋がありました。この茶屋に、或時雷あまが落ちましたので「カンナレ茶屋」とよぶようになります。今はその茶屋はありませんが、その付近をカンナレ茶屋とよんでいます。

以上の民話は主として鹿倉部落の鹿倉宗一、平馬場部落の西田盛一、白山部落の国料国盛氏からきいたものである。

第九節 神祠一覽表

谷山市内田の神像一覽表

| 番号 | 所在地 | 形状 | 向き | 講の 有無 | 持ち物 | 大きさ 高さ幅 | 備考 |
|----|--------------------------|------------|----|----------|----------------|--------------|--|
| 1 | 谷山市五ヶ別府町川口 (県道下) | 笠冠農民 立像 | 東 | 有 | 杓子 破損 不明 | 61cm 23cm | 安永十年二月二十四日(天明元年) 台座二段 |
| 2 | 谷山市五ヶ別府町巖野 (部落内路傍下畑) | 笠冠農民 立像 | 東 | 有 | 杓子 腕 | 63cm 34cm | 宝曆十二年壬午年十月吉日、奉寄進(文字は間違っている)宝申二才中と刻銘があるが宝は庚の間違いであろう、こわれた台座はセメントで修理してある。 |
| 3 | 谷山市山田町一丁目 (県道の傍) | 地藏型立 像 | 東 | 有 | 杓子 箸 | 70cm 73cm | 享保八歳霜月吉日女相中、台座二段三段目は俵型? 県文化財に指定 (昭和四十一年三月十一日) |
| 4 | 谷山市山田町札下(谷 山北中校庭東墓地中) | 地藏型立 像 | | 無 | 破損破損 不明不明 | 58cm 28cm | 笠冠は破損、刻銘なし、一丁田の像によくにている 享保年代造立? 墓地の藪の中にくらげこんでいた。 |

| 8 | 7 | 6 | 5 |
|--|---|---|---|
| 谷山市中町、福永(部落内田圃道) | 谷山市中町白山(部落内路傍) | 谷山市中町白山(部落内路傍) | 谷山市山田町札下(県の傍) |
| 笠冠農民立像 | 笠冠農民座像 | 笠冠農民立像 | 笠冠農民立像 |
| 東 | 東 | 東 | 東 |
| | | | 無 |
| 杓子 腕 | 棒 杓子 | 杓子 腕 | 不明 腕 ↑ ↓ 破損 |
| 67cm | 54cm | 62cm | 76cm |
| 36cm | 29cm | 33cm | 35cm |
| 田の神像横に排水記念碑が建立明治四十三年三月二十六日竣工とあるから、この時田の神像も造立されたもの。 | 笠冠は折れ顔面も破損して胴体の上のせてあるが近くの溝の中にうずまっていたのを掘出したもの、以前この地にあったもの、造立年代不明 | 大正九年六月造立、大正九年排水記念碑建立の時造立されたもの、碑は像の前にある。 | 享保十二丁末歳奉□□札下、地藏平ノ八左エ門、大坪ノ□□□平ノ□□、川口……半、台座四段、以前見寄の部落から盗まれたという。 |

| | | | | |
|--|----------------------|--|---|---|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 |
| 谷山市上福元町柿木田 柿元氏宅地 | 谷山市上福元町七村 (部落内路傍) | 谷山市山田町谷(永田 川上流堤防の傍) | 谷山市中町滝ノ下(部 落内路傍) | 谷山市中町竹ノ迫(部 落内路傍) |
| 墓石型、 武士立像 袴姿 | 笠冠武士 立像(羽 織袴姿) | 碑石 | | 笠冠農民 立像 |
| 西 | 東 | 南 | 東 | 東 |
| | 有 | | | |
| 不明 不明 | 杓子 椀 | | 杓子 破損 椀? | 杓子 椀 |
| 62cm | 67cm | 78cm | 93cm | 60cm |
| 31cm | 34cm | 42cm | 40cm | 35cm |
| 台座に□□六年辛丑□月吉日供養女□□三才相中と 刻銘があるが享保六年造立のものか、像の下部に人 差指のはいる穴がある | 明治三十一年旧八月二十八日、七村郷中 | 裏田神明治八二刻九月建立田神大村平蔵同平次郎氏 口人竹下喜左エ門 右切、久永清吉、表は水神明治 七年戊旧八月村立 | 造立年代その他刻銘はないが像の形状は一丁田の像 と同一台座は雲竜模様、谷山のものでは最も大きく 堂々たるもの。 | 田之神像には刻銘はないが像の横に大正元年十一月 十一日耕地整理記念碑があるからこの時造立された もの。 |

| 18 | 17 | 16 | 15 | 14 |
|------------------------|--|-----------------------|---|--|
| 谷山市上福元町薬師堂 (部落内農道傍) | 谷山市上福元町永田 (部落内農道傍) | 谷山市塩屋町柏原(有 山長太郎氏宅) | 谷山市上福元町辻ノ堂 (部落内路傍) | 谷山市上福元町 堂園 (農道の傍) |
| 笠冠武士 立像(羽 織袴姿) | 地藏型立 像 | 笠冠農民 踞像 | 笠冠農民 立像 | 笠冠農民 立像 |
| 東 | 東 | 東 | 西 | 東 |
| | | 無 | | |
| 杓子 椀 | 杓子 箸 | 不明 破損 椀 | 杓子 鈴? | 杓子 不明 |
| 70cm | 62cm | 47cm | 64cm | 61cm |
| 35cm | 31cm | 28cm | 31cm | 32cm |
| | 享保六年辛丑四月吉日切手者、奉修講神、中口左口 門、谷川次郎、谷川七兵衛、山久作右衛門、台座俵 型谷山で最古の像 | 慶応三年の刻銘その他刻名なし | 大きな杓子と左手に鈴(神舞用)のようなものを持 つ、刻銘なし、紅殻塗りの石像 | 刻銘なし、台座は俵型造立年代不明であるが藪野の ものによく似ている宝暦年間のものか |

| | | | | |
|------------------------|--------------------------------------|---|--------------------------------------|--|
| 23 | 22 | 21 | 20 | 19 |
| (慈眼寺道路傍下) 谷山市上福元町木下 | (県道の傍) 諏訪神社 谷山市上福元町諏訪 | 落内農道傍) 谷山市上福元町奥(部 | 内農道傍) 谷山市中町入来(部落 | (部落内路傍) 谷山市上福元町新入 |
| 像 笠冠農民 | 境内笠冠 武士立像 | 立像 笠冠武士 | 立像 笠冠武士 | 笠冠武士 立像(羽 織袴姿) |
| 西 | 東 | 東 | 東 | 東 |
| 杓子 椀 | (形角) 杓子 椀 | 有 杓子 椀 | 有 杓子 椀 | 杓子 椀 |
| 72cm | 115cm | 80cm | 63cm | 81cm |
| 38cm | 55cm | 58cm | 30cm | 49cm |
| 宝暦六子天二月吉日、奉供春田之神 | 刻銘なし、笠冠がとれて胴体まで下っている。年代はまだ新しく大正時代造立? | 刻銘はないが像の横に大正十三年五月十六日竣工の奥牟田耕地整理記念碑があるのでこの時造立したものであると思われる顔面風化 | 享保十一年丙四月吉日、上野休次郎、入来甚兵衛、 □□□□台座は俵型 | 大正三年六月六日竣工の上福元塩屋の耕地整理記念碑の横に造立しているので造立年代はこの時と思う |

| | | | | |
|-----------------|---|---|--|---|
| 28 | 27 | 26 | 25 | 24 |
| 塚 谷山市下福元町錫山鎌 | 屋 谷山市下福元町錫山岩 | 農業試験場 谷山市上福元町鹿兒島 | (和田新田路傍公民館) 谷山市和田町和田塩屋 | 谷山市和田町 (和田名) (和田小北 側ススメ塚) |
| 軽石 | 石祠型 | 像 笠冠農民 | 碎石 | 座像 笠冠農民 |
| 東 | 北 | 南 | 東 | 南 |
| 無 | 有 | 無 | 無 | |
| | | 杓子 穂 稲の | | 杓子 鈴 |
| 55cm | | 80cm | | 50cm |
| 25cm | | 40cm | | 30cm |
| 開田のとき建立されたといわれる | 奉寄進、白石権十、白石吉蔵、藤崎覚太郎、岩屋行司、寺師園右衛門、文化十二年己丑十月吉日 | 昭和十六年修得、練習生助子一同と裏にある、鹿兒島市にあったものを農試移転の際この地に移転したとのこと。 | 自然石に田神と刻銘その他なし、昭和になってから和田開田により造立されたもの。 | 高さ七十種、巾四十三種の石祠の中にはいつている左手の鈴は神舞に用いる鈴のようである。刻銘なしこの形式は他に見られない、宝曆二年申九月吉日。 |

谷山市内神祠仏堂石塔碑一覽表

| | |
|---------|-----------|
| 30 | 29 |
| 谷山市中町上西 | 谷山市上福元町新入 |
| 石祠型 | 石祠型 |
| 東有 | 東無 |
| | |
| | |
| | |
| | |

| | |
|---|-------|
| 1 | 番号 |
| 水神 | 名称 |
| 谷山市上福元町勘場 菊池城址 | 所在地 |
| 石祠 | 形状 |
| 元治二年 (一八六五) | 建立年月日 |
| 菊池城址一番南側あおいの丘の麓で高い所にある、 菊池武光もこの水を使用したといわれる。 御所が原と菊池城址の間の中谷の井戸の水は懐良親 王の使用の水といわれる。 | 備考 |

第九節 神祠一覽表

| | | | | |
|--|--|---------------------------------------|--------------------------------------|--|
| 6 | 5 | 4 | 3 | 2 |
| 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 天 |
| 下福元町錫山奥ヶ野 | 山田町皇徳寺 | 山田町谷 | 上福元町北清見、永田 川畔 | 山田町鹿倉 |
| 石祠 | 墓石型 | 自然石 | 四角錐 | 自然石 |
| 年刻なし | 寛保二亥十一 月吉日(一八 一七) | 明治七年戊辰 八月 | 明治三十九年 九月 | 嘉永五年三月 吉日(一八五二) |
| 奥ヶ野牟田元にある。田を開いた時の水神らしい、 すぐ西側に水源がある。水神の横に桜の太木がある | 永田川の上流皇寺部落にあり近くに湧があり多くの タタリがあり、そのため建立されたと伝えられてい る。 | 裏側は田の神と刻名があり大村平蔵、同平次郎代の 名が刻記されている。 | 鹿児島郡伊敷村小野、石工頭、永留三左衛門、松元 榮吉、倉内新太郎。 | 通称永谷のおとし永田川の水をこのおとしにより山 田中村一帯七十町歩をうるおした。郡奉行、地方検 者、郷士年寄、郡見廻、庄屋、名主の名が刻記して ある。 |

| | | | | | |
|--------|--------------------------|-------------------------|-------------------------------------|------------------|-------------------------|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 |
| 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 |
| 和田町和田名 | 五ヶ別府町三重野 | 中町白山 | 下福元町錫山岩屋 | 中町辺田公民館内 | 下福元町五位野中組 |
| 自然石 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 | 自然石 |
| | 寛保三亥天十 一月吉日（一 七四三） | 寛政六年□月 廿六日（一七 九四） | 明治三十四年 九月吉日 | 延享元年五月 二十六日相中 | 弘化四年九月 十六日（一八 四七） |
| | 永田川上流三重野の井堰の横に立っている。 | 永田川の河畔に立っている。 | 岩屋川稚子流のすぐ近くのやぶの中にある。工事主任別府源一郎謹誌とある。 | | 前田川橋の北側に立っている。 |

第九節 神祠一覽表

| | | | | | |
|-------------------|-----------------|--------|-------------------|----------|-------------|
| 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 |
| 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 |
| 上福元町笹貫 | 中町上西 | 平川町浜平川 | 上福元町大窪 | 下福元町錫山城水 | 下福元町錫山岩屋坑 |
| 墓石型 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 |
| 年刻なし | 天保九戊戌三月十日（一八三八） | | 明治 年 月 日 | 年刻なし | 明治二十九年十一月吉日 |
| 波平刀匠笹貫井戸にたてられている。 | 奉寄進上西式才中とある。 | | | | |

| | | | | | |
|-----------|--------|------------------|-----------|----------------------|--------|
| 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 |
| 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 | 水 神 |
| 五ヶ別府町井手宇都 | 山田町大川内 | 下福元町錫山鎌塚 | 下福元町錫山七ツ谷 | 下福元町慈眼寺境内 | 山田町谷 |
| 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 | 石 祠 |
| | | | 文久三年 | 明治四年丁亥正月 吉日(一七六七) | 年刻なし |
| | | 開田のとき建立されたといわれる。 | 佐藤吉右衛門 | | |

馬頭神

| 番号 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---------|--------|---|------------------|---------------------------------------|--------------------|
| 名称 | 馬頭神 | 早馬式足 | 馬神 | 家畜大明神 | 馬神 |
| 所在地 | 下福元町玉利 | 下福元町影原 | 中町滝下 | 下福元町慈眼寺 | 上福元町春日 |
| 形状 | | 墓石型 | 石祠 | 石祠 | 石祠 |
| 高さ 巾 | | 53cm | | | |
| | | 28cm | | | |
| 建立年月日 | | 明治十二年十二月二日（一八九） | 明治三十六年 旧五月十七日 | 年刻なし | 昭和三年十二月 |
| 備考 | | 野頭角原健松方切と刻名があり、なお当時支配人加治屋惣次郎、当時村惣代畦地庄太郎、地租改正惣代中重熊助と刻名がある。 | | 慈眼寺址境内にあるが、戦前鹿兒島西駅付近にあったものをここに安置したもの。 | 福満畷八氏建立春日大明神境内にある。 |

| | | | | | |
|--|----------------|---------------|---------------------------------|--|------------------------|
| 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 |
| 牛馬頭神 | 馬神 | 馬神 | 馬頭観音 | 早馬どん | 馬神 |
| 上福元町柿木山 | 山田町皇徳寺 | 中町滝下 | 中町平馬場 | 中町上西 | 上福元町諏訪 |
| 墓石型 | 石祠 | 石祠 | 石祠 | 石祠 | 自然石 |
| | | | | | 1.3cm |
| | | | | | 58cm |
| 大正十五年一月三十日 | 明治三十二年旧六月十五日 | 明治廿六年旧五月十七日 | 安政二年卯五月吉日（一八五五） | 安政二年卯十月吉日（一八五五） | 明治四十二年十一月廿一日 |
| 上福元柿之木田発起人牛馬商川原次郎助外十二名、寄付者二十二名の名が刻されている。 | 下山田二才中と刻されている。 | 中村滝下中と刻されている。 | 中下二才中と刻されているが中村の上、下で全年に建てられている。 | 逆称もいどん、または早馬どんといわれる森の中にあり、奉寄進中村上相中と刻されている。 | 浜田長邦所有名馬諏訪山号之墓と刻されている。 |

その他神祠

| | | | | | | | |
|----|-----|--------|-----|--|--|------|----------------|
| 12 | 牛馬神 | 下福元町野頭 | 墓石型 | | | 年刻なし | 台石に牛馬の浮彫がしてある。 |
|----|-----|--------|-----|--|--|------|----------------|

| 番号 | 名称 | 所在地 | 形状 | 高さ | 大きさ | 建立年月日 | 備考 |
|----|-----------|---------|----|----|-----|--------------------|----------------------------|
| 4 | 神 稲荷大明 | 中町辺田 | 石祠 | | | 文化十四丁丑九月吉日(一八一七) | 講中 |
| 3 | 奥竜藏権現 | 上福元町奥 | 石祠 | | | 明治四十四年十月十五日 | 奥元直、畷助、富迫周次郎建設 |
| 2 | 弁財天 | 中町滝ノ下 | 石祠 | | | 嘉永六年丑己八月二十一日(一八五三) | |
| 1 | 蛭子 | 上福元町下松崎 | 石祠 | | | 天明九己酉二月吉日(一七八九) | 以前東馬場にあったものを現在地に移転したといわれる。 |

| | |
|----------------------------------|-------------------------|
| 6 | 5 |
| 伽藍神 | 伽藍神 |
| 下福元町慈眼寺 | 中町滝ノ下 |
| 円筒形 | 石祠 |
| 45cm | |
| 28cm | |
| | 寛政十二年十一月七日(一八〇〇) |
| 門前中家内安全、□□□超宗代とある。慈眼寺のガラン神といわれる。 | 滝ノ下帝釈寺のガラン神といわれる浦村中とある。 |

石 敢 当

| | | | |
|-------------------------|-----------------------------------|----------------------------|----------------|
| 3 | 2 | 1 | 番号 |
| 石敢当 | 石敢当 | 石敢当 | 名称 |
| 上福元町北麓 | 中町辺田 | 中町辺田 | 所在地 |
| 石垣の一部分 | 石垣の一部分 | 四角柱 | 形状 |
| 65cm | 55cm | 67cm | 高さ 巾 大きさ |
| 31cm | 30cm | 31cm | |
| 年刻なし | 年刻なし | 年刻なし | 建立年月日 |
| 三叉路につきあたりにある。石散当と刻してある。 | 永谷氏宅入口にあるもの、門の入口南側向に建てられて石垣の中にある。 | 辺田公民館のすぐ横の三叉路にある石散当と刻してある。 | 備 考 |

第九節 神祠一覽表

| | | | | | | | |
|---|-------|-----|--|--|--|--|--|
| 1 | 番号 | | | | | | |
| 供養塔 | 名称 | | | | | | |
| 上福元町見寄 | 所在地 | | | | | | |
| 石祠 | 形状 | | | | | | |
| 137cm | 高さ | 大きさ | | | | | |
| 76cm | 巾 | | | | | | |
| 月吉日(永享2) □□六戊年霜 | 建立年月日 | | | | | | |
| 願主 名越千右衛門 奉造立者見寄門 覚石衛門 作者 中納長右衛門 木田鏡音 | 備考 | | | | | | |

供養塔 仏塔

| | | | |
|------------------------|---------------------------------------|----------------------------|-----------------|
| 7 | 6 | 5 | 4 |
| 石敢当 | 石敢当 | 石敢当 | 石敢当 |
| 山田町立迫 | 下福元町錫山東谷 | 上福元町磯辺 | 山田町立迫 |
| 自然石 | 四角錐 | 四角錐 | 四角柱 |
| 65cm | 58cm | 58cm | 90cm |
| 30cm | 26cm | 22cm | 32cm |
| 年刻なし | 年刻なし | 年刻なし | 天保七年丙申 四月穀旦 |
| 道路横になげられているが前は三叉路にあった。 | 畑の奥におしやられているが以前は旧道の三叉路にあった、石散当と刻してある。 | 伊作街道と国道との三叉路にある。石神散と刻してある。 | 立迫部落海老原氏宅北門にある。 |

| 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | |
|-----------------------|-----------------------------------|-------------------|--------------------------|---------------------|--------------------------------------|
| 地藏尊 | 塔 庚申供養 | 塔 石壇供養 | 供養塔 十八夜待 二十三夜待 | 待供養塔 二十三夜 | |
| 下福元町古屋敷 | 下福元町坂上 | 山田町立迫 | 山田町大川内 | 山田町一丁山 | |
| 墓石型 | 円筒形 | 自然石 | 墓石型 | 墓石型 | |
| | 64cm | 80cm | 89cm | 65cm | |
| | 28cm | 37cm | 34cm | 42cm | |
| (貞享二年丑二月 吉日一六八五) | 延享四丁卯年 二月時正日 (一七四七) | 文化四年丁卯 年(一八〇七) | 寛政六年寅十一 月吉日(一七九 四) | 安永三年十一月 吉日(一七七四) | はないか (一六七八) |
| 講衆男三十 女〇七 奉造立供養庚申者 | 口之住人 石切金兵衛 奉庚申供養施主男廿一人 女九人 肥後山 | 隈元万助の造立 | 大河内門 女相中の寄進とある。 | 福留組 女相中の寄進とある。 | 坊中に板碑 阿弥陀如来の梵字あり 谷山五郎隆信の墓とよばれている。 |

第九節 神祠一覽表

| | | | | | | |
|---------------------------|----------------------------|--------------|--------------------------|---------------|---------------------------|------------------|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 |
| 三宝荒神 | 六道能化 地藏王 | 斎魂碑 | 癩瘡大神 | 愛宕 麻利支天 | 観音菩薩 | 交通安全 地藏菩薩 |
| 山田町大川内 | 地 山田町大川内明楽寺墓 | 上福元町田辺(県農試内) | 下福元町慈眼寺境内 | 下福元町笠松 | 山田町大川内 | 上福元町永田 |
| 自然石 | | | 自然石 | 四角錐型 | 仏像型 | 仏像型 |
| | | | | 51cm | | |
| | | | | 39cm | | |
| 元禄九丙子年 十一月吉日 (一六九六) | 宝曆十一年己 秋八月十三日 (一七六一) | | 明治十八年酉 十月五日 (一八八五) | □□年三月 吉日不明 | 享保十六辛亥 天二月吉日 (一七三一) | 昭和三十九年 十月二十七日 |
| 願主久永藤吉 三尊の梵字が刻んである。 | | | 奉建癩瘡大神 | 平清香建嵩 | 奉造立 久永仲右衛門 | |

| | | |
|--|---------------------------|---------------------------------|
| 16 | 15 | 14 |
| 寄進碑 | 寄進碑 | 神 |
| 中町辺田 | 中町白山白山神社境内 | 下福元町古屋敷 |
| 手洗鉢 六角錐 | 四角錐形 | 四角柱 |
| | | 160cm |
| | | 37cm |
| | 正徳五乙未歳 九月吉祥日 (一七一五) | 弘化三季丙午 九月□日 (一八四六) |
| 寄進者川畑九之助藤原清貞外十一名戊辰役 従軍武運長久のため寄付と刻されている。 | 奉寄進御宝前とある。 | 再建神の陰刻郷士年寄 名越玄五右衛門 山下平左エ門外二名 |

石塔碑

| | |
|--------------------|-----------|
| 1 | 番号 |
| 波平刀匠 清見寺遺蹟 | 名称 |
| 上福元町稲田 | 所在地 |
| 自然石 | 形状 |
| | 高さ 大きさ |
| 昭和十五年 | 建立年月日 |
| 皇紀二千六百年記念、谷山町史跡顕彰会 | 備考 |

第九節 神祠一覽表

| | | | | | |
|------------------|-------------------|----------------|-------------------------------|-------------------|--------------------|
| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 |
| 碑 寿菴松之 | 松記 新樹寿菴 | 寿安松碑 | 跡 治宗近遺 三条小鍛 | 戸 波之平刀 匠笹貫井 | 匠之遺跡 波之平刀 |
| 下福元町坂ノ上 | 下福元町坂ノ上 | 下福元町坂ノ上 | 五ヶ別府町三重野 | 上福元町笹貫 | 上福元町波ノ平 |
| 墓石型 | 墓石型 | 自然石 | 自然石 | 自然石 | 自然石 |
| 66cm | 1.4cm | 1.5cm | 1.3cm | | |
| 50cm | 30cm | 52cm | 25cm | | |
| 年刻なし | 文化四年丁卯 冬(一八〇七) | 昭和十五年二 月十一日 | 昭和十七年庚 二月 | 年刻なし | 昭和十五年庚 辰二月 |
| 終戦後谷山郵便局長、大脇為明建立 | 向章記、児玉貞俊書 | 谷山町史跡顕彰会 | 町史跡顕彰会 皇紀二千六百年記念従、木藤、長誌、谷山 | | 皇紀二千六百年記念、谷山町史跡顕彰会 |

| | | | | |
|----------------------------------|----------------------|--------------------------------|---------------------------|-------------------------------|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 |
| 石橋破損 造營碑 | 神武天皇 御駐蹕伝 説地谿山 | 古屋敷名 頭屋敷大 楠之記 | 征西將軍 懷良親王 御所記念 碑 | 陣之尾城 址 |
| 下福元町慈眼寺 | 上福元町柏原 | 下福元町五位野 | 上福元町勘場 | 下福元町木城 |
| 自然石 | 記念碑型 | 墓石型 | 記念碑型 | 自然石 |
| 1.25cm | | 1.2cm | | |
| 30cm | | 56cm | | |
| 享保十二丁末 天闔正月廿三日 (一七二七) | 昭和十五年秋 | 文政十三年庚 寅十一月再建 (一八三〇) | 大正十一年十 二月 | 昭和三十三年 三月吉日 |
| 慈眼寺境内にある石橋及破損観音以講銀造 営功量現住白峰記之 | 鹿兒島県知事指定、柏原神社境内にある。 | 石垣普請方掛、福昌寺役人代鎌田強兵衛、 右同鑑代、大真 | 大勲位公爵、松方正義謹書 | 谷山町郷土史研究会代表者黒木弥之進建之 安田敬蔵謹撰 |

| 16 | 15 | 14 | 13 |
|--|---|---|-------------------------|
| 功農靈神 祠記碑 | 石疊喜捨 碑 | 別墅祠廟 記碑 | 石橋新記 碑 |
| 山田町谷 | 下福元町慈眼寺址境内 | 五ヶ別府町饅頭石 | 下福元町慈眼寺 |
| 墓石型 | 自然石 | 四角柱石 | 自然石 |
| 93cm | | | 1.5cm |
| 68cm | | | 40cm |
| | 明和四年丁亥 正月吉日 (一七六七) | | 享和三癸亥五 月吉日 (一八〇三) |
| 碑文の最後に本藩大監察赤松則方謹誌とあるし碑文に慶安四年の文字も見える。谷山地頭赤松氏別荘に建っている。 | 泉水の中にあり囲いがしてあるので裏側を見ることができない、錢五百文、四元作兵衛、酒屋仲助、石疊喜捨現住元帥とある。 | 饅頭石の横に建ててあるが林氏の領地にあったものを後年ここに建てたらしい、碑文の最後に天保十五年甲辰十月二十一日米昌意撰としてある。 | 奉再興石橋新造、寄進人数補陀山慈眼寺、竜眼 |

| | | | |
|------------------------|------------|--------------------|----------------------------------|
| 20 | 19 | 18 | 17 |
| 松青学舎 記念碑 | 御神幸之 地 | 射場之跡 碑 | 錫鉞兎見 之地碑 |
| 上福元町下松崎 | 和田町一番組和田海岸 | 五ヶ別府町川口宮川小 学校校庭 | 下福元町錫山地福山 |
| 四角錐石 | 自然石 | 自然石 | 四角柱石 |
| | | 1.15cm | 1.64cm |
| | | 27cm | 33cm |
| 明治三十六年 九月 | 年刻なし | 昭和九年九月 二十日 | 昭和三十一年 十二月十六日 |
| 創立の趣旨および創立委員の名が刻記してある。 | 伊佐智佐神社 | 宮川小学校、校庭に木藤長氏建立 | 三百年記念祭協賛会建之、明暦元年霜月十五日八木主水佑元信とある。 |

